チートな人狼がDLされました

呼び水の主

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウェアウルフに転生してオルガマリー所長をどうにか助けようとするお話。

※ネタバレ、描写の簡略化によりＦＧＯ第１部クリア推奨となっております。

目次

プロローグ ―――― 1
炎上汚染都市冬木
第1節　矮小なる銀狼 ―― 12
第2節　Ｆａｔｅ ―――― 19
第3節　狼とロケットパンチ ― 25
第4節　汝は人狼なりや？ ―― 34
第5節　固有結界の檻 ―――― 43
第6節　人間性を捧げよ ―――― 54
第7節　大型決戦礼装Ｄ型 ―― 62
第8節　穿つウルフ・ウィズ・ドリル 68
第9節　女の話をしよう ―――― 75
第10節　叫べ！ロード・カルデアス ―――― 84
第11節　そして星が流れた ― 93
第12節　昨日とは違う世界へ 106
邪竜百年戦争オルレアン
第1節　流浪の女騎士の噂 ―― 117
第2節　フランスふたり旅 ―― 122
第3節　今を生きる英雄 ―――― 129
第4節　鉄壁のヴォークルール 135
第5節　血濡れの吸血鬼 ―――― 146

第６節　鮮血の伝承　―――――　156
第７節　竜の魔女現る　―――――　168
第８節　ダンス・ウィズ・クイーン　177
第９節　悪意は親愛の中に　―――――　185
第１０節　赤い瞳のオルガマリー　194
第１１節　覚悟完了　―――――　204
第１２節　臨戦　―――――　215
第１３節　挑戦　―――――　222

プロローグ

「どうぞ。次の転生者の方、お入りください」

面接官から入室を促され、私はオズオズと面接室へと足を踏み入れた。

「ではそちらの椅子へおかけください」

私は面接官と一つの机を間に挟む形で向かい合った。机にはいくつかの書類が広げられている。『はじめての転生のしおり』『天国案内パンフレット』『無機物転生における意識確立の手引き』ｅｔｃ…。

「それで単刀直入に申しますが」

面接官が一度手元の書面――おそらく私の生前の履歴が記されていると思われる――に目を落とし、それから目だけで私の顔を伺った。

「あなたの人生歴を検討させていただいたところ、人間への転生はできないと結論付けさせていただきました。申し訳ございません」

人間への転生は、できない。

私はその言葉に、特に絶望も諦観も抱かなかった。現実味がなさ過ぎるからだろうか。そも、私の今いるこの場所自体、現実味なんてカケラもないのだが。

そう、何せここはいわゆる天国――死後の世界――なのだから。

申し遅れた。私の生前の名は中島とおる。２７歳没。死因は思い出せない。というのも、死者のメンタル保護の観点がどうのこうということで、死因に関する記憶を取り除く処置が私に施されているためだ。

同意書にサインをすれば開示請求が可能らしいが私はなんだか恐ろしくてサインはしなかった。他殺とか、凄惨な自殺だったりしたらどうしよう。

まあそういうわけで、私は一度死に、この曖昧漠然とした天国というフワフワゆるゆるな名前を冠している場所へと天使に連行された。

私が天国へと連れて来られる間にも紆余曲折あったわけだが、まあそこはいい。

そうして、えらく事務的な手続きを経て、今一度新たな人（？）生を始めさせられようとしていたわけだが。

面接官の金髪碧眼の天使さん―ガタイのいいイケメン。たぶん２０台前半くらい。なぜかマッシュポテトとか作るのがうまそう―が言葉を続けた。

「そこであなたの転生先候補ですが、いくつかこちらでリストアップさせていただきました。ご覧ください」

私は机に広げられた書類の中から示された、一枚のリストに目を通した。内容は以下の通りであった。

『運送トラック（大型）。キャリアを積めば転生トラックの仕事が回ってくることもあります。先輩の言葉「給油される瞬間が、この仕事で一番充実感を感じる時ですね」オススメ度★★★★』

『鶏（採卵鶏）。毎日楽しく卵を産みましょう!!先輩の言葉「短い一生を延々と同じ生活サイクルで過ごすことで、強靭なメンタルが身につきますよ！」オススメ度★★★★』

『単一電池。……解脱できる可能性が最も高いと評判の……精神崩壊の可能性が最も高く……オススメ度★★』

『コピー機。……紙を排出する喜びに目覚め……オススメ度★★★』

『鹿。自分のフンで道を埋め尽くすことに生き甲斐を感じます。人間の女性とのスキンシップも可能です!!!オススメ度★★★★』

ｅｔｃ…

「ロクなものがないじゃないですか!!!」

私は思わずリストを机に叩きつけた。

つーかやたら無機物多いな!?

あと、鹿ァ！なんなんだお前……。フンを撒き散らす喜びに目覚めるのはちょっとやばいと思う。健全に生きてる鹿さんに失礼だよ。

確かに彼らは色んなもんを口にしてはフンを作ろうとするよ。

自転車のサドルを咥えてた時には私は自分の目を疑ったね。流石にサドルをウンチにするのは無理だろうよ。でもＪＫのサドルなら私も咥えたい。なんならベロベロしたい。そうか、鹿なら合法的にＪＫのサドルをベロベロできる可能性が微粒子レベルで存在する……？いや、しかしＪＫのサドルだと思っていたものが実はオッサンのサドルだったらどうする……？私ならその場でうんち撒き散らして死ぬね。やっぱ鹿ダメだわ。

そんな事もわからんとはな。へ、所詮はケダモノよ……。そのケダモノが私の転生リストに載ってるけどなァー！どういうことなんですかねぇ！ドンッ！

「しかしあなたの人生歴ではこのような転生先が最大限でして。私個人としましては単一電池がオススメですよ。解脱の可能性が最も高く、できなかった場合でも来世は人間であることが確約されていますので」

「単一電池とか嫌すぎる……。想像するだけで虚無りそう。というか解脱って……ここキリスト教的な天国じゃないんですか」

「それはあなた達が作り出した認識ですので。三次元世界のあなた方にも理解できる言葉にすると、解脱となる訳です。解脱すると魂が高次元へと押し上げられて、新たな生命体としてまた次の段階にある輪廻の輪に組み込まれます」

「逃げ場がない！」

大いに狼狽する私を見かねてか、天使さんはもう一枚の書類を私に手渡した。
見出しに大きく赤字で「二次元世界」と記されいる。
「……これは?」
「そちらは二次元世界への転生リストです。現在のあなたの存在界位は三次元ですので、一つ下のランクということになりますが」
私はリストにサッと目を通してみた。
『獣人』
『巨人』
『亜人』
「なるほど、一応人間に近い候補がこちらにはあるということですか」
二次元世界ということは、つまり私たちでいうところの漫画やアニメの世界へ転生できるということであろうか?
獣人、巨人、亜人。どれもいずれかの媒体で目にするメジャーな生物だ。思考はおおよそ人間と同じであることが多く、身体の作りもそう変わらないはず。やっぱり、転生するなら人間に近いものに転生する方がいい。
単一電池とか採卵鶏とか、消費社会の歯車感がヤバイ。たぶん心がもたない。
「せっかくなので私はこの獣人を選びます!」

私の言葉に、天使さんは苦笑いした。
「よろしいですか？二次元世界への界位落ちとなりますが」
「構いません」
即答する。単一電池とか、鶏とかよりはマシだろう。運送トラックは、ちょっと惹かれない訳でもないのだが。鹿？しらねぇなぁ……。
「なお、獣人といっても種族や登場作品の種類は膨大です。転生先はそれらの中からランダムとなりますがそれでも構いませんか？」
あ、今登場作品って言ったな天使さん。やはり三次元世界の私たちでいうアニメや漫画の世界に転生するという認識で間違いなさそうである。
「わかりました。お願いします」
「そうですか。それでは、こちらの契約書にサインをお願いします。はい、ありがとうございます」
天使さんは契約書をファイルにしまい込むと、おもむろに立ち上がって言った。
「それではただいまより、ドキッ！転生！世界決定！チキチキルーレットを始めます！」
パーフー！間の抜けた音がした後、天使さんが台詞を言い終わる前に目の前の床が開いてルーレットがせり出してきた。たわしとかパジェロとかが当たるアレだ。
私は天使さんにダーツを一本押し付けられて、投擲ラインまで連れてこられた。や

だ、天使さんの手のひらって大きいんだ……キュン。

なるほどこれで矢が刺さったところに書いてある世界に転生するわけだな。やってやりましょうじゃんね。そぉれい！ドスっ！パンパカパーン！

「あ、おめでとうございます。あなたの転生先はＦａｔｅ／ＧｒａｎｄＯｒｄｅｒの世界に決定しました」

ＦＧＯ！聞いたことがある！

知っているのか私!?

というかプレイしていたことがあるもんね！

モッピー知ってるよ！犯人はレフ。地球は狙われている！素人は黙っとれ……。

いや、しかし終局特異点まで駆け抜けた私がＦＧＯ世界に転生するとはアドバンテージがやばくないですか？これは私、来世は結構やるかもわからんね。

いやいやまて考えろ。下手したら転生してすぐ人理焼却に巻き込まれてお陀仏。

ん、んー？いやけど私獣人だしな。たぶんウェアウルフとかトナカイマンとかその辺だわ。

それなら人理焼却後の雑魚キャラの１人だから安全じゃんね。安心安心……。ってそんな訳ねーだろ、すぐに死んでしまうわ。獣人さんはサーヴァントに小突かれたら木っ端微塵に爆発四散してしまうか弱い生き物……。ゲーム中ではそこそこ戦えてる

風に見えるけどアレはあくまでゲームだからじゃんね？というわけでそのまま放り込まれたら私すぐ死んでしまうんですけどそこんとこどうなんですかね。私は満面の笑顔をうかべながら天使さんにすり寄った。へへへ、やっぱり私にも転生特典とかあるんでございましょう？

「転生特典、ですか。ええ、特典を付けることは可能です。しかしその場合、相応の対価を支払っていただくことになりますが」

まあ、予想はできていた。私の前世歴を見て転生先を単一電池と鹿に絞ってくるような連中だ。タダで転生特典なんて虫のいい話ある訳がない。

で、その対価ってなんです？

「あなたの存在界位の剥奪ですよ。あなたは二次元世界という、三次元世界の人間が生み出した想像の世界に永遠に囚われます。あちらでどれだけ充実した人生を送ろうと、三次元世界へは二度と転生できません」

ふーん。

それってデメリットなんですかね？

二次元世界と三次元世界、それぞれそこに生きている生き物にそんな自覚はないんでしょう？これまで三次元世界に住んでいた私がそうだったように。それに。

「それに？」

天使さんが首を傾げた。トゥンク……。
「どうせ私が今まで生きてきた三次元世界とやらも、もっと高次元の存在が想像した産物とかそんなところなんじゃないんですか」
私はドヤ顔で言った。
天使さんが微妙な顔をした。あ、違うなこれ。あーいや、まあ次元がどうとか私専門外なんでぇ……。詳しくはよくわからないんですけどぉ……。
私は日和った。
「三次元世界が一体どのようなものなのか。それはあなたがより高次元の存在に転生した時理解できますよ。まあ、それももう叶いませんが」
天使さんが憂を含んだ表情で言った。
「とても残念です。私たちの使命は個々の魂を転生の輪によって循環させ、それによって得られるエネルギーを用いて魂の存在界位を高めること。しかし今回の私の行いは、それに背くことになってしまう」
なるほどね。完全に理解した。よくわからんが。
なんだか悪いことをしたなぁってのは理解した。私のワガママで天使さんを困らせてしまうのは申し訳ない。けど、無機物とか鹿はどうしても勘弁なんですよね。
「お気になさらず。魂の行先は、その魂自身が決めることです。あなたの決断はあなた

だけのものだ。誰に止められるものではない」
　天使さんがそう言うと、私の身体が白い光に包まれ始めた。え、なぁにこれぇ。もう天使さんの顔も見えないんですけど。眩しいけど、眩しくない不思議な感じだ。
「存在界位の低下という困難な道を選択するとは、本当に物好きな魂ですね。――ええ、あなたがこれから行く先は、道しるべのない暗闇の獣道となることでしょう」
　もう顔も見えなくなった天使さんが、なんかそれっぽい事を言い出した。
　道しるべのない暗闇の獣道、か。詩人ですね、天使さん。それより、転生特典はどうなったんですかね。
「目が覚めたら自ずとわかるでしょう。あなたの魂に刻まれた力。それを持ってなにを成すのかは、あなた次第です」
　ああ、それを聞いて、安心した――
　あと今更ですけど、特典って選べないんだ……。
　ああ、ガッカリした――
「最後に一つ、あなたに助言を授けましょう。報われぬ人生を歩み、死してなお獣道を歩む者よ。――星を集めなさい。あなたの道を照らす、強い星の光を」
　天使さんの声が遠ざかっていく。
　私の視界は真っ白に染め上げられ、不思議な浮遊感を味わいながら朦朧としていく頭

で未来への想いを馳せた。目を覚ましたら、きっとそこは見知らぬ土地で。

――星を集めなさい。あなたの道を照らす、強い星の光を――

天使さんの言う通りなら、多くの困難が、出会いが待ち受けているのだろう。

――次にココに戻ってきた時には、死因の開示請求を笑って出来るくらいにはいい死に方をしよう――

私はそこで、意識を手放した。

私の存在が泡沫となってどこかに溶け込んでいく。それは深く、深く。染み渡るように。

炎上汚染都市冬木
第１節　矮小なる銀狼

コンクリートの大地を駆け、倒壊したビルの壁を蹴り、白銀の体毛を靡かせて私は跳んだ。

ここは炎上汚染都市冬木。

紅蓮の業火に巻かれた、灼熱の地獄。

今生初めて見る世界は、一面が赤に塗りつぶされていた。

「オオオオオッ！」

私は両腕をがむしゃらに振り回しながら吠えた。迫り来るスケルトンを徒手空拳で蹴散らしながら、ひたすらに走り続けてもうどれほどだろうか。

「後から後から湧いて出てくるな！」

ＦＧＯの馴染み深いエネミー、スケルトン。

その名の通り骸骨だ。錆びた剣や朽ちかけた弓を手に、ボロ布のような衣服の残骸を身に纏い生者を襲う。

どうでもいいが、この骨の由来はなんなんだ？こいつら、何処から来て何故人を襲う

？

あるいは理由などないのかもしれない。

ゲームを作るにあたって製作側に都合よく用意された敵キャラクター。

三次元世界の人間が、このＦＧＯという世界を創造するにあたって作り出したトに仇すモノ。

「鬱陶しいんだよ！」

だったらちゃんとヒトを襲いなさいよ！

私はウェアウルフだから、メタ的に考えたら味方でしょうが!!

――あ、申し遅れましたが私、ウェアウルフに転生しました。

その体躯はデカく、雄々しく、それでいてアスリートのように無駄がなく洗練されていた。まさに野生の獣。全身は白銀の体毛に覆われていて、幻想的な雰囲気を漂わせている。

顔は狼、身体は人間。手足の指はちゃんと5本ある。青い瞳に鋭く伸びる犬歯。ピンと立った耳がチャームポイントかな。

あとちゃんと言葉を喋れる。声帯どうなってんだ。これも転生特典なんですか？

そう、転生特典ね。

この世界で目覚めてすぐに確認したんだが、どうやら「微小の奇跡を発動できる肉体」

が私に付与された特典らしい。

体内に溜め込んだ魔力を奇跡としてこの世界に具現化する。要するに小規模ながら聖杯の真似事ができるってことでいいのかな。素晴らしいとは思わんかね！こんな破格、ともすれば世界観の崩壊に繋がりかねない能力が与えられるなんて、魂の存在界位の剥奪という代償は、だいぶデカかったみたいだな。今更ながら、ちょっと怖くなってきたケド……。

過ぎたるは猶及ばざるが如しにならないことを祈るばかりだ。過ぎたる力は自分を滅ぼしかねない。元はただの一般人だしな。まあそれはそれとして今生を楽しく生きるために力はバンバン使いまくるけどネ！要は心構えの問題よ。

ちなみに、今の内包魔力はＭＡＸだ。

今なら「皇帝特権」よろしく自分に任意のスキルを付けたりなんかは朝飯前だ。

うわぁワクワクするなぁ！寝る前に自分がサーヴァントのスキル持ってるとしたらどれがいいかな～って考えてたのが実現するんですよ？これで興奮しないわけがない！

色々妄想してたけど、やっぱりまずはコレですよね！スケルトンに囲まれているし丁度いい！スキル付与――『無窮の武練』!!

力任せの雑なアクションなんざ二流。この洗練された技術を見よ！これが玄人じゃ

あ〜!!

「うおおおお!」

しかし、特に何も起こらなかった。

「ほげぇぇぇぇぇ!!!」

スケルトンの波に喜び勇んで飛び込んだ私は見事に数の暴力に押され弾き飛ばされた。

なんでや!なんで発動しないの無窮の武練君!一つの時代のトッププクラスの武技をどんな状況でも十全に発揮できる（意訳）んとちゃうんか!!

いやまさか……。そもそも前提が?

この身で一度、その武技を持って一つの時代に君臨しないとダメなのか……?私にはその経験がない。というか武術武芸の経験すらない。

つまり、この「微小の奇跡を発動できる能力」は、なんでもできる能力じゃない。無いところからは引っ張れないんだ。ゲェーー!

スケルトンの群れが私を圧殺しようと間近に迫る。さっきから余裕ぶっこいてたけどこれは本格的に死ぬ。やばい。

私は本能的に一つのスキルを自らに付与した。

『魔力放出』!!!

「アオオオオオォッン!!」

ドパァンッ！という炸裂音とともに、私の雄叫びに乗ってこの身に宿る魔力が周囲の空間に文字通り放出された。魔力が暴力的な音の圧力となって無差別に空間を揺さぶり、スケルトン達を木っ端微塵に粉砕する。なんたる音響兵器。

私はなおも追いすがる残りのスケルトンから逃走し、ようやく一息つけそうな、崩れかけのビルの陰に潜り込んだ。

結局、力任せで雑な方法になってしまった……。しかもこの魔力放出、魔力を溜め込んで奇跡を使う私の能力と相性最悪じゃねーか。

というわけで魔力を補填、補充するスキルが欲しい。第一候補はフランちゃんが持つガルバニズムだ。生体電流の操作、魔力の自在変換及び蓄積。しかもこいつは実体のない攻撃へのバリアーにもなる！

「ガルバニズムをおくれー！」

うおおおおお！

とおるは『魔力逆流』を習得した！▼

「なんでさａａａａａａａａａａａａａａａａａ!!!」

いやけど悪くない！悪くないよ！

たぶんアレだな。『ガルバニズム』は電気を操作する能力がないとダメなんだ。この

スキルを持っているのはフランちゃんことフランケンシュタインとニコラ・テスラ。両名とも電気を操ることができる。けどただのウェアウルフの私にそんな能力はない。なので類似した能力の『魔力逆流』が手に入ったわけだ。

この『魔力逆流』、どうやら周囲の魔力を吸い上げる能力らしい。一言で表すなら魔力ダイソン。いいね、シンプルで。『ガルバニズム』の便利すぎる能力に未練はあるが、まあそう都合よくはいかないってことだ。

そういうわけで、ここに通常のウェアウルフを遥かに凌ぐ吸引力を持つ、次世代のダイソンが誕生した――

「キャアーーーーーー!!!」

私が自身のダイソン化に密かに肩を落としていると、絹を裂くような悲鳴が私の大きめな耳を震わせた。人間の女の声だ。ＦＧＯ、序章、炎上都市冬木、女の声。まず間違いない。

オルガマリー・アニムスフィア。この冬木でレフ教授に殺される運命の、報われない悲劇の女だ――。

私は転生者だ。故に知る。彼女は既に詰んでいる。

私がカルデアスに呑み込まれる彼女を救ったところで、カルデアで肉体を失った彼女は、この冬木という特異点からは帰還できない。

だが、困っている人を見捨てられるほど、私は薄情でもない。今生出会う、初めての人間でもあることだし。ここで見捨てる選択肢は、ない。その最期を覆さないかぎり、彼女に対する全ての行いが、偽善となるとしても。

私はビルの陰から飛び出して、声の方向に駆け出した。死ぬ運命にある人間を、それを知りながら場当たり的に助けることに対する罪悪感と、この身に宿る奇跡ならばあるいは、という微小の可能性への淡い期待を胸に抱えて。

第2節　Ｆａｔｅ

「な、なんで私ばっかりこんな目にあうのよ！」

オルガマリー・アニムスフィアは群がるスケルトン達を魔術による攻撃で退けながら、燃え盛る冬木の街をあてもなく駆けていた。

カルデアで冬木へのレイシフトの陣頭指揮をしていた筈なのに。気がつけばこの燃える街に一人、オルガマリーは放り出されていた。あまりにも突然すぎて、まるで事態が理解できない。そしてオルガマリーが混乱から立ち直るのも待たずに、街のあちこちから湧き出たスケルトンが彼女を襲った。それからここまで、彼女はずっと走り続けていた。

「はぁはぁはぁ、はぁ……キャ!?」

オルガマリーは瓦礫に足を取られて盛大に転倒した。彼女の周りを、数多のスケルトンが取り囲む。四面楚歌。

「い、いやぁ……」

彼女は優秀な魔術師であり、本来ならスケルトンの数十体など軽く蹴散らせただろう。

しかし、父親の急死による突然の家督相続や所長という慣れない役職へのストレス、マスター・レイシフト適性がないことに対する周囲からの蔑み、そしてなにより、この果てのない地獄のような光景によって、彼女の心は彼女の自覚ないままに、もう半ば折れかけていた。

もう、ここで終わらせてもいいかもしれない。一瞬そんな思いが彼女の頭をよぎった。同時に、こんなところで終わってたまるか！という激情が彼女の中で爆発した。

「ふざけないでよ！私はまだ終われない！こんなところでまだ終われないのよ！」

オルガマリーは奮起した。ありったけの気力を動員し、心を奮い立たせる。彼女のそれは虚勢に過ぎなかったが、ともすれば見せかけを本物にする程の圧すら伴っていた。そうだ、こんなところでは終われない。私はまだ――。

オルガマリーの魔術がスケルトンをまとめて薙ぎ払った。

オルガマリーは肩で息をして、それからようやく自分が目前の危機から脱したことを実感した。

もう走らなくていい。

もう逃げなくていい。

これから何処かで腰を据えて、ゆっくりと事態を解明する。

カルデアとの通信方法を考えて、いや、ここが冬木ならＡチームが来ているはずだ。

彼らと合流すればいい。Aチームはレイシフト適正者の中でもとりわけ優秀な7人と、1人。

そして、レフ。彼なら必ず、私を助けに来てくれる。

希望が見えてきた。

その時だった。何処からともなく蕩けるような、粘りつくような女の声が聞こえきた。

「フ、フフフ……。ああ可笑しい。久方ぶりに生きた魔術師を見たと思えば、まさかこのような醜態ぶりとは」

スケルトン達の包囲が崩れた向こう側、ひび割れた電柱の上から、身の丈ほどもあるハルペーを携えた黒衣の女がオルガマリーを見下ろしていた。その女の眼を見た瞬間、いや、その女に視られた瞬間にオルガマリーは己の全身が怖気立つのを感じた。

「う、うそ……サー、ヴァント……!?」

それは伝承に残る過去の偉人・怪物達がこの世に落とす影法師。令呪によってその身を縛り、英雄を文字通り使い魔とした破格の存在。

「漂流者は生かして返すなとのことですが、ただ殺してしまうのは勿体ない。貴女は私の満足いくまで、むしゃぶりつくしてから殺しましょう」

「……ッ!?」

その女の言葉で、オルガマリーの心は完全に折れた。
殺される。
サーヴァントに抗う？ありえない。
魔術師だろうが只人だろうが、等しく命を奪われる。それほどの存在なのだ。
私は殺される。
甚振られる。
嬲られる。
壊される。
嫌だ！いやだイヤだイヤダ！
絶望がオルガマリーの心を蝕んでいく。
それを見て、女の眼が笑った。
「レ、レフ！助けて!!」
レフ・ライノールの姿はない。
「誰か、誰か!!」
この燃え盛る街には彼女を助ける人間はおろか、生者１人残っていない。
「誰でも、いいからッ――!!」
女サーヴァントが跳んだ。

長大な柄を大きく振りかぶり、弧を描くように伸びた刀身が虚空に光る。
「助けてよーーーーー!!!」
――銀色の風が吹いた。
「とぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉう!!!」
何か大きな叫び声が聞こえるのと同時。
女サーヴァントが吹き飛んだ。目の前で。
崩れかけのビルに突っ込んで、その勢いでビルは完全に崩壊した。
ズンッ！という音を立てて、オルガマリーの前に銀色のフサフサした背中が着地した。
「な、なに……が……？」
その背中は大きく、雄々しく、それでいてアスリートのように無駄がなく洗練されていた。ソレは白銀の体毛に覆われていて、幻想的な雰囲気を漂わせている。右足からはシュウシュウと音を立てて蒸気が立ち昇っていた。
その銀色のナニカは、ゆっくりとオルガマリーに振り返った。人間のカタチをした別のナニカ。振り返ったソレは、首から上が狼だった。
――ウェアウルフ。
まだ世界に神秘か残っていた時代を生きた、魔獣の一種。

完全なる獣の風貌、けれどその青い眼は理知的で、とても優しかった。
狼の口で、ソレは私に問いかけた。
「君が私のマスターか？」
――私はその日、運命に出会った。

第3節　狼とロケットパンチ

やっべえええええ!!

勢いで所長を助けに来たけど、まさか相手がサーヴァントだとは思いもしなかったよねえええ！

か、勝てるのか私!?

いや、対抗手段はある。

私が天使さんから授けられた転生特典『其は有限なる小奇跡』（今命名）はサーヴァント相手にも生き残るための力。

捻り出せ！サーヴァントに勝つ方法を！

倒壊したビルからサーヴァントが這い出てきた。

あの風貌、年末アニメで見たことあるぜ！

知っているのか私!?

ランサー・メドゥーサ。

石化の魔眼キュベレイを持つ怪物だ。

キュベレイは確か常時発動型。対抗手段は魔力だ。ある程度魔力を有する者なら石

化はしないんだったか？詳しい原理はよくわからないが、今の私には全身に重圧がかかっている。体内の保有魔力がキュベレイの力を軽減している？

とにかく、石化しないのはありがたい。全身にかかる重圧で、かなりやりにくいが……。

どうやってランサーに勝つ？

先程は不意の一撃でなんとか退けたが、たぶん二度は効かないぞ。

私の武器は身体に魔力を纏わせての格闘のみ。対してランサーの得物はハルペー。リーチが違いすぎて懐に入る前に迎撃されてしまう。

何か武器はないのか？ハルペーとの打ち合いに数合持てば何でもいい！何か！

「獣風情が、この私に傷を付けるとはッ!!」

怒号とともに、ランサーが地面を蹴った。速い！

彼我の距離が一瞬で埋まる。

『其は有限なる小奇跡』で動体視力と反射神経を強化する。成功だ。相応の魔力が対価として抜け出ていく感覚。

今施したのは永続的な身体強化。元々ウェアウルフとサーヴァントじゃ地力が段違いだ。ウェアウルフの持つスペックの上限を突き抜けろ――！

ランサーの持つハルペーが閃く。

寸前で身をかわし瓦礫からコンクリートの破片をいくつか両手に持つ。

武器！武器！そうだ、こいつで！

『其は有限なる小奇跡』でコンクリートの形状を籠手状に変化させ両腕を覆う。流石にコンクリートを別の物質に変化させる事はできない。なのでコンクリートの持つ「頑丈」という概念をありったけ強化する。

ランサーの追撃が来る！ヤバイ！こぇぇぇぇ!!

普通にガードしたんじゃ、あの弧を描いた刀身は防げない。刃を振るわれる前に柄を押さえ込むしかない。

心を奮い立たせて前に出ろ！

「はいだらーーー!!」

ハルペーを押し込むように、私はランサーめがけ身体ごと突撃した。

籠手とハルペーが激しく火花を散らす。衝撃で籠手から僅かにコンクリートの破片が飛び散る。

だが止めた！概念強化、土壇場の思い付きだが上手くいってくれたか！

ここで腕を振りかぶる時間はない。最小の動きで、渾身の一撃を放つ。

「ぜぁっ!!」

私はコンクリートの籠手で覆われた右の拳をランサーの霊核である頭に放った。死

に晒せよやぁ――!!!

「舐められたものですね」

私の拳が放たれる直前にランサーが嗤った。

私は自らの失策を悟った。完全にこちらの動きを読まれていた！拳を咄嗟に引こうとするが、間に合わな――

――パァン！小気味の良い音が燃え盛る街に木霊した。何かが地面にポトリと落ちる。私の右腕が、妙に軽い。

「づ――ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」

熱い、熱い熱い熱い！

私の右手首から先が切り落とされていた。

痛いとすら感じない。ただひたすら熱い。けど、足を止めたら駄目だ！動かないと、死ぬ！

振るわれた追撃の斬撃を前に飛び込むように躱す。すれ違い間際に、尻尾による殴打をランサーに見舞う。

「チッ……悪足掻きを！」

ランサーが僅かにバランスを崩した。

私は熱さの次に痛みが押し寄せてきた右手首を左手で庇いながら、ランサーのその姿

に光明を見出した。
ヤツは怪物に堕ちた女神の成れの果て。生粋の戦士ではない。ヤツが戦士なら、私は最初の一手で斬り殺されていたはずだ。きっとそこに付け入る隙がある――！
「ちょっと、貴方！」
うん？オルガマリー・アニムスフィアだ。気丈にも立ち上がり、私に声をかけてきた。
ビクビク震えて、今にも泣きそうなくせに。
ちょっと今取り込み中なんだけどー！
「私がなんとか隙を作るわ！その間にあのサーヴァントを打倒なさい!!」
「正気か？死ぬぞ！」
私がいとも容易く手首切り落とされるの見たでしょ。
そら、のんびり話してるうちにランサーの追撃がきた！『魔力放出（音）』!!
「ウォォォォォォッッッ!!!」
私の咆哮が魔力の圧を伴って周囲の空間を揺らし、瓦礫を巻き上げた。音と粉塵の壁だ。
さしものランサーも怯んだ。今のうちに！
私は所長を胸に抱えてビルの裏手に逃げ込んだ。
「ちょっと聞いてるの!?」

聞いてます聞いてます。耳元で叫ばないで！私の耳敏感なんだから！
私は『其は有限なる小奇跡』で右手首の痛みを抑えながら問いかけた。
それでなんだって？
「ランサー相手に隙を作るなんて無謀だ。あっという間に殺されるぞ！」
「無茶は承知の上よ！貴方が何者で、どこから来たかなんて今は問いません。……貴方、私の声に応えて助けてくれたでしょう。だから今度は、私が貴方を助けるわ」
――私、借りを作るの嫌いなの。
そう言ってオルガマリー所長はそっぽを向いた。
……私は心底驚いていた。オルガマリー・アニムスフィアは傲慢で、意地っ張りで、プライドばっかり高くて、承認欲求が強くて……そんな女（ヒト）だと思っていた。
けど、それと同じくらい頑張り屋の、心根は優しい女（ヒト）なんだ。ちょっと素直じゃないけどな！
「いいだろう。君はなんとか隙を作る。その間に私がランサーにトドメを刺す。シンプルに行こう」
「いいわ。今、貴方との間に簡単な使い魔契約をしてパスを繋いだわ。あとは念話で指示を伝えます。それと貴方、右腕見せなさい。治療できるかも」
いや、こいつはこのままでいい。

私にいい考えがあるんでね。

「コソコソと内緒話は終わりましたか？」

殺気がぞわりと這い上がってくる。

オルガマリーを置いて、私は一人ビルの裏手から飛び出した。

その勢いでランサーに組み付き、空中でもみ合いながらオルガマリーから距離を取る。

私はランサーに腹を蹴られて突き放された。

地面に叩きつけられる瞬間にしなやかに受け身を取ってランサーから逃げるように走り出す。

（左手にある一番大きなビルの屋上にランサーを誘い出して！）

オルガマリーからの念話だ。

追ってこいランサー！お前の死地に招待してやるぜ！

私は指示通り、左手にある一番大きなビルに辿り着き、壁を蹴って屋上まで駆け上がった。ランサーが私の後を追い屋上に着地する。

「逃げるのは終わりです。獣風情が私をここまで手古摺らせるとは、楽には殺しませんよ」

ランサーの殺気が肌をヒリつかせる。

さっきから受けるキュベレイの重圧も尋常じゃない。これ以上逃げ回るのは、本当に無理だな。

さあきたぞ、オルガマリー所長！どうすればいい!?

（私が合図をしたら、跳びなさい！）

合点！

「まず、耳を削いで、鼻を切り落として、最後は贓物をブチまけて死ぬほど痛めつけやるっ!!」

ランサーの殺気が膨れ上がり、爆発するように突撃してきた。き、きたゾォーーーー!!

（――今よ！跳んで！）

「おうよぉ！」

瞬間、地面が――否、ビル全体が爆発した。

「し、しまった――!?」

ランサーが瓦礫の落下に呑まれ落ちていく。

いくらサーヴァントでも、足元の地面がなくなりゃ隙の１つはできるよなぁ――!!

今だ！力をよこせ！『其は有限なる小奇跡』!!

――『エンチャント』!!!

私の体内に秘められた無垢の魔力が「破壊」という概念を与えられ籠手にエンチャント（付加）される。ただ頑丈さを突き詰めたコンクリートの塊が、ただ破壊するそれだけに特化してランサーの霊核たる心臓に振り下ろされた。

「トドメを受けろーーッ!!」

「――ッ!?コケにしてぇ!!」

私の渾身の一撃は、ランサーの必死の抵抗によって寸前で受け止められた。私の左拳は完全にハルペーの芯を捉えていたが、流石は宝具だ。この一撃でも、ビクともしないとは――！

ランサーが勝ち誇った顔をする。

（そんな、防がれた!?）

「ああ、だが予想通りだ！」

私の言葉に、ランサーの瞳が揺れた。その瞬間。

「ガッ――――!!??」

ランサーの心臓を、背後から私の右拳が貫いた。

「な、何故……？」

ランサーはそれだけ呟いて、空中を落下しながら金色の粒子になって虚空に溶けていった。

第４節　汝は人狼なりや?

うぉぉぉん手がくっつかねー!

ランサーの宝具ハルペーによって切断された私の右拳がウネウネとそこらをのたうち回っている。ステイッステイッ。

どうやら治療を阻害する呪いのようなものがハルペーにはあったらしく、『其は有限なる小奇跡』の能力を持ってしても傷が治せないでいるのだった。

とりあえず止血して、右拳は腐らないように『其は有限なる小奇跡』さんを使って本体である私の心臓から血も行き渡るようにパスを繋いだりしたんだが……。

「貴方どうするのよコレ……」

オルガマリー所長が地べたを元気に這いずり回っている私の右拳をゲンナリとした顔で見下ろしながら言った。

どうしたもんですかねぇ……。

私は切り離された右拳を遠隔操作でワキワキさせた。『其は有限なる小奇跡』の能力で右拳をファンネル化してみたんだけどどうかな!

「やめなさい近づけないで!本当に気持ち悪いから」

そこまで言わなくても……。

悲しいのでオルガマリー所長に右拳を飛ばして遊ぶ。ロケットパーンチ！あと指もめっちゃワキワキさせよ。

「やめなさいって言ったでしょうっ!?」

アッーーーーー!!?

バシィン！という軽快な音を立てて右拳が魔力弾によって撃ち落とされた。痛覚はちゃんとあるからしっかり痛いんですよ！もっと大事にしてあげて！ランサー戦のＭＶＰなんだよ!?

私が右拳ちゃんをナデナデしてあげていると、何度か咳払いしたオルガマリー所長が神妙な顔つきで私に向き合った。それからややあって、ゴクリと喉を鳴らした彼女は意を決したように口を開いた。

「それで単刀直入に聞くけれど、貴方は一体何者なの？」

私はハッと息を飲んだ。

私が何者であるか。それは私がこの世界で誰かと関わって生きていく上で、いつか必ず直面する問題だった。

天国によってこの世界へ埋め込まれたイレギュラー、それが私だ。

彼女に本当のことを話してもいいのか？話したとして、信じてもらえるのか？信じて

もらえたとして、受け入れてもらえるのか?
様々な疑問と不安が私の脳内をしっちゃかめっちゃかに走り回る。
私は沈黙した。
その間ずっと、彼女の瞳が私に問いかけていた。
汝は何者なりや?
彼女の心に宿るのは未知の存在への恐怖か、あるいは藁にでも縋りたいという生への執着か。
自問する。私は何故、彼女を助けたのだろうか。困っている人を見捨てられない、と感じたのは嘘ではなかった。
しかし結局のところ、それは自分の生き死にがかかってないからこそ出てくる結論のはずだ。
彼女を襲っているのがスケルトン程度なら、なんの問題もなかった。けれど相手は英霊で、圧倒的な実力差があった。もしもたった1つのボタンのかけ違いでもあれば、私は彼女共々あの場で死んでいたに違いない。
私は誰かのために、自分の命すら投げ打って助けられるような人間だったか……?
私の心の何処かが叫ぶ。
自分でも開けられない心の扉の向こうでナニかが叫ぶ。

――――何もできずに死ぬなんて、許せない
それは、とても恐ろしくて、悔しいことだから。
だから見過ごせなかった。誰かが絶望しながら死んでいくのは。
それは、きっととても辛いことなのだ。苦しいことなのだ。
私には死んだ時の記憶がないけれど、心の奥底でナニかがそうだと叫ぶのだ。
――ああ、そうか
あの時、彼女の声を聞いてしまったから。彼女の助けを求める声を、死にたくないという心の叫びを聞いてしまったから。私は彼女に、封印されて覚えてもいない、死に際の私の姿を重ねたのだろう。だからこそ、私は自分の死すらも厭わず彼女に手を伸ばしたのだ。
……ならば、ならば。彼女には、本当のことを話そう。
何も知らずに死んでしまうのは、とても悲しいことだから。

※

オルガマリー所長に、この世界がＦＧＯという作り物で、私はそのゲームを遊んでいた元人間であること、そして天国の手によりウェアウルフとしてこの世界に転生したこ

とをつまびらかに話した。
　私の話の一部始終を黙って聞いていた彼女は、しばらくしてからようやく口を開いた。
「ふざけたことを言わないで!」
　まあそうですよね。
　突然自分の世界が実はゲームの世界なんだと言われても、信じられないだろう。
「そういう事じゃないの。私たちの世界が誰かの想像の産物かどうかなんて、正直どうでもいいのよ」
　だって、それは確かめようのない事なのだから。オルガマリー所長は肩を竦めて言った。
「貴方が獣人に転生した元人間というのは、そういうことにしておきましょう。貴方がそう思い込んでいるだけ、という可能性も含めてね」
　えー、本当にござるかー?
　意外とサラッと流された。色々凄いことぶっちゃけた気がするけどなァ。というか、世界が作り物云々には、あまり興味がないようだった。
「そんな事よりも!この異常を引き起こした原因がソロモン７２柱で!レフがその魔人柱の一柱で!?ロマニがソロモン!?挙げ句の果てには私は既に死んでるですって!?」

――信じ、られる訳ないじゃない……

オルガマリー所長はそう呟いて俯いた。

そうか、そうだよな。

自分の世界が作り物とか、私が元人間とか、天国がどうとか、そんなことよりも自分の仲間や支えてくれた人に関する真実の方がよっぽど堪えるよなぁ……。

特に彼女は、ゲーム内ではレフ・ライノールという人物にかなり依存していた。父が死に、いきなり家督を継がされて、所長の役割には慣れなくて、周りからは馬鹿にされる……。そんな彼女を助けたのがレフ・ライノールという男だ。彼女が依存してしまうのも、無理からぬ事だと思えた。

「けど、それが真実だ。この世界は、人類の歴史は既に焼却されている。それをなんとかするために、カルデアが戦うしか方法は残されていないんだ」

「でも、そこに私の居場所はないんでしょ?」

ぞっとするような声でオルガマリーが言った。

彼女の中で私の言葉が嘘であるという可能性はもはや廃されているようだった。

私はこの世界のことを、カルデアの内情をゲームで知った範囲とはいえ知り過ぎていたし、私の持つ『其は有限なる小奇跡』というデタラメな力、そして何よりこの冬木で起こっている惨状が、彼女が私の言葉を信じるのを後押ししたようだった。

「カルデアが人理を修復する?あの４８番目のマスターとマシュと、カルデア全職員が総力を結集して?じゃあ、私は?私はどこにいるの?私は何のためにここまで頑張ってきたの?私は一緒に戦えないの?……私は何のために、今まで生きてきたの?」

彼女は絶望していた。

私はそれを見て、自分にとても腹が立った。

私は、大バカものだ。

真実を知らずに死ぬのは辛い事?

彼女の事を救えもしない、死んでしまうのは避けられないシナリオなのだと、心のどこかで諦めているこの私がそれを言うのか!

どうしようなく無責任で、どうしようなく偽善者だ、私は。

天国が何故死因を秘匿し、真実を知りたいと望む者のみに教えていたのかがわかった気がした。

覚悟だ。

私には死因を知る覚悟がなかった。けれど天国は、また生きるチャンスをくれたのだ。私がいつか笑って死因を知る事ができるような未来を掴むために。そのために、天使さんは自分の使命に背いてまで私をウェアウルフに転生させてくれた。

だというのに私はどうだ。

手前勝手な理由で、覚悟もないままオルガマリー所長に真実を話してしまった。
悔しい、怖い、死にたくない、そんな感情が彼女から伝わってくる。私は、なんて残酷な事をしたんだ……。
ああ、くそぅ！彼女をこんな目に遭わせたのは誰だ！
私だ！
だから！
「私が！私がなんとかする！」
気が付いた時には叫んでいた。
オルガマリー所長が暗い顔を上げた。目元は赤く腫れて、その瞳は酷く虚ろだった。
私はそれを見て、覚悟を決めた。
彼女を死なせたくない。
この世界で初めてあった人間だからとか、ゲームでの彼女の最期が悲しかったからだとか、いろんな感情がぐちゃぐちゃになって、私の中で爆発した。
戦ってやる！
彼女の最期の言葉を、あんな悲惨なものにしたこの世界と戦ってやる！
「私が必ず、君を護ってみせる」

後から振り返ってみれば、私は既に、彼女に情が移っていたのだと思う。
思えばこの時が、転生者というどこか第三者的な立場をかなぐり捨てて、本当の意味で私がこの世界の住人になった瞬間だったのだ。

第5節　固有結界の檻

「藤丸くん。そこの瓦礫尖ってるから気をつけてね」
「あ、ホントだ凄い尖ってますねこれ」
「凄いよねこの鋭角具合。蘭姉ちゃんの宝具くらい尖ってるよね」
「あ、あの！トールさん！ランネー・チャン、という方はどういった英雄の方なのでしょうか!?」
「トールさん、俺も気になります！」
「ちょっと騒がしいわよ貴方達！もっと周囲を警戒しなさい！」
「ったく、バカなのか大物なのか。狼の旦那はいいとして、坊主もお嬢ちゃんもなかなか肝が据わってるよな」
「フォーウ……」
　やあどうも、私だ。
　ウェアウルフに転生した中島とおる改め、トールだよォ！
　名前どうしよっかな～なんて思ってたけど普通にとおるを名乗ったわけですよ。そしたらなんかカタカナ表記として受け取られちゃった。まあこのナリだ。おかしかな

いわな。

「トールさん危ない！そこの瓦礫もランネーチャンですよ！」

「うわっ！かなり蘭姉ちゃんだよコレ！」

現在はゲームでの主人公藤丸くん、主人公の相棒マシュちゃん、私のご主人（という事になっている）オルガマリー所長、マスコット的存在のフォウくん、そしてキャスターのアニキことケルトの大英雄クー・フーリンと共に、この異変の元凶と目される冬木の大聖杯を目指していた。

藤丸くん達とは、私がオルガマリー所長を救う発言をしたそのすぐ後に合流した。既にキャスター兄貴と邂逅していた藤丸くんとマシュちゃんが、ランサーと何者かの戦闘を察知して駆けつけてきてくれたのだ。

しかもこれまでの道中に黒化したアサシンとライダーを撃破しているというのだから驚きだ。流石は主人公。いや、ここは流石はケルトの大英雄というべきか。彼が藤丸くん達を助太刀していなければ２人はここに居なかっただろう。

……で、私が救う発言をした後のオルガマリー所長とは、まだほとんど会話をしていない。後になってなんかすごく恥ずかしくなったっていうかさ？ね？

所長もなんか、「か、勝手にしなさいよ……」と俯いてからはダンマリだったし。うーん、気まずい。

そんな時に3人と1匹がきてくれたもんだから正直助かった。それでキャスター兄貴に話を聞いてみればやはり冬木の大聖杯が元凶ではないかという事と、それを守護するセイバーを打倒しなければならない事が明らかになった訳だ。

冬木の大聖杯というのは、いわば根源到達に至るための大規模魔術炉心とされている。

そしてそれを守っている、オルタ化したセイバー、アーサー（アルトリア）・ペンドラゴン。

結局ゲーム内でも、チュートリアルとして駆け抜けた冬木の謎は明らかにならなかった。

わかっているのは、セイバーオルタを倒せばこの特異点が崩壊することだけだ。たとえ謎が明らかにならなくとも、私たちはこの冬木で立ち止まるわけにはいかない。進まなければ。

目指すは円蔵山の大空洞。円蔵山にある柳洞寺は霊脈としても優秀だから、カルデアとの通信確保のためにもそこに行かねばならない。

オルガマリー所長曰く、今の冬木の大気には神代並の魔力が満ちているらしい。ただの人間なら拒絶反応を起こして即死するレベルらしく、その影響もあってカルデアからの通信が阻害されているようだ。よってこの冬木で最も魔力の流れが安定している柳

洞寺を目指しているというわけだ。
　ちなみに一般人である藤丸くんはカルデアから支給された魔術礼装である制服を着ているから、マシュちゃんはデミ・サーヴァント、オルガマリー所長は凄腕の魔術師だからこの冬木でも無事だったらしい。
　じゃあ私はというと、たぶん元々魔獣だから適応したとかよくわからん原理だろう。
　そんなこんなで私たち一行は順調に歩を進めていた。
「しかし人狼が使い魔たぁ珍しい魔術師も居るもんだ。こんな時代に魔獣の生き残りがいたってのも驚きだ。なぁ？」
「はい、私もカルデアでは一度もトールさんをお見かけしませんでしたし、驚きの一言です」
「俺、人狼なんて初めて見たけど、すごいカッコいいと思う！銀色だし！喋るし！モフモフしてるし！」
　藤丸くんが私の尻尾をモフモフしてきた。アフゥン。
　君全然警戒心ないな！流石コミュ力高いと言われてるだけはある。なんというか、この子はすごく人の懐に入るのが上手い。
「あ、先輩ずるいです！トールさん！私もモフモフさせていただいてもよろしいでしょうか!?」

マシュちゃんが目を輝かせて私を見た。
なんというか、動物園に初めて来た子どもみたいな。
とにかく眩しい……。
「構わないよ」
「ハゥァ……」
２人が私の尻尾に抱きついて気の抜けた声を上げた。
ああ、なんか、救われたような気分だ。
この延々と広がる燃える光景の中でも、この２人のこういったなんでもない行動が一行の雰囲気を和らげていた。
「フォウ、フォーウ！」
私の尻尾をモフモフしている２人を見て、フォウくんが抗議？の声を上げているような気がした。
大丈夫、マスコットの座は取らないよ。
つーかフォウくんすっごいモフモフしてる。
かわいい。モフるかモフらないかと言えばモフりたい。ＭＯ☆ＦＵ☆ＲＵ！
フォウくんに手を伸ばしたが躱された。素早いッ！だがモフる。
「フォーーウ!?」

大人気ない速度でフォウくんを捕まえるが、手の中でフォウくんが激しく暴れる。
フォウくんがあまりにも嫌がるので、モフるのはやめにした。ごめんねフォウくん。
私がフォウくんを放してやっているとキャスター兄貴が話しかけてきた。
「なあ、狼の旦那。アンタだろ？ランサーを倒したのは」
「そうですが、何か問題でも？」
「うんにゃ、問題なんかあるわけねぇ。ランサーはいずれ倒さなきゃならねぇ障害だった。けどよ」
キャスターが私の顔を覗き込んで言った。
「人狼とはいえただの魔術師の使い魔程度が、サーヴァントを倒せるかって気になってな。どんな手を使った？」
その疑問は最もだ。けどそれに素直に答えるのは憚られた。
『其は有限なる小奇跡』はあまりおおっぴらに公開したくない。この冬木でキャスターが敵に回ることはないと知っているが、万が一ということもあるし、どこから敵に情報が漏れるかわからない。
能力も含めて、私の本当の素性もこの世界についての諸々の事情も、私とオルガマリー所長との間だけの秘密ということにしてある。だから他の３人には私はオルガマリー所長の切り札である使い魔という事にしてあるのだ。

「あいにく、企業秘密でして……」
「ほぉーん。ま、企業秘密なら仕方ねぇか！今の俺は本調子じゃねえからよ。頼りにしてるぜ狼の旦那！」
キャスター兄貴はそう言って私の肩を叩いた。
おお、すごい。なんか、すごい。
私、伝説の英雄クー・フーリンとすごいコミュニーケーション取ってる……。
そんなやり取りをしながら一行はやがて目的地である柳洞寺の境内に辿り着いた。
「適切な霊脈地を確保しました！大気中の魔力反応、安定しています！カルデアとの通信が復旧します！」
マシュちゃんが地面に盾を設置して告げた。
おそらく、盾をマーカーにすることでカルデアに現在地を発信しているのだろう。ん でそのポイントに向けてカルデアが物資やらを送り込む。よくできてる。
今回通信のためだけにマーカーを出すのは、本来例外なのだろう。
「……待ちな、お嬢ちゃん。見られてる」
突然キャスターが警告を発した。
全員が周囲を警戒する中、キャスターはある一点を見つめて声を張り上げた。
「コソコソ隠れてないで出てこいよアーチャー」

その言葉を受けて、正面の本堂の屋根にサーヴァントが実体化した。
弓兵のサーヴァント・アーチャーだ。
私は当然、アーチャーの真名も知っている。原作Ｆａｔｅに登場するアーチャーのサーヴァント、エミヤシロウだ。
こいつはとにかくクー・フーリンと縁があるようでＦＧＯ序章でもこうして敵対してくるというわけだ。年末アニメでの２人のバトルはクー・フーリンことキャスターの勝利に終わったが……。今回はどうなるか。
「逃げ回るのはもうやめにしたのかね？後ろに大勢引き連れているようだが。ピクニックにでも行くつもりか？」
「おうよ。永遠に終わらないゲームなんざ退屈だろ？良きにつけ悪しきにつけ駒は進めないとな。ピクニック気分でいろいろぶち壊しにきてやったぜ」
ゲーム内でも言ってたな、そのセリフ。
永遠に終わらないゲームって、どういう意味だ？キャスター兄貴は色々知っている風ではあるが。今は考えるのはやめだ。
アーチャーとセイバーを倒すことに集中しなければ。
私の目的は、その後。セイバーが倒れた後に登場するレフの魔の手からオルガマリー所長を救うことなのだから。具体的な方法は思いつかない。

オルガマリー所長はレフの手によって死ぬ。ならばレフが現れる大空洞に行かなければいいと思うかもしれないが、それはダメだ。オルガマリー所長が大空洞に行かなくても、どのみちこの特異点は崩壊し、崩壊とともに彼女も消えてしまうだろう。

ならばこの特異点を修正しなければいいという考えもあるが……。ああ、それが永遠に終わらないゲームってことなのかな?もしかしたらこの特異点を維持しているセイバーも、何かを守るために敢えて終わらないゲームに甘んじているのかもしれない。

まあとにかく、進まないという選択肢はノーだ。この先藤丸くん達が進むためにも、そしてこの冬木より先の未来にオルガマリー所長を連れて行くためにも。

「駒を進める、か。いいだろう」

では進みたまえ。アーチャーがあっさり先に行く事を許可した。

「オイオイ、こりゃどういう了見だ。セイバーを守るのがテメエの役目じゃなかったのかよ」

「そのセイバーからのお達しでね。私はそれに従うのみ」

「へっ、信用できるものかよ!アンサズッ!」

先手必勝とばかりにキャスターがルーン魔術を使用した。火炎がアーチャーに射出される。ここでアーチャーを素通りするのは危険すぎる。もし大空洞に入った後にアーチャーが攻撃してくることになれば挟み討ちになる。

故にキャスターは問答無用でアーチャーに攻撃をしかけた。
「ただし」
キャスターの火炎が屋根に着弾したが、アーチャーは既に居なかった。
私の背後からアーチャーの声がする。
しまった、後ろを取られた!?
「この人狼は置いて行け」
突如、私の視界は一変した。
柳洞寺が、みんなが、オルガマリー所長が消えていく。
世界が塗り替えられる。
空には巨大な歯車が浮かび、赤い荒野には一面に剣が突き刺さっている。
――無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）
アーチャーの持つ心象風景にして固有結界。
現実世界さえも塗りつぶす魔術の最奥。
「わりぃ！ぬかった！死ぬなよ狼の旦那！」
「貴方！嘘でしょ!?」
塗り替えれていく景色の向こうで叫ぶキャスターと、酷く驚いたオルガマリー所長の顔が消えていき、やがては完全に見えなくなった。

私はアーチャーの固有結界に、完全に取り込まれたのだった。
うおおおお！うおおおお！
ピーンチ！私！ピーンチッッッ!!

第６節　人間性を捧げよ

「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

私は身体中に剣を突き立てられて、息も絶え絶えに前のめりに倒れこんだ。

ニチャリという感触が顔を撫でた。血溜まりの向こう側で、もう１人の私が瞬きする。

「生物の急所と云われるところは全て貫いた。それでもまだ、君は生きている。まさかギリシャの大英雄と同じ宝具を持つというわけでもあるまい」

ギリギリだ。ギリギリの状況だ。私の見た目は今かなりヤバイことになっている。全身に剣山かよっていうくらい隈なく剣がブッ刺さっているのだ。

それでもまだ私が生きているのは、『其は有限なる小奇跡』で痛覚を無視してショック死を回避し、身体の生きるための最低限の機能だけを何度も何度も回復させているからだ。

脳に剣がブッ刺さっても、心臓を剣が貫いても、それでも生きてる。デタラメな力だ。まさか、こんな状態でも生きることができるとは。意識が途切れる度に『其は有限なる小奇跡』によって叩き起こされる。正直、心が折れそうだ。

死に続けながら生き続けてる。
しかも。
しかも、私の体内の保有魔力はとっくに尽きていた。
『其は有限なる小奇跡』はその対価として魔力を必要とする。その筈だ。
――じゃあ、なんで私はまだ生きている？
『其は有限なる小奇跡』は何を対価にして私を生かしているんだ……？
私は全身が粟立つのを感じた。
「あぁ……、ぐっ！く、狂ってるよ、アンタ」
私は全身に突き刺さった剣を全て抜きながら言った。新たな剣は飛んでこなかった。
私の足元には生きてるのがおかしい程の血溜まりができている。
全身の傷が自動的に修復されていく。やはり魔力は尽きているのに、だ。何これ怖い……。
なんか気分悪くなってきた……。
とりあえず痛覚遮断をオフにする。
これ以上対価を払いたくない。
「そうとも。とうに狂っているさ。私も、この世界も、どこかでおかしくなった。気が付いた時には手遅れだったがね」

アーチャーがその手に双剣を投影する。
「この柳洞寺から君とランサーの戦いを見ていた。驚愕したよ。なにせただの魔獣がサーヴァントを打倒したのだからな。そして君と直に対峙して確信した。君の力は魔術なんてものではない、まるで万能の魔法だ」
コイツ、『其は有限なる小奇跡』の能力を探っていやがったのか……。
確かに、この能力は強力ではあるが、決して万能なんかじゃない。出来ることと出来ないことがある。しかもここにきて魔力以外を対価に発動することまで判明してしまった。こえーよ……。
「それで？仮に私の能力が万能の魔法だったとして、それがどうだというんだ。私を甚振る目的はなんだ」
「――見極めさせてくれ」
見極める？ハッ!?
アーチャーが踏み込み、一瞬で私の懐に入り込んできた。
ふた振りの斬撃が私を襲う。
私は後ろに跳躍したが、完全に躱すには至らなかった。
いってええええ!?
足元の血溜まりが私の動きを阻害する。

続く斬撃から這々の体で逃げ回るが、身体中にドンドン新しい傷が刻まれていく。
頬に、胸に、腕に、脚に、赤い線が疾る。痛くて痛くて、涙が出てくる。こ、コイツ、手を抜いてやがるッ……!
「停滞していたこの世界に、カルデアと君が現れた。セイバーがカルデアを試すというならば、私もそれに倣おうかと思ってね」
「なんでアンタはサラッとカルデアと私を分けてるんだよ!」
「言っただろう?ことの一部始終を見ていたと」
フッざけんなぁぁぁぁ!!!
私は周囲の魔力を強引に吸い上げた。
『魔力逆流』によって周囲から吸い上げた魔力を己が物として、『其は有限なる小奇跡』を起動する。
私の肉体を魔力が駆け巡り、傷口がみるみる塞がっていく。
サーヴァントに対抗するだけの身体強化が再び全身を奮い立てた。腕が、脚が、頭が、全身の神経がフルに起動して行く。
「オオオオオオオオオオッ!!」
私は咆哮を上げた。
迫り来るアーチャーの斬撃を、今度こそ躱しきり、反撃に転じる。

私はアーチャーに殴りかかった。
こんなところで足止めを食らうわけにはいかないんだよ！
はやく合流しないと、オルガマリーが!!
「そこをどけ！アーチャーッ！」

※

オルガマリー達は大聖杯があるという大空洞の奥深くまで入り込んでいた。
だがそこに人狼のトールはいない。
アーチャーの固有結界に呑まれてしまったのだ。
トールとの間に繋いだ使い魔契約のパスはまだ生きているから、彼が死んでいないことだけはわかるのだが。
それでもやはり、気が気じゃない。
相手はアーチャーのサーヴァント。しかもそのホームグラウンドに取り込まれてしまったのだ。万に一つも、トールの勝ち目はないだろう。
「狼の旦那が心配かい？」
キャスターがオルガマリーに問いかけた。

その言葉に、オルガマリーはトールと初めて出会ってからここまでの事を思い出した。

オルガマリーの窮地に風のように現れて、あろうことかサーヴァントを叩きのめした。かと思えばいきなり突拍子もないことを言い出して、好き勝手に彼女の心を掻き乱す。

なんて傍迷惑な人狼なんだろうと思う。

でも、別に、嫌いでは、ない。

ランサーに襲われ絶望した彼女の前に降り立った銀色の大きな背中と、ゆらゆらと揺れる尻尾が、目に焼き付いて離れなかった。

……私のことを救うって言ったくせに。

そこでオルガマリーは思考を中断した。

「別に、心配なんかしてないわよ！アレはただの使い魔。囮として使えるなら上等だわ」

「へぇーそうかい。その割には落ち着かねぇ様子だが、これを言うのは野暮かねぇ」

「からかうのはやめて頂戴」

オルガマリーはピシャリと言い放ってキャスターからプイッと顔を背けた。

どうもこの英雄は苦手だ。飄々としている癖に、色々と抜け目ないところとか。

「先輩！所長！キャスターさん！到着しました。ここが大空洞の最奥部です！」

そこにあったのは、まさに奇跡を具現化するために作り上げられた特大の魔術炉心。
そしてその大聖杯を守るように一体のサーヴァントが仁王立ちしていた。

※

だ、だめだぁもうおしまいだぁ……。
やぁ、全身血だらけ、満身創痍のトールだよ☆（ヤケクソ）
カッコよく啖呵を切ったものの、アーチャーはマジで強かった。
というか、ヤツの固有結界に取り込まれた時点で私に勝ち目はないわな。いきなり空中に浮かび上がった剣が飛んでくるし、アーチャーも無尽蔵に手元に剣を呼び寄せやがる。
まるで気分は鬼畜難易度シューティングゲームだね。こんなの躱しきれるかよぉ！
しかも現状、私には武器がない。
コンクリートの籠手はランサー戦で寿命が来てしまったし、この固有結界内の剣は私が触れようとすると爆発するし……。正直詰んでいる。
素手でアーチャーに勝つのは無理だ。
なにか、なにか武器はないのかッ!?

その時、空中にザザッという雑音と共に青白い立体映像が現れた。

――もしかして、これは？

『――いやぁやっと通信が繋がった！途中で何故か通信地点の数値がおかしな変動をして驚いたよ！そのおかげで解析が遅れてね！けどもう大丈夫！無事かいマシュ!!君の他に生存者は――――てうぇえええええ誰だ君は!?』

「うあ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!

「ト”ト”ト”!Ｄｒ．ロ”マ”ーーーーン”っ!!!」

この赤い荒野の中に、一筋の光明が見えてきた！

第７節　大型決戦礼装Ｄ型

状況を飲み込めずに慌てふためいているＤｒ．ロマンに私は必死に現状の説明を試みた。

「私はオルガマリー所長の使い魔だ！サーヴァント・アーチャーの固有結界に取り込まれて打つ手がない！なんとかならないか!?」

『う、ウェアウルフの使い魔なんて聞いたことがないぞぅ!?それにサーヴァントに襲われてるだって!?マシュは？オルガマリー所長は今どうなっているんだい!?』

アーチャーの追撃が迫る。

双剣を用いた接近戦だ。

私に回避以外の選択肢はない。

アーチャーの横薙ぎに振るわれた斬撃を四つ足になり身を低くすることで躱す。

そのまま足払いを試みる。

避けられた。

アーチャーは大きく後ろに距離を取り、何処から取り出したのか大きな弓を構え私に向けて刀剣の矢を三連射した。

一射目。頭部を狙った一撃を頭を振ることで躱す。こめかみを掠った。すれ違いざまの衝撃が私の脳を揺さぶる。

二射目。一射目で生まれた私の一瞬の隙を突いて、私の右脚、太ももの部分に矢が突き立つ。機動力を削がれた。

三射目。心臓を狙った必殺の一撃。

――避けきれん！

極限まで研ぎ澄まされた感覚が私の意思を無視して咄嗟に『魔力放出（音）』を発動させる。

「カァッッッ!!!」

私は魔力放出を全方位にではなく、迫り来る矢を狙撃するように指向性を持たせ一点に集中して放出した。

キュン！という発砲音にも似た風切り音が鳴った。

私の口から撃ち出された魔力を乗せた空気弾が真っ向から矢に突撃する。

――直撃！

だが破壊には至らない。

僅かに弾道の逸れた矢が私の左肩に深く突き刺さった。

「ぐっ……!?」

もはや痛みすら感じない。
アドレナリンドバドバ状態なのだろう。
こりゃ、終わった後キツイぞ。
終わった後に、私が生きているかは甚だ疑問ではあるが……。
『だ、大丈夫かい!?』
Ｄｒ．ロマンが深手を負った私を見て叫び声を上げた。
「……これが大丈夫に見えるものかよ!?それより!」
『ああわかった!わかったよ!君が所長の使い魔という事は信じよう!それで、君を助ける事はマシュや所長を助ける事にも繋がる!それでいいんだね!?』
「話が早くて助かるねェ!カァッッッ!」
空気弾が今度こそアーチャーの矢を完全に弾いた。
よっしゃ!新しい技もコツが掴めてきた!
アーチャーが本気じゃない間に、Ｄｒ．ロマンと連携してヤツをブチのめす!
「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」
アーチャーが何事かを呟いた。
瞬間、私の左肩と右脚に刺さっていた刀剣の矢が爆ぜた。
私の左肩から先と、右脚が花火のように血を撒き散らしながら吹き飛んだ。

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?!?!?」

手足を失った身体がべちゃりと赤い荒野に投げ出される。

即座に『其は有限なる小奇跡』が発動し、全開で私の飛び散った肉を掻き集めて再結合を開始する。

爆風で逝った背骨がゴキゴキと音を立てて元の配置に戻される。

途中で魔力が尽き、にも関わらず『其は有限なる小奇跡』は私の身体を癒し続ける。

「〜〜〜ッッ!?」

「特異な力ではあるが、そろそろ底が見えてきたな。やはり君は、この先に進むに値しない」

チックショオオオオオオオオ!!!!!!!!!

反則なんだよテメーはぁ!!!!!

私はなんとか立ち上がる。

身体は全快だ。ただ物凄く気分が悪い。

なんだか、頭にモヤがかかったような……。

アーチャーが私を見る目が鋭くなる。

「終わりだ」

アーチャーの双剣が私の首を落とさんと振るわれる。

――速、避けられ、無理、死

流石に、頭を落とされたら死ぬんじゃないか？

頭を駆け巡るのは、そんなどうでもいい思考。

私は死を覚悟した。

だが、アーチャーの攻撃は私の首を落とすには至らなかった。

『よォし！試作礼装Ｎｏ．００７！転送！』『だぁぁぁぁ勝手になにやってんるんだレオナルド!?』

突如私とアーチャーの間に現れたソレは。

『さぁ使い給え画面の向こうの狼クン！この万能の天才お手製！大型決戦礼装Ｄ型!!自分用に作ったはいいが全く普段使い出来なくて倉庫で埃をかぶっていたこの礼装で、存分に暴れてくれたまえ～ッ！』

ドデカイドリルが！

地面にデデンと突き立っていた！

私は本能でそれに取り付いた。

おおおお！装！着！

プシュウウウガコンッという重々しい音と共に、籠手型のドリルが私の左腕に吸着した。

《サイズオーバー！サイズオーバー！装着者トノ適合率４８％……。左腕補助装置ニ異常ヲ検知。エネルギー伝達率７３％マデ低下。強制装着プログラムヲ実行。完了。オッケ～イツデモイケルヨ～》

キェァァァァァァシャベッタァァァァァァァ!!?

第８節　穿つウルフ・ウィズ・ドリル

それは一瞬の出来事だった。

三方から迫るアーチャーの必殺を期した一撃。

鶴翼三連。

互いに引き合う性質を持つ夫婦剣・干将・莫耶の特性を利用した絶技。

トールの知識にあるソレと唯一違う点は、アーチャー自身が持つ武器が干将・莫耶ではないことだった。

おそらくは、トールの持つ謎の不死性を封じ、確実に殺傷するための対不死性の逸話を持つ特効宝具。

固有結界内に様々な特性・逸話を持つ宝具を内包するエミヤシロウのみに許されたジョーカー。

『魔力放出（音）』による全方位迎撃が通用しないのは明らかで、トールは蛇に睨まれた蛙さながら、死を待つだけの身であるはずであった。

――そう、彼が一人であったなら。

アーチャーの影が赤い荒野を走り、トールの目前に迫る。

『3…　2…　1…　今だ!!』

ロマニ・アーキマンのカウントに合わせてトールは動き出す。

「アオオオオオオッ!」

爆音。

『魔力放出（音）』が全方位に魔力を乗せた音の波を叩きつける。だが、空を走る二対の干将・莫耶はビクともしない。

莫大な音波によって地面が揺れ、舞い上がった砂埃がアーチャーの目からトールの姿を覆い隠した。

激しく鼓膜が揺さぶられた後特有の、キーンという耳鳴りがアーチャーの聴覚を一時的に奪う。

「無駄な足掻きを」

しかし、アーチャーは一瞬の躊躇いもなく視界の効かぬ空間に飛び込んだ。

たとえ見えぬとしても、トールを確実に仕留める自信がアーチャーにはあった。

どんな策があったにせよ、それよりも一段こちらが速い。

正直、アーチャーはトールに期待していた。

この世界はどこで何かが狂ってしまっている。

既にアーチャーに為すすべはなく、セイバーによる現状維持を支えるのが目下己に出

来る唯一の方法であった。
そこに現れた、謎のウェアウルフ。
この世界の法則すらも無視したイレギュラー。
狂った歯車がまた回り始めるのに、これ程適任な者がいるだろうか、そう期待してトールを自らの固有結界内に取り込んだのだが。
（――残念だ！）
アーチャーの斬撃が走る。
しかし振るわれた剣に手応えは無く、返ってくるのは虚空を切り裂く虚しい風切り音だけだった。
砂埃がアーチャーの剣圧で散る。
（馬鹿な!?消えただとッ――！いや、これは！）
そう、それは一瞬の出来事だったのだ。
アーチャーの背後の地面が盛り上がる。
キュイィィインという耳をつんざくような高音がアーチャーの耳朶を打ち、空気と大地が焦げたような臭いが鼻をついた。
（――後ろか！）
アーチャーは即座に身を翻し、裏拳の要領で背後に斬撃を見舞った。

アーチャーの持つ不死殺しの剣は確かにトールの一撃を受け止めた。撃ち合った剣と高速回転するドリルが凄まじい火花を散らす。

しかし。

「いまだぁぁぁぁぁぁぁ!!突き穿て!ドリンチちゃん!!」

《マ～カセテ!主軸セーフティ解除!圧縮魔力全解放!コレガ私ノ全力全開!》

「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!」

『其は有限なる小奇跡』によって「削り穿つ」概念を大幅に強化された大型決戦礼装D型――ドリンチちゃん――は見事、アーチャーの剣を粉砕し、ガラ空きになったアーチャーの胸目掛けてその破壊の嵐を叩き込んだ。

めちゃくちゃに回転するドリルがアーチャーの霊核をぐちゃぐちゃに破壊する。

やがてドリルは回転数を落とし、しばらくして完全に沈黙した。

完全に戦闘力を失ったアーチャーはトールにもたれるように倒れこんだ。

「ガハッ」

吐血する。

大穴が穿たれた胸からは滝のように血が溢れ出している。

もはや存在すらも危うい状態だった。

アーチャーは霞む視界にトールを捉えて言った。

「フン……バケモノめ……」

（英雄がこの世界を救えないのならば、それをなんとかするのが化物であってもいいかもしれないな）

赤い荒野が、空に浮かぶ歯車が消えていく。固有結界はアーチャーの心象風景の具現化。アーチャーの消滅と共に、彼の世界も消えるのだ。

世界は元の姿を取り戻し、柳洞寺の境内に、再びトールは立っていた。

アーチャーは完全にこの特異点冬木から消滅した。

トールはアーチャーの消滅を見届けてから、肩で息をしながら応えた。

「……アンタほどじゃ、ねーよ」

そう言ったトールの眼の奥で、黒いモヤが微かに現れて、消えた。

それは誰も、トール自身すらも気が付かないほんの一瞬の出来事だった。

シュココォォォォォという排熱音とともに白い蒸気が大型決戦礼装Ｄ型、ドリンチちゃんから立ち昇る。

『すごい、本当にサーヴァントを打倒するなんて……』

ロマニ・アーキマンは驚嘆していた。

いくらマスター不在の黒化英雄相手とはいえ、まさか勝てるとは思わなかった。

彼が土壇場で立案した作戦では、アーチャーの背後を取り一瞬の隙を作った上で、ド

リンチちゃんを用いてアーチャーの固有結界に孔を穿ち脱出する予定だった。
それを、まさか。彼の万能の天才、レオナルド・ダ・ヴィンチが作った擬似宝具とも呼べる礼装があったことを加味したとしても。
ただの魔獣がサーヴァントを打倒するとは考えもしなかった。
事実、オルガマリー所長の使い魔と名乗った彼の体内にはいくつか不自然な魔力反応が検出されている。
『君は、一体何者なんだ……?』
「さっき言ったでしょう?私はしがない使い魔ですよ」
そんなはずがあるか!そう叫びかけたロマニだったが、通信席に座る彼を豊満な女性の肉体が押しのけたことで彼は椅子からずり落ちることになった。
『そんなことより、今はマシュと所長の安否が心配だ!狼クン!急ぎ彼女たちの救援に向かってくれたまえ!』
レオナルド・ダ・ウィンチ。
万能の人。
１４世紀から１６世紀にかけて勃興したルネサンスの時代を生きた天才。
モナ・リザそっくりの大変美しい容姿をしている。だが男だ。
輝くような黒髪と、ぷっくりと膨らんだ桃色の唇が目に眩しい。だが男だ。

男の理想を詰め込んだようなその豊満な肉体は、あらゆる美を凌駕する。だが男だ。
トールはダ・ウィンチの言葉でようやく次の行動を開始した。
彼の頭の中は、それまでアーチャーとの戦闘で一杯だったのだ。無理もない。アーチャーは正真正銘、戦闘のプロだった。
もしも彼が万全の状態だったなら。もしも『其は有限なる小奇跡』によって何度も死の淵から蘇ることが出来なければ。もしもＤｒ．ロマンとダ・ヴィンチちゃん、そしてドリンチちゃんの助けがなければ。
屍を晒していたのは自分だったに違いない。
トールは自分が生きていることに感謝しながら、大空洞目指して走り出した。
「無事でいてくれよ！・オルガマリー！」

第9節　女の話をしよう

かつて少女は、ひたすらに己を研磨し続けた。しかし誰も彼女を褒めやしなかった。できて当然。誰もが口を揃えてそう言った。少女が一番認めて欲しかった父親さえも、彼女のことを見なかった。

やがて少女は成長し、1人の女になった。そして訪れた、父の突然の死。それからの女の人生は酷いものだった。背負いきれない荷物を抱えて、溺れるのを待つだけの生き方だった。

そんな女の元に、ある時一匹の銀色の狼が現れた。

狼は女にこう言った。

――私が君を、ここから連れ出して差し上げましょう。

こうして、女は一歩を踏み出した。

もうそこに立っているのは、己自身の不甲斐なさ、周囲への劣等感に苦しむだけの女ではなかった。

決して乗り越えたわけでもなく。

決して忘却したわけでもない。
それはただ、護りたい誰かのために。
自分を護ると言ってくれた男(狼)のために、女は前(明日)へと進むのだ。

※

それは人のカタチをした破壊の嵐であった。
岩が削れ、大地が割れる。
洞窟内の淀んだ大気が掻き乱れ、吹き荒ぶ魔力が肌を殴る。
彼女の一挙一動で、この世界が悲鳴をあげる。
洞窟内という、この閉じた空間には逃げ場など無く。
オルガマリー・アニムスフィアは、ただただマシュ・キリエライトの盾の後ろに隠れることしかできないでいた。もはやプライドなんてものはない。魔術師など歯牙にも掛けぬ、とでも言うようにセイバーは剣を振るう。
ランサーとは、まるで比べ物にならない。あの女もとんでもない強さではあったが、このセイバーは文字通り格が違う。
そんなセイバーを、キャスターと二人掛かりとは言え押し留めているデミ・サーヴァ

ントのマシュは、その役割を十分以上に発揮していた。
だが、危うい。
この攻防、いや、一方的な防戦は、どこかでいつか、必ず破綻する。
己の放つ魔弾を悉く弾いてみせるセイバーに、キャスターが舌打ちした。
「ったく。キャスターの身になって初めて、対魔力ってもんが如何に反則かってのが身に染みたぜ」
セイバーはその高い対魔力をもってして、キャスターの魔術による攻撃を全て無効化しているのだった。
（このままじゃ、間違いなく負けるわ）
オルガマリーは冷静に状況を分析した。
守りに長けたシールダーと、魔術を得意とするキャスターでは、セイバー相手に攻め手がない。なにか決め手が無ければ。
（あのバカ狼……トオルなら）
オルガマリーは頭を振ってその考えを追い出した。
あのウェアウルフは、アーチャーと単騎で戦っている。
使い魔契約を通して彼がまだ死んでいないことだけはわかるが、彼を対セイバーの戦力として期待するのは無理だ。

ランサー戦は、本当に運が良かったのだ。
たしかにあの狼は、強い。魔獣の身でありながら不思議な力を持ち、状況によってはサーヴァントすらも妥当し得る。
けれどアレは。運が、良かったのだ。ランサーに勝てたのは、本当に奇跡としか言いようが無かった。
微力ながらもオルガマリーの計略と、彼の異能の力がたまたま噛み合って、サーヴァントに届いたに過ぎない。状況が味方したのだ。
だが彼は、アーチャーの固有結界に取り込まれた。あの中では世界すべてが彼の敵だ。きっと生きては、帰ってこない。
だからこそ。
オルガマリーは屹然と前を見据えた。
キャスターは、黒化英雄はセイバーに操られていると言った。ならば、セイバーを倒すことで、アーチャーとの戦闘も終結するはずだ。
だからこそ、私たちがいち早くセイバーを倒してあのバカを助けるんだ。
オルガマリー・アニムスフィアはカルデア最後のマスターである藤丸立香と、デミ・サーヴァントのマシュ、頼みのキャスターに指示を伝えるべく動き出した。

※

オルガマリーがセイバーの猛攻の中必死に立てた作戦は、こうだ。
まずマスターは相手のサーヴァントでもステータスを閲覧可能、という特性を利用した。
「えぇと、自信はないけど、たぶんセイバーの対魔力はB、だと思います！」
マスターである藤丸立香にセイバーのステータスを確認させたところ、彼女の持つ対魔力のランクはBであった。
「それなら俺の宝具で、ヤツの対魔力の上からでもブチ抜けるぜ」
次いでキャスターの有する宝具ならセイバーを倒せることを確認。
しかし宝具の展開には多少なりとも時間を要する。セイバーがそんな隙を許すわけがない。
「わ、私がキャスターさんの宝具展開までの時間を繋ぎます！」
そこで守りに長けたマシュの出番だ。
問題は、実戦経験の少ないマシュがキャスターの援護なしでどこまで粘れるか……。
けれど、信じるしかない。少ないながらも、彼女だってここまで戦ってきたのだ。
「頼むわよ、みんな！」

オルガマリーのその一声で、これまで延々と防戦に徹していた各々が次の行動を開始した。

いや、一人。セイバーの攻撃を躱してスッとオルガマリーの近くに寄ってくる者がいた。

「よぉ、アンタ。いいツラ構えになったじゃねーか。美人で強情で、ついでにようやく肝が据わった。性格は俺の好みじゃないが、なかなかのいい女だ」

キャスターが飄々とした顔で何事かを言い出した。

「は、ハァ!?」

いきなり何を言いだすのだ!?この男は。

オルガマリーはドギマギした。

「けどま、狼の旦那のためにも、ここはきっちり生き残ってもっと女を磨くこったな」

「ば、ばっばっ！馬鹿なこと言ってないでさっさと配置につきなさい！」

オルガマリーは真っ赤になってキャスターを叱り飛ばした。

キャスターは呵呵と大笑しながら、セイバーの猛攻の中に飛び込んでいったのだった。

「私が!?磨く!?何を!?誰のために!?」

ハァーーー!?!?

※

「我が魔術は炎の檻、茨の如き緑の巨人。因果応報、人事の厄を清める社――――」
セイバーの剣をマシュが受け止めたその瞬間、キャスターが宝具を解放せんと詠唱を開始した。
「――――!」
それを察知したセイバーがキャスターに向け剣を振るう。
彼我の距離は十分に離れており、剣など届くものではなかったが。
なんとセイバーの振るった剣から魔力の塊が、まるで飛ぶ斬撃の如くキャスターへと一直線に走った。
だが。
「させません!」
人間のソレを遥かに凌雅した脚力で、マシュが斬撃とキャスターの間に割り込んだ。
「ぐっ、くぅっ!?」
だが抑えきれない。
魔力の圧に耐えきれず、マシュは盾ごと吹き飛ばされて、キャスターに激突した。

「うぉ！無事かお嬢ちゃん!?」
「マシュ！大丈夫!?」
慌てて藤丸がマシュの元に駆け寄った。
「す、すみませんキャスターさん、マスター！」
キャスターに支えられてマシュは態勢を立て直した。
「――ほぅ。アレを受け止めるとは」
「なぬ!?テメエ、喋れたのか!?」
キャスターが驚きの声を上げた。
「何を語っても見られている。故に案山子に徹していた。だが、それもここまでだ」
セイバーが腰を落とし、剣を下段に構えた。
「構えるがいい。名も知れぬ娘。その守りが真実かどうか、この剣で確かめてやろう」
漆黒の剣から闇の奔流が迸る。
セイバーが宝具を発動した。
「卑王鉄槌。極光は反転する。光を呑め！　『約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガン）』！」
（まずい！）
今、４人は一箇所に固まってしまっている。
（マシュが受け止め切れなかったら、私たちは――！）

思考は一瞬。

４人の視界を、漆黒の聖剣から迸った闇が瞬時に覆い尽くした。

第１０節　叫べ！ロード・カルデアス

驚くべき事に、その盾はセイバーの宝具の直撃を受けてなお、健在であった。
だがそれも、持ってあと何秒であろうか。
それまでにマシュが宝具を展開できなければ、四人はあっという間に闇に掻き消されるだろう。
「うっ、くぅぅぅぅぅぅぅッ!!?」
マシュは苦悶の声を上げた。
セイバーの圧倒的な力の前に盾が軋む。
――いや、軋んでいるのはわたしの心だ。
この盾は、ビクともしていない。
（押し負けそうになっているのは、盾を支えるわたしが弱いから……）
マシュ・キリエライトはデミ・サーヴァントである。
しかし彼女は、力を貸してくれた英雄の真名を知らない。
故に英雄そのものを表す宝具も使えないでいた。
自分には何が足りないのか。デミ・サーヴァントになってからずっと、マシュは必死

に考え続けていた。
宝具を使わなきゃ、と考える程、答えが遠ざかっているような気さえする。
（使わないと、みんな消える――わたしがちゃんと使わないと、みんな無くなってしまうのに――！）
未だ宝具が発動する兆しはない。
（どうして――）
マシュはピシリ、と己の心がヒビ割れる音が聞こえた気がした。

※

藤丸立香は平凡な少年である。
彼は日本の地方都市に住むただの高校生で、何の変哲もない、けれど平和な日常を過ごして生きてきた。
ところがある日、ハリー・茜沢・アンダーソンと名乗る人物によってスカウトされは彼は「国連の仕事」をするためにカルデアにやってきた。
具体的にどんな仕事をするのか、そもそもここは何処なのか、お給料はどれくらい貰えるのか、そんなことすらもわからずに、彼はカルデアにやってきたのだ。今にして覚

えば、魔術でなにか暗示でもかけられていたのではないかと密かに疑っている藤丸である。

そんな彼がカルデアにやってきたその日の内に異変は起きた。

突然の爆発。燃える管制室。沢山の瓦礫から突き出た、あちこちが折れ曲がった人間の四肢。

そして、瓦礫の下で血の海に沈み、死にそうになっているマシュ。

正直自分でもよく泣かなかったな、と思う。

まあ、その後藤丸には半分も理解できないなんやかんやがあって、マシュはデミ・サーヴァントになることで一命を取り留めたのだが。

いま、マシュはまた命の危機に晒されている。セイバーの宝具をたった一人で受け止めようとしている。

その圧倒的な力は、見ているだけで膝が震えるものだった。

心が折れそうだ。怖い。ここから逃げ出したい。

……だけど。

サーヴァントとマスターは運命共同体だと、キャスターは言った。

（……オレは、こんなところで一人怯えてるだけでいいのか？）

自分のことをマスターと言ってくれるマシュが、たった一人で頑張っているのに？

（マシュが頑張ってるのに、オレが弱気になってどうするんだ！）
藤丸立香は、震える膝に喝を入れて、恐怖から顔を逸らすのをやめた。
重ねて言おう。
藤丸立香は平凡な少年である。
それでも彼は、藤丸立香は歯を食いしばって、ほんの少し前に踏み出した。
（怖い！けど逃げない！マシュが全力を出せるように、オレにも覚悟が必要なんだ！）
藤丸立香の他人よりもちょっぴり秀でた所を敢えて挙げるとするならば、それは誰かの為にほんの少しだけ強くなれる所であった。

※

オルガマリー・アニムスフィアは、マシュ・キリエライトに負い目がある。
マシュ・キリエライトはデミ・サーヴァント計画のために、カルデアにて生み出されたデザインベイビーである。
過酷な実験だった。率直に言ってしまえば、非人道的だったのだ。
その内容は、思い出しただけでも吐き気がするほどのものだった。
オルガマリーが、デミ・サーヴァント実験に直接関わった訳ではない。そもそも、実

験計画の存在すら父の死後にようやく知った程である。
（けど、それでも。オルガマリー・アニムスフィアに、私に、責任がない訳じゃない）
父の罪。アニムスフィア家の罪。そしてそれは、私の罪。
父の死後に引き継いだ家督と、カルデアの所長職。それと共に、彼女は父の罪をも背負う事になった。
私がやったことじゃない。私に責任はない。私は知らなかった。自分が楽になるための逃げ道はいくらでもあった。
だがそれでも、彼女はその罪を背負った。
彼女はやや陰険で、口煩く、心に余裕のない弱い女であったが、目の前の困難から逃げ出すことは決してしなかった。
でもやっぱりその罪に耐えきれなくて、毎日毎日トイレで吐いた。
恨まれていると思った。いつかマシュが、自分を殺しにくると思った。けどそれは、仕方のないことだとも思っていた。
そんなオルガマリーだったから、マシュとはこれまで会話らしい会話もしたことが無かった。
（だって、どんな顔をして彼女に話しかけろというの？）
そう思っていた。

これまでは。
だがこうして、一緒にこの特異点を進むうちにようやく気が付けた。
マシュ・キリエライトは、この子は、きっと恨んでなんていないのだ。
それは彼女が底抜けの善人だからとか、そもそも自分の出自について深く考えていないからだとか、ではない。
彼女は自分の出自を、ただそこにある事実として受け入れていた。
絶望や諦観とは似て非なる何か。
オルガマリーには理解できない感情で、マシュは自分の運命を受け入れていた。
そして、それに対して何故か、本当に自分でも理由がわからないのに、オルガマリーは憤っていた。
（この子は、こんなところで死なせない。この子が死にたくないと思える、いつかその時が来るまで、絶対に生きてもらうんだから）
それは歪んだ感情だっただろうか？
わからない。だけどオルガマリー・アニムスフィアは、マシュ・キリエライトに死んで欲しくないと、その時強く願ったのだった。

※

「大丈夫!大丈夫だよマシュ!オレはマシュを信じる!だからマシュも諦めないで!!」
藤丸がマシュと共に盾を支える。
「マシュ・キリエライト!あと藤丸も!気合いを入れて、腹の底からこう叫びなさい!いいわね!絶対に生き残るわよ!!」
オルガマリーがマシュと藤丸の肩に手を置いて檄を飛ばした。
マシュは、絶望の淵に立たされて折れかけていた心が温かくなっていくのを感じた。
二人の言葉は、まるで魔法の言葉だ。
言いようのない全能感が身体を駆け巡る。
根拠なんて全くないのに、今なら出来ると確信できる。
（――守りたい。わたしは、この大切な人たちを守りたい！）
マシュの心の中で、何かがガチリ、と噛み合う音がした。
「――はいッ!わたしの背中、皆さんに預けます!仮想宝具、疑似展開!」
力の限り、叫ぶ。
生きたいと。ここで終わるわけにはいかないと。未来を見たいのだと。ただ世界に向かって叫ぶ。
三人の声が、一つになった。

「「――『ロオオオオオドッ！」」
「「カルデアスッッッ』!!!!」」
――撃鉄が落ちた。
盾が青く輝き、闇に包まれた洞窟内を眩く照らした。
発動のためのトリガーとして明確な呪文（スペル）を与えられたことで、仮初めの宝具が遂にカタチを得てこの世界に顕現した。
マシュ・キリエライトの体内で膨大な魔力が駆け巡り、圧倒的な力場が周囲の空間すらも歪ませて、身を包み隠す程巨大な盾から放出される。
『人理の礎（ロード・カルデアス）』と『約束された勝利の剣（エクス・カリバー・モルガン）』が真っ向からぶつかり合い、大気が悲鳴をあげた。
その力は、セイバーの宝具を押し返すには至らない。しかし、それでも。
盾から放出されている青い力場が、儚くも力強く明滅する。
闇色の奔流に徐々に削り取られながらもなお、その輝きは決して損なわれない。
それはまるで、マシュの願いに呼応しているかのように。
「ああ、あああああ――――!!」
マシュの絶叫が響き渡る。
踏みしめる大地はその力に耐えきれずに陥没し、力場の余波によって宙を舞った土塊は即座に闇に呑まれる。

そしてやがて、終わりが訪れた。
盾の生み出す力場が、役目を果たしたと言わんばかりに消えていく。
闇は退けられた。
そこに立つのは一人の少女。
未だ英雄でなく、されど仮初めながらも力を持った一人の少女は、見事彼の騎士王が宝具を受け止めたのだ。
「今よ!」
オルガマリーが叫ぶ。
「おうよ!よくやったなお嬢ちゃん達!後は任せな!!」
キャスターが不敵に微笑んだ。
「我が魔術は炎の檻、茨の如き緑の巨人。因果応報、人事の厄を清める社――――」
キャスターが素早く詠唱する。
宝具解放直後のセイバーに、それを迎え撃つ暇は与えない。
「倒壊するはウィッカー・マン!オラ、善悪問わず土に還りな――――!」
無数の枝によって組み上げられた巨人が、その全身に炎を纏いこの世界に顕現する。
炎の巨人は生贄を求め唸り、セイバーへとその全身を、質量と熱で構成された破壊の塊を叩きつけた。

第11節　そして星が流れた

「――見事だ」

キャスターの宝具を受けて、セイバーが遂に膝をついた。

全身は焼け爛れ　、鎧は脱落し、それでもなお、その聖剣と眼光は陰ることなく輝いている。その彼女の威容こそが、かつてブリテンを統べ、騎士王とも呼ばれた英雄たる所以であった。

「跡形もなく消し飛ばすつもりだったが、まさか倒しきれないとはな。奥の手が使えりゃまた違ったのかもしれねーが……。ったく、英雄としての名が泣くぜ」

キャスターが己の非力さを嘆いた。

やっぱ槍がねぇとな槍が、と呟いて自身の持つ杖を微妙な顔で眺める。

「アルスター伝説」にて語られる、アイルランドの光の御子クー・フーリンは多くの武勇を誇る英雄である。中でも彼の代名詞とも呼ばれるのが呪いの朱槍、ゲイボルグ。

槍さえあればセイバーだろうと打倒してみせる、とはここに来るまでの彼の言である。

「いいや。貴方の宝具は確かに私に届いている。この身体では、もはやまともに動く事

も叶うまい。……もっとも、そこの三人の力があってこそだかな」
セイバーがオルガマリー、藤丸、マシュの順にその金色の瞳を向ける。
オルガマリーは一瞬ヒゥ、とたじろいだが、負けじとセイバーを強く睨み返した。
藤丸は一歩後ろに退きかけたが、心を奮い立たせてなんとかその場に踏み止まった。
マシュは酷く消耗し、もう立っているのもやっとという有様であったが、意志のこもった強い瞳をセイバーから決して逸らさなかった。
三者三様の反応を見て、セイバーがフッと息をついた。
「……結局、私一人では同じ結末を迎えるという事か。ならば、後は貴方達に託してみるのも悪くはない」
そう言ってセイバーがその手に取り出したのは、黄金の杯であった。
その杯は見る者すべてに、それこそ魔術師ではない藤丸立香にすら、途方も無いエネルギーを秘めている代物であるという印象を与えた。
「それは、聖杯!?」
ひどく驚きを隠せない様子のオルガマリーのその言葉に、セイバーが頷く。
「如何にも。だが心するがいい。これは、始まりに過ぎん。グランドオーダー――――聖杯を巡る戦いのな」
「あ?·どういう意味だそりゃあ。テメエ、何を知ってやがる」

キャスターがセイバーに詰め寄ろうとした。
その時だった。
「困るな、あまり勝手な事をしてもらっては」
「――ッ!?」
突如、セイバーの胸から腕が生えた。
セイバーは驚きに目を見開き、やがて力を失ったように手に持つ聖杯を取り落とした。
カラン、という音を立てて聖杯が地に転がる。
腕がゆっくりと引き抜かれる。
胸に穿たれた穴から血が噴水のように飛び散って、地面にできた血溜まりにセイバーがゆっくりと倒れ込んだ。
その光景に三人が凍りつく中、キャスターは冷静にその異常に対応した。
「アンサズッ!」
間髪入れず、キャスターがルーン魔術を撃ち込む。
放たれた炎弾が砲弾の如く殺到したが、その男はあろう事か、腕の一振りでそれを打ち払った。
そしてキャスターが次の一手を打つよりも早く、否、キャスターの最初の一手とほぼ

同時にその手から放たれた魔弾がキャスターに飛来した。
「うぉ!?マジかよ!」
咄嗟に防壁を張るキャスター。その一瞬の合間に、男は手を握り込む事でキャスターに畳み掛けた。
キャスターの周囲の地面がドーム状に盛り上がり、彼を内部に閉じ込める。
何重にも折り重なる様にして地面が隆起と陥没を繰り返し、キャスターを完全に呑み込んだ。
あまりにも一瞬の攻防。
三人はただ、呆然とそれを眺めていることしか出来なかった。
「やれやれ、まさか君たちがここまでやるとはね。計画の想定外にして、私の寛容さの許容外だ」
炎の向こうから男が現れる。
男は聖杯を拾いあげて、手の中で弄ぶように何度か転がした。
特徴的な緑のスーツ、シルクハット、謎の装飾が施された禍々しいネクタイを締めたその男の名は――
「れ、レフ……!?」
「そうだよオルガ。元気そうだね、と言うのはいささかおかしいかな?なにせ君は――」

レフ・ライノールはオルガマリーに向かって微笑みかけた。
この場にそぐわぬその柔和な笑みが、彼の存在をより異質なものとして見る者に印象付ける。
レフはその笑みをたたえたまま、穏やかな口調で決定的な事実をオルガマリーに突き付けた。
「――既に死んでいるんだからね」

※

レフ・ライノールはその穏やかな表情とは裏腹に、内心はらわたが煮えくりかえるような思いだった。
聖杯を手の中で弄びながら、ゆっくりと生き残りの三人に歩み寄る。
マシュ・キリエライト、藤丸立香、そして、オルガマリー・アニムスフィア。
なんと言うことだろう。完全に予想外だ。
４８番目はまだいい。何の障害にもならぬと、殺す事すら検討しなかったような小物だ。
だが、マシュ・キリエライトだと!?小賢しくもデミ・サーヴァントに覚醒して私の邪

魔をするとは。……あれは慈悲だったのだ。あのまま大人しく死んでおけば楽になれたものを。

「レ、レフ……？それ、本気で言ってるの……？ウソよね!?私が死んでるのも！貴方が私を殺したのもウソよね!?ウソだと言って！」

そして、オルガマリー・アニムスフィア。この女はレイシフト適性を持たない筈……。いや、理解した。理解した途端、笑いが止まらなかった。なんて事はない。この女は、とっくに死んでいたのだ。死んだ事で適性を持たない肉体から解放されて、残留思念だけでこの冬木へとレイシフトするとは。

なんと哀れで、なんと滑稽な女なんだ、君は！

「本気も本気さ、オルガ。君は既に死んでいる。何せ私がこの手で、君の足元に爆弾を仕掛けたのだからね。もっとも、こうしてこの地にレイシフトしていたのは憤怒を通り越して愉悦すら覚えるよ！」

一瞬にしてオルガマリーに近づき、その首を締め上げる。そのままゆっくりと腕を持ち上げる事で、オルガマリーを宙に浮かせた。

「ウッ、く、あ……ッ」

オルガマリーが両手で自分の首を締め上げているレフの右手を掴む。

足は地に着かず、呼吸は苦しく、顔は絶望に歪んでいる。

この顔だ！なんて醜く、滑稽で、哀れな生き物なのだ！
だが足りない。もっと苦しみ蹌いて、この女には死んでもらおう。
レフ・ライノールはアニムスフィアそのものを憎んでいた。
「人類の未来を保障する」という傲慢な在り方。そしてその傲慢さが、人類の未来そのものを滅ぼすと気が付けなかったこの女にも！
「所長！」
マシュと藤丸がオルガマリーを助けようと、レフに挑み掛かる。
レフは聖杯を持つ左手を振る事で二人を地に磔にした。
聖杯を使うまでもない。
キャスターであれ、デミ・サーヴァントであれ、レフ・ライノールの前では等しく無力である。
「か、身体が……動か、ない……!?」
藤丸が苦しげに呻いた。
レフは地に這いつくばった二人を無視して、オルガマリーの顔を鼻がくっつく程間近で覗き込んだ。
「その顔だよオルガ。その絶望こそ、罪深いアニムスフィアに相応しい。だが、まだ足りないな」

レフの意思に呼応して、聖杯が光り輝いた。
洞窟内の空間が歪曲し、次空を超えた先にあるカルデアスがこの地に現出する。
「カ、カルデアス……!?」
「そうさ。君のために時空をつなげてあげたんだ。見たまえ、あの赤色を！人類の存続を示す青色は一片もない！アニムスフィアの末裔よ、あれがお前たちの愚行の末路だ！」
オルガマリーの顔が一層歪む。
レフは喜色を隠しきれない声音で、オルガマリーの心を完全に折りにかかった。
「私からの慈悲だ。カルデアスに触れて、生きながら永遠の死を味わうといい」
レフの言葉にオルガマリーは硬直し、顔を落とし、そして再びその顔を上げた。
顔面は蒼白で、目には涙を浮かべ、唇は固く結ばれている。
だが、しかし。
レフ・ライノールはその様子に、妙な違和感を感じた。
……なんだ、その「目」は。
おかしい、おかしいおかしいおかしい。
何故だ、何故取り乱さない？何故泣き喚かない？何故絶望しない？何故、そんな顔ができる？

かつての彼女なら、みっともなく惨めに泣き喚いたはずだ。
そうでなくては、カルデアスを現出させたこの余興の意味がない！
「助けを乞え！怯声を上げろ！苦悶の海で溺れるがいい！」
レフはオルガマリーの首を絞め上げる力を強くして、声高らかに叫んだ。

※

オルガマリー・アニムスフィアはその絶望を含んだ表情とは裏腹に、内心はらわたが煮えくりかえるような思いだった。
彼女の視界の隅で、カルデアスが燃え盛る。
カルデアスとは地球の魂を複写する事で作る出された疑似天体、謂わば小さな地球のコピーである。
それが燃えているということは、トールが語ったように、人理は焼却されたという事を意味していた。
私のいたらなさが悲劇を引き起こした、とレフは言った。
自分の首を絞める、かつて自分の心の支えだった男を見る。
憎い、とは思わなかった。裏切られた事に対して、ああ、やっぱりか、という諦めば

かりが心にひしめいていて、それがどうしようもなく悔しかった。
（ああ、どうして私は、こんなにも惨めなんだろう……）
まだ、誰にも褒められてない。
誰も、私を認めてくれてない。
みんな私を嫌っていた。
（生まれてからずっと、ただの一度も、誰にも認めてもらえなかったのに――！）
違う、と心の中で誰かが呟いた。
それは小さな声だったが、オルガマリーにははっきりと聞こえた。
ここまで、短いながらも共に歩んだ人々の声が聞こえてくる。
『よぉ、アンタ。いいツラ構えになったじゃねーか』
『――はいッ！わたしの背中、皆さんに預けます！』
『私が必ず、君を護ってみせる』
そうだ、違う。誰にも認めてもらえていない？違う！
藤丸とマシュとキャスターと、力を合わせてセイバーを打倒した。
あのテンションのおかしい迷惑な人狼、トオルは、危険も顧みずにこんな私を助けにきてくれた。
そこに、悪意なんて在りはしなかった。

誰もが対等で、誰もが力を合わせて共に戦った。
なのに私が私自身を否定してしまったら、彼らに合わせる顔がない！
私はもう、誰かに縋って生きるかつての惨めな自分じゃない！
オルガマリーの心の中で、メラメラと感情の炎が燃え上がった。
助けを乞え？怯声を上げろ？
私を裏切ったその口で、そんなふざけたことを口走るのか！
「ふざ――ふざけないで！」
パァン、という快音を響かせて、これまでの全ての鬱憤を乗せた怒りの平手がレフの右頬に思いっきり炸裂した。
やってしまった！という死を恐れる感情と同時に、なぜかとてつもない達成感がオルガマリーの心を支配した。
トオルの言葉で、既に覚悟はできていた。
後は自分の悔いのないように。
オルガマリー・アニムスフィアは、傲慢で、意地っ張りで、プライドが高くて、そのくせすぐ動揺する女である。
それでも。同じくらい頑張り屋で、心根の優しい、芯の強い女だった。

※

「ッ!?……それが貴様の答えか！ならば望み通りにしてやろう!!」
レフの魔術によって宙に拘束されたオルガマリーの身体が、カルデアスに引き寄せられていく。
オルガマリーは、死を覚悟した。
最期にようやく、自分の誇りを取り戻せた。悔いはない。
……いや、嘘だ。やっぱり、死ぬのは怖い。
（だってカルデアスよ!?高次元の情報体よ!?次元が異なる領域なのよ!?人間が触れれば分子レベルで分解されてしまうのよ!?そんな、そんな死に方って、ないじゃない！）
覚悟というものは、一旦冷静になってしまうとすぐに萎えてしまうものだ。
魔術師といえども、たった２０そこらの女が咄嗟に決めた死への覚悟など、まあこんなもんである。
オルガマリーは天に向かって、願いを込めて叫んだ。
「私をマスターって呼んだんなら、助けにきなさいよッ！トオルゥゥゥゥゥゥゥゥ!!」
轟音。
直後、洞窟の天井の一部がなんの前触れもなく崩落した。

崩れ落ちた天井から、星の光が射し込む。
紅蓮に燃える街の空でも、そこは変わらず深い蒼をたたえた夜空が広がっていた。
ドカンドカンと豪快な音と共に、雨のように降りしきる岩の中、天井から覗いた夜空から一筋、銀色の流星が地に堕ちた。
「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”ーーーーーーーー!!?」
「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
その流星はカルデアスに呑まれかけていた空中のオルガマリーに直撃し、両者はもつれ合うようにして、それなりの高さから地面に思いっきり打ち付けられた。
「「あいったーーーーーーー!?」」
斯くして、銀色の星は降り立った。

第１２節　昨日とは違う世界へ

今や洞窟内は混沌の様相を呈していた。
土煙が周囲を取り巻いて、内部の視界はすこぶる悪い。
その中で煌々と赤く輝くカルデアスだけが、太陽のようにその存在を主張している。
その太陽の下に、蠢く影が二つ。
レフ・ライノールは服についた埃すら払うのを忘れて、空から堕ちてきたソレを凝視していた。
天に空いた穴から射した光芒が、スポットライトのように一点を照らす。
降り注ぐ星と太陽の光に銀色の体毛を煌めかせ、ソレがゆっくりと起き上がった。
ヒトと呼ぶにはあまりにも異形なシルエット。ピンと張った耳は天を衝くようにそそり立ち、開かれた口からは鋭い牙が覗く。左腕の肘から先は大きく膨れ上がり、まさに怪物と呼ぶに相応しいソレの名は――
「銀色のウェアウルフ……幻想種だと……!?」
レフの声に応えるかのように、銀狼が吼える。
土煙は爆発したかのように辺りに四散し、周囲の魔力が、まるでブラックホールに呑

み込まれるかの如く銀狼に吸い込まれて行く。
魔力を取り込んでいるのか。
だが、それでどうなるというのだ。
魔神柱たる私に、幻想種程度で抗えるとでも?くだらない。
『カルデアスの座標固定まであと４０秒!それまでなんとかもたせてくれ!』
ノイズ混じりに聞こえるこの男の声は、ロマニ・アーキマンのものだ。
あの男、管制室に来るように伝えておいたというのに。爆発の難を逃れるとは、なんという悪運なのだ。
レフはおもわず舌打ちした。
未だ小賢しく這いずり回るカルデアの存在、おまけにアニムスフィアを嬲るための折角の余興も台無しにされた。
どいつもこいつも、統率のとれてないクズばかりで吐き気が止まらない。
「人間というものは、どうしてこう運命からズレたがるんだい?」
口の端がつり上がる。喜悦はなく、憎悪がそうさせる。
手始めに殺し損ねたアニムスフィアを殺害する。４８番目のマスターとデミ・サーヴァントはこのまま地面に縫い付けておけば良い。要たるセイバーが倒れた今、この特異点は崩壊する。とどめを刺すのも億劫だ。この世界と心中させてやるのも一興だろ

う。

レフはゆっくりと腕を上げてオルガマリーに狙いを付けた。

なんのことはない。これまで魔術師として生きた時に身につけた、我々から見れば児戯にも等しい魔弾を用いるだけのこと。

なんともあっけないものだ。

「君との付き合いも長かったが、まったく、耳障りな小娘だったよ、君は」

収束。

指先に魔弾が形成されてゆく。そこには何の感慨もなく。無造作に。殺意すら伴わせず。

路傍を這いずる虫ケラを踏み潰すような感覚で、レフ・ライノールはオルガマリー・アニムスフィアに死を叩きつけようと――

「――ゴハッ!?」

腹部に凄まじい衝撃。

世界が逆に回転する。否、私自身が吹き飛ばされている――!?

空中に我が身が打ち上げられたのか。

そう理解した回る視界の端で、あの銀狼が猛然と大地を蹴る姿が見えた。

跳躍。あまりの圧に耐え切れず、地面が陥没する。

レフの本能が叫ぶ。人の身では、次の一撃は耐えられない。
「聖晶石、セット……！ドリルを回せ！ドリンチちゃん!!出力最大だ！」
《グングンチカラガワイテキタ～！オッケ～！ソノオーダーニ応エマショウ！》
銀狼の肥大した左腕から機械的な女の声が聞こえる。いや、あれは魔術礼装か。
カルデアに未登録の魔術礼装。だが、あのデザイン、あの奇抜さ。
それにとても聞き覚えがある、この独特なイントネーション。
間違いなく奴の仕業だ。
「ダ・ウィンチ！貴様何をしたーーーッ!!?」
現状に理解が追いつかない。空中に打ち上げられた身体が、ゆっくりと下降していく。
落下して行くレフに銀狼が追いすがる。
左腕を覆う魔術礼装が、網膜を焼き切らんとばかりに虹色に輝く。
銀狼が咆哮した。
「『夢の残骸（ユキチブッシャー）』！」
「――――!?」
レフの腹に虹の光が炸裂する。
破壊的な形状のドリルが体内を暴れまわり、器官がズタズタに引き裂かれる。

（ば、馬鹿な！幻想種ごときにこの私が――）

虹色の光が体内で暴走し、レフの生命機能を全て断ち切った。

血塗れの身体が地面に叩きつけられる。

「――ガッ」

断末魔すらろくに上げられずに、レフはその場で力尽きたように倒れた。

※

高さ１０メートルからの着地。この肉体では造作もないことではあるが、戦闘機動をしてしまえば流石に息が切れる。膝をついて、肩で息をする。

左腕を覆うドリンチちゃんが妙に重く感じる。自分で思っている以上に、身体が疲弊している証拠だ。

なにせこの世界に生まれてから戦いっぱなしだ。流石にこれ以上は戦えないぞ……。

倒れたレフを恐る恐る見やる。

先手必勝。最大の脅威であるレフ・ライノールに、今の手札の中で最高威力のある技を叩き込んだ。

オルガマリーをこの冬木から連れ出すには、ヤツに聖杯を使わせるわけにはいかな

い。

起き上がってくれるなよ……。

『やったか!?』

カルデアの座標固定を指示しているＤｒ．ロマンに代わってこちらの様子をモニターしていたダ・ウィンチちゃんが叫んだ。

その直後である。

レフの肉体を突き破って、赤黒く脈動する触手が鋭く私に突き出された。

すんでのところで回避するが、間に合わない。

回避し損ねた数本の触手が左腕のドリンチちゃん、胴体、首に絡みつく。

「ぐぅぅぅ……!?」

『……なんだ!?今、サーヴァントでも幻想種でもない魔力反応を検知したぞ!?しかも超強力だ!これはちょっとやばいかもだよ狼クン!』

通信機越しに聞こえるダ・ウィンチちゃんの声が切迫している。

背中から触手をユラユラと揺らめかせ、レフがゆっくりと立ち上がる。

ぽっかりと穴が空いた腹部から、グロテスクな赤い目玉が複数、ぎょろぎょろと蠢いている。その目が一斉に私の姿を捉えた。あの、見ただけでＳＡＮ値が減りそうな姿は、

「魔神柱……！」

立ち上がったレフが何本もの触手を伸ばし、洞窟内の壁、天井、地面を突き刺す。

まるで獲物を捕らえる蜘蛛の巣のように、空間を触手の網が埋め尽くした。

「よくもこの私に傷をつけてくれたな、この幻想種ふぜいが！身の程を知れ！」

全身を絡め取っている触手の力が強まる。

頼みのドリンチちゃんも封じられた。

『魔力放出（音）』は首を絞められて発動できない。

い、息が……。

こ、このままじゃ、死ぬ……！

「『ウィッカーマン』！」

この声は!?

キャスターの詠唱とともに、大地が盛り上がる。ズドン！と勢いよく、燃え盛る巨大な拳が、レフを下から突き上げた。そのままレフを握り込み、纏わりつかせた炎でレフの身体を焼く。

大地の割れ目から、キャスターが這い出てきた。

キャスターニキ、なんで地面に埋まってるんですか!?

「今だ！お前ら逃げろ!!」

キャスターの合図に呼応して、瓦礫の下で強力な魔力が胎動した。
『約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガン）』！」
闇の奔流が放たれた。
射線上にある全ての物質が闇に呑まれて消えていく。
この宝具はセイバーオルタ!?
本編ではレフ登場前に消えていた二騎のサーヴァントが、まだ生きているのか！
二騎のサーヴァントが、力を貸してくれている。
「あの傷で、まだ動けるか!?」
驚愕するレフにセイバーオルタの宝具が直撃する。
触手を盾に、レフはその攻撃を耐えた。
あの姿でも、一級サーヴァントの宝具を防ぐのか。
反撃に転じたレフの触手が、満身創痍のセイバーオルタとキャスターを貫く。
「今度こそ、ここまでのようだ……。後は……」
「狼の旦那、坊主たちを、キチンと連れ帰ってやれよ……」
セイバーオルタとキャスターが光の粒子になって消えていく。
「キャ、キャスター!!」
くっそぉぉぉぉ!!

座標固定まであと１０秒。
二騎のサーヴァントの決死の妨害で触手が緩む。
隙ができた。今だ！
「むぅぅぅぅぅぅ!!」
全身の筋肉が膨張する。
触手を引きちぎり、噛みちぎり、拘束を解いた。
「逃すと思うか！」
レフの背中の触手の全てが私に殺到する。
ヤツを邪魔するものはもう何も無い。
視界一杯に触手が迫る。押し寄せる死。『魔力放出（音）』での狙撃では到底捌き切れない数。
ここまでなのか……！
私が死を覚悟したその時、背後で魔術が発動したのを感じた。
「スターズ。コスモス。ゴッズ。アニムス。アントルム。アンバース。アニマ、アニムスフィア――――！」
何者かの詠唱。
そして、夜空の星が瞬いた。

星から何十もの光の槍が降り注ぐ。
流星は凄まじい精度を持って、正確に触手の全てを迎撃した。弾け、焼き切り、消しとばす。
これは、オルガマリーの魔術なのか!?
道が拓けた。
そのままオルガマリーの元に駆け寄る。
肩で息をする彼女と、思いっきり抱擁した。
先ほどの大魔術の行使でアドレナリン全開の彼女が、私の目を覗き込んだ。目と目が合う。それだけで、お互いの心が理解できた気がした。
「信じてるから」
彼女は、ただそれだけ言った。
頷きをもって私もそれに答える。
『マシュと藤丸くんのレイシフト帰還準備完了!ロマニ、そっちは!?』
ダ・ウィンチちゃんが叫ぶ。
『よぉし!カルデアスの座標固定完了!!行けーーーー!トール君!』
Ｄｒ．ロマンの合図と共に、私とオルガマリーは先程とは違い青い輝きを写し出しているカルデアスへと飛び込んだ。

カルデアスは、地球の魂を写し出した地球のコピーにしてライブラリ。
『其は有限なる小奇跡』が発動する。
冬木の地に渦巻く神代の魔力、溜め込んだ膨大なソレを『其は有限なる小奇跡』が全て吸い上げる。
身体が空中に解けるように消えていく。
カルデアスに、二人の魂を刻み込む。
願うのはたった一つ。
「――――彼女との、未来を！」

世界が分岐する。
それは終わりの始まり。
行く先に待つのは果てのある世界。
だがそれでも、銀色の狼と銀髪の女は、前に進み続ける。ただ未来を求めて。

邪竜百年戦争オルレアン
第1節　流浪の女騎士の噂

「なあユーゴ。聞いたか、あの噂」
「ん、何のだよ？」
「そりゃ、おめぇ。アレだよアレ！」
　シトシトと雨が降る森の中、ようやく拾い集めた薪が濡れないように、乾いた地面に腰を落ち着けて無精髭をのばした中年の男は興奮気味に言った。よっこらと薪を足元に置いて、男は村の顔馴染みであるまだ年若い青年を見上げた。
　二人とも顔が煤け、服はあちこちが擦り切れている。まともな食事もとれず、頬はこけ、筋張った腕が袖の先から覗いていた。
　ここはジュラの大森林。その森の端にある名も無い小さな村から、彼らは薪と僅かな食料を集めにやってきていた。
　行商人が村を訪れなくなって、もう一週間近く経つ。竜の魔女が現れてからというもの、この辺りの生活は厳しくなった。まずオルレアンが焼かれ、それから他の大きな都市も次々と陥落しているらしい。空を飛ぶ怪物が近くの村を襲ったなんて噂も聞こえ

てくる。

様子を見にいくと言って飛び出した、レミーの息子、腕っ節自慢のアンジェはもう５日も帰ってこない。

彼らの村が襲われるのも、もはや時間の問題だと思われた。かと言って村を捨てて逃げるわけにもいかない。先祖代々、時間をかけて切り拓いた村だ。他の土地では生きていけない。

そんなどうしようもない状況。けれど男は妙に楽しげな様子で、朗々と詩を吟じるように話し始めた。

「そこに邪悪な竜あらば、駆けつけたるは女騎士。銀の長髪靡かせて、お供の番犬引き連れて。誰が呼んだか聖女の再来、恐怖の魔女をやっつけろ～」

「なんだ、その下手くそな詩」

ユーゴは呆れた様子で、近くの木の幹に体を預けた。この無精髭の中年、ロベールはいつもこんな感じだ。村を訪れる行商人から外の話を聴いては、いつも詩を作っている。

正直、デキはイマイチだ。ユーゴがほんの小さな少年だった頃、一度訪れた本物の吟遊詩人に比べれば、あまりに拙い。けれどユーゴを含め、村のみんながロベールの作った詩を聴くのを楽しみにしている。娯楽が少ないというのもあるが、ロベールの作った

詩は妙に心を弾ませる何かがあった。
「いやな、一昨日村を通った一団があったろ」
「ああ、このあいだの。確かオルレアンの生き残りだとか」
「そうよ。連中、命からがら街を出たはいいがよ。その後おっかねぇ竜に追いつかれたんだと。そんでもうおしまいだぁー！って時さ。出たんだよ」
ロベールが声を潜めて言った。思わず、ユーゴは前のめりになって続きを急かした。
「出たって、何が」
そんなユーゴの様子を見て、ロベールはニヤリと笑ってから続けた。
「さっき謳った通りさ。俺たちを救ってくれる、銀色の女騎士様よ」

※

「腹が減ったなぁ……」
テシテシと可愛らしい音を鳴らしながら、見渡す限り何もない、長閑な平原を人里目指してひたすら歩く。飯を訪ねて三千里。いや、まだ大して歩いてないのかもしれないが。最後にまともなご飯を食べたのは、ワイバーンに襲われていた逃亡民を助けた時だ。せめてものお礼にと受け取ったのは、乾涸びたパンのかけらと僅かな水。それでも

彼らからすれば貴重な食料だったろうから、文句はないのだけど。それからはずっと、食用にできる雑草とかをやり繰りして飢えをしのいでいる。ああ、前世の食事が恋しい。かつてひもじさの象徴だった安い缶ビールとレトルトのカレーすら、今は全て遠き理想郷……。

「文句を言わないでちょうだい。余計に辛くなるから」

私の後ろで、オルガマリーがドスの効いた声を出した。彼女が動くたび、ガッシャガッシャと鎧同士がぶつかる音がする。

胴には鎖帷子。鎧で腕と脚だけを覆った軽装でも、重いものは重い。おまけに腰にはなまくらの剣を引っさげているものだから、魔術による身体強化なしでは、とても動けたものじゃない。

けど、彼女が鎧を付けているのにはちゃんと理由がある。言ってしまえばコスプレだ。このご時世、丸腰の女一人が出歩くのは色々と問題がある。おまけに本来彼女が着ていた服は文明レベルが違いすぎて、とてもこの時代にとけ込めない。

そこでフランス軍兵士に扮してしまえ、というのが私の案だ。幸い、女性であるジャンヌ・ダルクが戦場を駆けたフランスだけあって、奇異な視線が集まることはあっても、あまり怪しまれることはない。前例があるってのは、偉大な事だ。

驚いたのは、オルガマリーの格好がただのコスプレに止まらなかった事だ。魔術師は

身体強化なんてお手の物とは聞いていたが、まさか鎧を着た上で骸骨や野盗を物理で倒せるとは思わなかった。

『其は有限なる小奇跡』で「叩き潰す」という概念を強化した、なまくらの剣（もはや鉄の棍棒）が強いというのも勿論あるが。

おかげで私が前線に出なくても何とかなるから、こうして人畜無害な犬に『変化』してオトモに徹する事ができるわけだからありがたい。

「申し訳ありません！『白銀の女騎士』殿！」

私は短い四足をせかせかと動かしながら、首だけ後ろを向けて笑った。オルガマリーはうんざりした顔で天を仰いだ。

「黙りなさい。次言ったら餌抜きよ」

私の身体を抱え上げたオルガマリーが、ものすごい形相で私を睨みつけた。うさみちゃん目こわっ！

「くぅ～ん……」

私はとりあえず幼気な子犬のフリをしてこの場を誤魔化すことに徹したのだった。

１４３１年、フランス。

百年戦争の真っ只中。国王不在、竜が跋扈するこの混沌の地で、人類史をかけた壮大な戦いが始まろうとしていた。

第２節　フランスふたり旅

「トオル、しっかり狙うのよ。絶対、絶対逃したらダメよ」
「狼は狩猟が得意なはずなんだ。思い出せ、狩りの本能を。……よし、今夜は豪勢に行こう」
　自分の鼻をひと舐めして、風にかざす。東から抜ける風。私が今いる方が風下だな。こいつは上出来だ。
　草むらに潜み、目標へゆっくりと近づく。おお、見えてきた見えてきた。草むらから黄ばんだ茶色の耳がピョコピョコ覗く。野うさぎだ。
　久しぶりの肉、貴重なタンパク源である。フランス料理は１６世紀イタリアからもたらされたものらしいが、中でもうさぎ料理は有名だ。食用にうさぎを飼育する程フランスでは身近な食材だとか。これは期待が高まる。
　人間も人狼も、雑草ばかり食べてるわけにはいかない。特に私は人狼形態だとすこぶる燃費が悪い。故にこうして小型犬に『変化』して燃費を少しでも抑えようと、涙ぐましい努力をしている訳だが。それにも限界というものがある。囁くのよ、「お腹減りたまえ……！」とスーパー天草くんが。

ちなみにこのネロ祭り高難度での天草のスキル、元ネタは島原の乱で天草が兵糧攻めにあったところから来ているのだと聞いた。このスキル、とても強力な効果を持っていて、スーパー天草くんにお腹減りたまえされた我々マスターは阿鼻叫喚。大炎熱地獄――『イモータル・カオス・ブリゲイド』。腹が減っては戦はできぬ、とはよく言ったもので。

閑話休題。

さぁ息を規則正しく、小さく静かに、吸って、吐いて、吸って。

うさぎが何かに勘付いたように、耳を震わせた。慌てて近くの小さな丘に登って逃げようとする。

だが遅い！この距離なら逃がさない。私の小さな後脚が力強く地面を蹴った。たったひと蹴りで彼我の距離はゼロになった。背中を見せて逃げるうさぎを押し倒す。頭をガブッとひと噛み。南無三！

うさぎはビクビクと痙攣して、しばらくしてからグッタリと動かなくなった。

「とったどーーー!!」

「よくやったわねトオル！今夜はご馳走よ！」

駆け寄ってきたオルガマリーが私の頭をわしゃわしゃした。グリングリン撫でられる。私もなんだか嬉しくなって尻尾をブォンブォン振った。体育館に置いてある大型

扇風機並の回転速度だ。私に触れると火傷するぜ……摩擦で。
二人とも空腹でテンションがおかしくなっていた。
「ハハハもっと撫でたまえ撫でたまえ!」
唐突に、オルガマリーが私の頭からパッと手を離し、フッとため息をついて私を見下ろした。
「冷静に考えたら喋る犬って気持ち悪いわね」
「急に冷静になるのやめてくれません?」
さあ、うさぎを捌こう。
腹を裂いて、血を抜いて、内臓を取り出して、皮を剥いで……。
私は知識でしか知らないから、実際やるとなるとすごく時間がかかりそう。血抜きは早くしないと肉が傷むらしいから、手早くすませたいけど……。
「それは私がやるから、アンタはそこに座ってなさい。狩るのと捌くの、役割分担よ」
そう言ってオルガマリーは腰に下げた小さなナイフを取り出して、手早くうさぎを解体し始めた。
「おお、所長の意外な一面……」
「魔術師だもの。慣れてるのよ、こういうの」
オルガマリーが手を止めずに返答した。

ああ、なるほどね。そういう用途でかー。なんか想像できるわー。魔術の勉強でうさぎ解体とかやってそうだわー。

それからしばらくして、うさぎの解体が終わった。

返り血にそまった所長と、食べられる部位がほとんど削ぎ落とされてしまった無残な肉の塊がその手にぶら下がっているのが印象的だった。

「……考えてみたら、食べるために解体なんてした事無かったのよね」

「そういう時もある」

満点の星空の下、焚き火を囲んで、肉を焼く。

焼いただけのうさぎ肉は、ほとんど味がしなかった。塩とかないしね。うん、そういう時もある。

これは小さな一歩だが、私達はこうして少しずつ成長していくのだ……。

あ、流れ星……！ステーキ食べたいステーキ食べたいステー……あぁ。

※

夢を見ていた。

レフの触手が眼前に迫る。しかしそれらは流星によって弾け、目の前の道が拓けた。

オルガマリーと抱き合う。

「信じてるから」

私は頷いて、二人でカルデアスに飛び込んだ。

そこで目が覚めた。

私はコロリンと寝返りをうった。消えた焚き火の向こう側で、鎧と鎖帷子を枕元に置いて、焼け落ちた村から拝借したボロ布を毛布がわりに、オルガマリーが穏やかに寝息を立てている。

「もう一週間も前のことか」

冬木の大空洞に突入する前、Ｄｒ．ロマンにカルデアスの座標を変えてもらうよう頼んだ。

指定したのは１４３１年、フランス。ＦＧＯ第一特異点、邪竜百年戦争オルレアンの舞台だ。

オルガマリーは、肉体を失う事でレイシフト適性を手に入れた。しかし、レイシフトからカルデアに帰還してしまうと、肉体を失ってしまった彼女の魂は、帰る場所を見つけられずにこの世界から消滅してしまう。

正確には星幽界という界位に存在する魂は、肉体なしには物質界には留まれない、とかいう理屈があるらしいのだが、私も詳しくはわからない。後でダ・ウィンチちゃんな

りに聞いてみるつもりだ。オルガマリー本人の前では話しづらいから、タイミングを伺う必要があるが。今はあまり、彼女を不安にさせたくないから。

そうして私は、冬木に満ちていた神代並の魔力を『魔力逆流』で吸い上げて『其は有限なる小奇跡』を発動させた。

私達二人の魂を、カルデアスに刻み込んだのだ。

魂とは、物質の記録だ。肉体に依存しない存在証明。

そしてカルデアスは、地球の魂をコピーした疑似天体。つまり地球の記録な訳だ。

その記録の中に私達の記録を上書きした。

１４３１年のフランスに本来存在しないはずの私達は、こうして疑似レイシフトとも呼べる強引な技を使って冬木から脱出したのだった。

目覚めた時、私達は焼け落ちた村の広場に横たわっていた。

それからここまで一週間。街を探してずっと歩き続けている。目的は藤丸くんとマシュちゃんの捜索。カルデアとの通信をしようにも、私達は自分たちの居場所を示すものを持っていない。あいにくドリンチちゃんにはそういう機能はなかったようだ。

《ウーン、オ役ニ立テナクテゴメンヨ》

と謝られてしまった。つくづく高性能なＡＩである。まるでもう一人のダ・ウィンチちゃんと喋っているみたいで、なんだか面白い。おかげで気が紛れるから、この過酷な

ふたり旅もなんとかここまで乗り切ることができた。
そのドリンチちゃんも、２日前に内蔵バッテリーが切れて、今は沈黙している。魔力貯蔵タンクとはまた別に、電気駆動する部品もあったらしい。ダ・ウィンチちゃんの多才さには驚かされるばかりである。
とにかくそういうわけだから、今はひたすら街を探して歩き続けるしかない。
藤丸くん達の手がかりを探るためにも、食料のためにも。
「……さて、もう一眠りするか」
朝になったらオルガマリーを起こして、朝食に雑草を食べて、それから。
また、歩きださねば。

第3節　今を生きる英雄

「トオル、あれを見て!」
それは翌日の朝のことだった。朝食の後、歩き出してしばらく。
オルガマリーが目を細めて、遠くを指差す。魔術で視力を強化しているようで、私の肉眼では何も捉えられない。私も『其は有限なる小奇跡』を使い、視力を強化し目を凝らす。
遥か遠く、ワイバーンの群れに襲われている数十の人の姿が見えた。
「襲われている。避難民かフランス軍かはわからないが……」
「――いえ、おそらくその両方よ。トオル変身よ!」
オルガマリーが背中に担いでいた荷物を地面におろした。剣を鞘から抜きはなち、状態を確認してから、また鞘に戻す。彼女は戦うつもりだ。
「いいのか?狼に擬態したとしても、私の姿は目立ちすぎる」
「なりふり構っていられないでしょう!彼らを助けないと!目の前の人達を救えなくっちゃ、人類なんて救えない!そのために私は、カルデアに居たんだから」
オルガマリーは本気だ。

剣を握る手も、膝も震えているのに。口をキュッと引き締めて、目だけはしっかりと据わってる。

だったら私も、それに応えないとな。

メキメキと私の身体が音を立てて『変化』していく。小型犬から、ライオン程の大きさの狼へ。野生にしては大き過ぎるが、いない事はないかもしれない、と思わせるくらいのギリギリのサイズだ。

オルガマリーが私の背中に跨った。

「お願い！」

よしきた。私は力強く地面を蹴った。

大地を疾走する。景色がみるみる後ろに流れていく。巡航速度、８０キロ。騎乗用装備なしで、これ以上の速度は上の彼女に負担がかかり過ぎる。

ワイバーンと戦うのは、これで９度目だ。奴らは空を飛ぶ。こちらからの攻撃方法は私の跳躍による空中戦のみ。背中に跨るオルガマリーの持つなまくらの剣「触れれば粉砕」が急所に当たりさえすれば一撃で戦闘不能にできるが、奴らもそう簡単には接近させてくれないからな……。馬上槍があればまだ楽なのかもしれないが、無い物ねだりしても仕方ない。

点のように小さかった人影が明瞭に確認できる距離に近づいた。

３０名程の避難民と思わしき群衆と、それを守りつつ後退するフランス軍僅か１６名。対するワイバーンの数は５匹。

よく持ちこたえている。代わる代わる飛びかかってくるワイバーンを、統率のとれた動きでフランス軍兵士達が追い払う。その様はまるで、寄せては返す波のよう。兵達の練度もさる事ながら、さぞや優秀な指揮官がいるに違いないと思わせる、手馴れた動きだった。

兵士達はワイバーンの対応に必死で、まだ私達には気付いて居ない。

ワイバーンの数匹がこちらに気が付いた。私達は奴らの風上にいる。風が私達の仇になったか。

「左に回り込んで。手前のワイバーンを私達に引きつけるわよ！」

「了解。振り落とされるなよ。加速する！」

２匹のワイバーンがこちらの動きに食らいついた。フランス軍兵士を無視してこちらに反転する。急降下。接近戦なら望むところだ。一番近くのワイバーンとすれ違う。

「届いてぇ！」

オルガマリーが振るった剣が、ワイバーンの翼を叩く。ドコンッ！という派手な音をあげてワイバーンの片翼が根元からあらぬ方向に折れ曲がった。まずはひとつ！

もう１匹が飛び上がった。翼を大きく広げる動作、……切り裂く風が来る！

「そうそうとやらせるものかよ……！」
跳躍。正面。鋭い牙で頭に食らいつく。そのまま体重を利用して首をねじ切る。ワイバーンが力を失って落下する。身を捻って、軽やかに着地。
「ちょっと！跳ぶなら先に言いなさいよね!?」
オルガマリーが震える手で私の背中の毛を掴み直して言った。残りは３匹。
兵士の正面に釘付けになっているワイバーンに後方から距離を詰めるべく走り出す。
私が近づくと、３匹の動きを牽制していた矢の斉射が止んだ。
「弓兵、撃ち方やめ！挟撃します！各員、私に続きなさい！」
指揮官と思われる、白銀の鎧を纏った騎士が先頭に立ち前進を開始した。こちらの動きに合わせた完璧なタイミング。あの判断、やはり相当な手練れを思わせる。
先頭の騎士が一瞬視界に入る。
んん……!?あの顔、どこかで見覚えがあるような……!?
「トオル！跳んで！」
思考中断。オルガマリーの合図で跳躍する。空中で振るわれた「触れれば粉砕」が、ワイバーンの頭をカチ割る。目が飛び出し、口から真っ赤な泡を吹いて、頭を潰されたワイバーンが錐揉みしながら落下していく。これでみっつ。
急所に当たれば幻想種だろうが問答無用で一撃だ。改めて『其は有限なる小奇跡』の

強さを思い知る。サーヴァントだってコンクリートで倒したんだもんな……。
「うう。お、終わったようね。それにしても、やっぱり慣れないわね。この手に残る感触って……」
オルガマリーが剣を鞘に戻して、ひたいの汗を拭う。
残る2匹のワイバーンは、無事に兵士達に討ち取られたようだ。
「白銀の女騎士殿だ！白銀殿が我らを助けに来てくれたぞ！」
「見たか!?あの猛々しくも美しい戦い！白銀殿万歳！フランス万歳！」
兵士達が勝鬨を上げる。後方に隠れて見守っていた避難民達から、安堵のため息が漏れるのがこの距離からでも聞こえてきた。我ながら地獄耳だなと思う。にしても、オルガマリーの噂ってどこまで広がってるんだ？助けた避難民が行く先々で話してるにしても、この拡散具合は……。
「各員！周辺の警戒を怠るな！死体を確認しろ！まだ息があれば確実にトドメをさせ！」
騎士が剣に付いた血を振り払って叫んだ。
先程片翼を折ったワイバーンに、3人の兵士が駆けていく。なるほど、入念な事で。
騎士がこちらに駆け寄ってくる。オルガマリーは私の背中から下りて騎士に応じた。
「その姿、その武勇。白銀殿とお見受けします。お噂はかねがね。此度は窮地を救って

いただき、感謝の念に堪えません。我々だけではどうなっていたことか。ああ、失礼。申し遅れました。私の名は――」

その男の姿を間近で見て、確信した。

十字の紋章があしらわれた白銀の鎧、病的とは言わないまでも、血管が透けて見えそうな非常に薄く白い肌、濡れたような黒髪。剃り上げられた眉。そして何よりこのＣＶ鶴岡聡な声！

フランス元帥。かつて聖女ジャンヌ・ダルクの副官として、共に戦場を駆けた男。この時代を生きる、フランスの英雄。

その名を。

「――ジル・ド・レェと申します」

第４節　鉄壁のヴォークルール

ジル・ド・レェ元帥と共に、彼らの拠点、ヴォークルールへと向かう。
避難民を連れての過酷な旅だったが、ワイバーンとの戦闘から半日もしない内にヴォークルールに辿り着くことができた。
後ろから付いて来きていた避難民達から、歓喜の声が上がる。
ヴォークルールの街は強固な石造りの外壁に囲われ、頑丈そうな門が、許されざる者の出入りを阻んでいる。
元帥が開門を指示すると、両開きの門がゆっくりと左右に開かれた。
出迎える兵士たちから、歓声とどよめきが上がる。歓声は無事帰った元帥に対して。どよめきは巨大な狼である私と、それに跨るオルガマリーへと向けたものだろう。
「ようこそ、ヴォークルールへ。ここが我々フランス軍に残された最後の砦。反撃の地です」
オルガマリーを背中にのせて、馬をゆっくりと歩かせるジル元帥と併走する。
私たちを見た住民達が、口々に驚きの声を上げる。
「あれが噂の……。まるで物語の一節のようだ」

「見ろ、あの狼の巨大さを。あんな化け物を従えているんだ。余程の怪力に違いねぇ……」

注目の的になっているオルガマリーは、必死に平静を装っている。

街の中は比較的平穏な空気が流れているようだ。避難民と元々の住民の衝突も無く、秩序が保たれている。

私と同じ事をオルガマリーも察したのだろう。喋れない私に代わって、積極的に質問していく。

「避難民を集めていると聞いていましたから、もっと酷い状況かと思いましたが。治安は安定していますね」

オルガマリーの疑問に、ジル元帥が頷き答えた。

「糧食の蓄えが豊富だった事が幸いしました。イングランドとの次なる戦に備えている最中でしたので。我がフランス軍と、ここにいる住民達をあと２ヶ月は養えます」

「ここの防衛は？ワイバーン……あの竜達からここを守りきるのは、至難の技のように思えますが」

「無論、我々だけではとうに陥落していたでしょうな。しかしご安心召されよ。このヴォークルールには、守護騎士殿がおられるのです」

こちらへどうぞ。そう言ってジル元帥は馬から降りて、手綱をお供の兵に渡し、この

街でで一番大きく立派な建物の扉を開いた。
「えぇっと……」
オルガマリーが私から降りて、困ったように元帥を見た。元帥は察したように、苦笑した。
「ははは。その巨躯では、流石に外では悪目立ちしますな。そちらの狼も、とうぞ中へおいれください」
「お気遣いありがとうございます。いくわよ、トオル」
「ワンっ！」
「「狼なのに!?」」

※

「彼がこのヴォークルール守護の要、ジョージ殿です」
元帥に通された部屋に立っていたのは、頑強そうな鎧に身を包んだ長髪の男性だった。
ああ、すごいぞ……！ゲーム内レアリティが性能と比例してないのが一目でわかるこの出で立ち。見る者を落ち着かせるような堂々とした立ち姿。

（トオル。こいつももしかしてサーヴァントなの？）
（もしかしなくてもその通りだ。ドラゴン殺しの逸話を持つ聖人。聖ゲオルギウスだ……！）
（な!?と、とんでもない大物じゃない！）
　彼が真名を明かさずただのジョージと名乗っているのは、サーヴァントという存在を無闇に公にして混乱させないためだろう。そも、説明したとして受け入れられるものでもなし。身分を偽るのも致し方ないことである。
　あまりのビッグネームの登場に内心怯みまくっているオルガマリーを見て、ゲオルギウスが口を開いた。
「元帥。そちらの方は？――いや、傍らに銀色の犬といえば、聞くまでもありませんでしたか。もっとも、犬ではなく狼のようですが……。はじめまして、白銀の女騎士殿。よければお名前を伺っても？」
（あああ、どうしよう。噂がここまで広まってるじゃない……）
（助けた避難民達が、ヴォークルールに逃げ込んだんだろうな。けどその噂のおかげで、サーヴァントにこうして巡り会えたんだ。この特異点を修復するなら、サーヴァントの助力は不可欠だ）
（確かに、彼の協力を取り付けるなら願っても無い状況ね……。流石にここで、という訳

にはいかないけれど）

オルガマリーはチラと周囲を見回した。部屋の中にはゲオルギウスとジル元帥しかいない。

だが元帥は今を生きる人間だ。聖杯の防衛機構により召喚され、このフランスに起きている事態を概ね把握しているサーヴァントとは違う。そんな彼の前でカルデアや人理修復の話などできるわけがない。

ゲオルギウスに私たちの正体と目的を明かすなら、機をあらためる必要があるだろう。

意を決した様子のオルガマリーが、ゲオルギウスに一礼してから名乗りを上げた。

「私はオルガマリー・アニムスフィア。カルデア騎士団の団長を務めています。よろしくお願いします、ジョージ殿」

ええ～!?カルデア騎士団ですか～!?

いや、まあこの時代に溶け込むなら騎士団ってのはあながち悪くないのかな？でもどこの国から来たとか説明できないけど大丈夫？ジル・ド・レェも元帥の立場としては、その辺問いかけてきそうだが。

「こちらこそよろしくお願いします、オルガマリー殿。共に力を合わせ、竜の魔女からこの国を救いましょう」

ゲオルギウスがオルガマリーの手を取り握手する。なんだろうこの頼り甲斐のある人は……。ヴォークルールを一週間もワイバーンから守りきったのは伊達じゃない。流石は守護騎士と呼ばれた人だ。

「して、他の団員の方はどちらに？」

ジル・ド・レェ元帥がオルガマリーに尋ねる。当然の疑問だ。さて、どう説明する？

「私たちは竜の魔女出現の報せを受けて救援に来たのですが、竜の襲撃で隊員は散り散りに……」

「なるほど、それで各地を回っておられたのですか」

元帥が納得したように頷いた。目が少し泳いでいるが……。

あ、この元帥！カルデア騎士団（仮）がどこから来たか聞かないつもりだな!?今は猫の手も借りたい状況だから、その辺あえて突っ込まないつもりだ……。所属を聞いて仕舞えば戦後報酬を国家が正式に支払う必要とか出てくるから、ただの現地協力者として参戦させるつもりだろう。忘れがちだけど、その辺の計算は流石は貴族ってところだな……。まあ、いまはそれがありがたいけど。

「では、それを踏まえた上で今後の方針について話し合いましょう」

ジル・ド・レェ元帥がいい笑顔でテーブルにフランスの地図を広げた。目が飛び出そうになってますよ、元帥……！ジャンヌに目潰ししてもらわないと……！

※

先程のジル元帥とゲオルギウスを交えた会議では、次はどの辺に遠征するか、という話し合いで終わった。ちなみに私とオルガマリーもラ・シャリテへの遠征に参加する事となった。この街からもほどほどに近く、まだ戦火の回っていない街である。藤丸くん達がここに居てくれればいいのだが。

「さて、頃合いかな」

私は石畳の上に敷かれた薄いカーペットから起き上がった。

夜も更けた。ゲオルギウスの居室も把握済みだ。

あらためて、私たちの今後の方針を話し合いに行くとしますか。

「ええ。ゲオルギウスに会いにいくわよ」

オルガマリーが元帥から支給されたサーコートを肩にかけて、廊下へと続く扉を開けた。

小型犬モードに『変化』してオルガマリーと暗い廊下を歩く。

「ここだ」

オルガマリーが控え目に扉をノックする。

「――どうぞ、お入りください」
　扉を開けたゲオルギウスが、私たちを部屋へと招きいれた。
「そちらへおかげください」
　ゲオルギウスがあらかじめ用意していたのだろう。クッションのよく聞いた豪華な椅子に、オルガマリーが腰掛ける。装飾の豪華さからして、元々はここの領主の持ち物だろうか。
　私は彼女の足元に控えるように座り込み、対面の椅子に腰掛けたゲオルギウスを見上げた。
「そろそろ来る頃合いかと思っていましたよ」
　ゲオルギウスの言葉に、オルガマリーが緊張したように口を開く。
「どうして私たちがここに来ると……？」
「そちらの狼を見れば一目瞭然ですよ。ドラゴンに迫らんばかりの神秘、明らかに幻想種です。今は犬のようですが」
　う、やっぱりサーヴァント相手には隠しきれてなかったか。生前ドラゴンという最強の幻想種を何度も相手にしたゲオルギウスだから見抜けた、という可能性もあるかもしれないが……。
『変化』を解いて人狼に戻る。

「はじめまして、ゲオルギウス殿。ウェアウルフのトールです」
「これは驚きました。ウェアウルフを使い魔にする魔術師とは珍しい。貴方達の来歴に、ますます興味が湧いてきました」
目を細めるゲオルギウスに、オルガマリーが居住まいを正して語り出す。
「話しましょう。カルデアの目的と、このフランス――いえ、人類史が晒されている未曾有の危機について」

※

ゲオルギウスは椅子から立ち上がり、窓から夜空を見上げた。
「何者かによる人理焼却、フランスという人類史のターニングポイントの特異点化、なるほど。おおよそ理解しました。あの空の光帯も、それに起因するものと見て間違いなさそうですね」
ゲオルギウスには、私のＦＧＯ一部クリアまでの知識は語っていない。
けどやはり、あの光帯についてはすぐに察しがついたようだ。まあ、アレについては今は手の打ちようがないから、議論する必要もないか。
「今後の方針ですが、貴方達はこのフランスへレイシフトしているであろうカルデアの

仲間を見つけ、このヴォークルールへと集結してください」
「それまで、貴方はどうするの？」
　オルガマリーが多少くだけた口調で話しかける。ここには人目はない。白銀を演じる必要もない。
「私はここの防衛に専念します。ここを襲撃するワイバーンの数も日に日に増している。おそらく避難民やフランス軍をここに集結させている事は、敵にも知られていると考えた方が良いでしょう」
　ゲオルギウスが腕を組んで答えた。
「サーヴァントが攻めてきたら、いくら貴方でもこの規模の街を守るのは無理なのでは？」
　私の問いにゲオルギウスが目を瞑り首肯した。
「一騎打ちならば負けることはありませんが、二騎以上となると厳しいですね。私がこのヴォークルールに流れ着くまでに交戦したサーヴァントは、ランサーとアサシン。真名は不明ですが、いずれも強力な者たちです」
「敵がすぐに攻めて来ないことを祈りましょう。とにかく、話は決まりね。私たちは早急に藤丸・マシュ、あるいは味方になり得る野良サーヴァントと合流し、このヴォークルールに戻ってくるわ」

オルガマリーがそう締めくくり、椅子から立ち上がる。窓の外はまだ真っ暗闇だが、そろそろ体を休めるべきだ。ラ・シャリテ出発は明朝。

運良く藤丸くん達と合流できたら、カルデアからドリンチちゃんのバッテリーを送ってもらわないと。

第５節　血濡れの吸血鬼

その日、ヴォークルールからフランス軍兵士３０名が出発した。全員が速度を重視した騎兵で構成されている部隊だ。先頭をジル・ド・レェ元帥が、殿を私に騎乗したオルガマリーが務める。

ヴォークルールからラ・シャリテまでの距離はおおよそ１６０キロメートル。その間に山間部はなく、馬を普通に走らせれば３日、急がせれば２日で到着する距離だ。

１日目はワイバーンに遭遇することもなく、順調に９０キロメートルの距離を消化した。

日が暮れる前に、遠征軍は適当に開けた場所を見つけ出し、野営の準備を開始した。

私の背中に括り付けていた装備から、オルガマリーがいつもの寝具を取り出す。毛布代わりのボロボロの布、ヴォークルールで調達してきた地面に敷く麻で作られた敷物。たったこれだけ。

敷き終わった麻の敷物に座って防具を外しているオルガマリーの下に、二人組の兵士がなにやら担いでやってきた。何事かと顔を上げたオルガマリーに、その兵士二人は肩に担いでいた荷物を下ろして、にこやかに笑いかける。

赤毛の、まだ成人して間もないような幼い顔立ちの青年が、照れくさそうにほおを掻きながら、荷物を指差してオルガマリーに話しかけた。
「簡易ですが野営用のテントをお持ちしました。これで雨風も防げます。急な遠征でしたから、あいにくこれくらいしか持ち出せなくて」
「えっ、そんな。私だけそのような待遇を受けるのは、その、申し訳ないというか……」
「いえいえ、お気になさらず。これは私たちの為でもあるのですから」
テントを遠慮するオルガマリーに、赤毛の青年の後ろに控えていた、精悍な顔にちょび髭を生やしたいかつい中年の男が冗談めかして言った。
「あなたたちの為？」
言葉の意味を理解しかねたオルガマリーが小首を傾げる。そんな彼女の様子を見て、赤毛の青年が顔を赤らめて空を仰いだ。それを見たちょび髭がバンと彼の肩を叩いて笑った。
「いやなに、貴方の美貌は我々の目の毒という事ですよ。何しろ野郎所帯ですから。貴方に無粋な視線が集まらないように、という元帥殿の計らいです」
お分かりいただけましたかな？
そう言ってちょび髭は茶目っ気たっぷりにウィンクした後、ガハハと豪快に笑った。
ようやく意図を理解したらしいオルガマリーが、ワタワタと意味もなく手をばたつか

せた後、顔を赤らめながらテント設営を了承した。
「さ、さっそく設営に取り掛かります！」
　赤毛の青年が同じく無駄にワタワタと手をばたつかせて、テントを張る準備にとりかかった。
「そんでもってお前さんにはとれたてのうさぎをやろう」
　テント設営に精を出す赤毛を横目で見ながら、ちょび髭が腰に下げていた大きな皮袋から、まだ息のあるうさぎを取り出し私の足元にしゃがみ込んだ。
　ちょび髭～～!!
　やったぁ肉だぁ!!図体のでかい狼形態は腹が減るから、この手土産はありがたい。でもなぁ、うさぎかー。
　オルガマリーの料理コマンドには「焼く」しかないから、また悲しい味のうさぎ肉を食べる羽目になっちまう。
　こんな事ならヴォークルールでなにか調味料を調達しておくんだったな。けど物資が貴重なあんな状況では、それも難しかったかなぁ。
「……なんでこんな哀しそうな目をするんだ？」
　ちょび髭が私の微妙そうな反応を見て、困った様に頭をかいた。
「ごめんなさい。トオル……いえその狼、調理した肉が食べたいみたいで……」

「それならお任せください！料理なら私の得意分野ですので！」
テントを組みげながら、赤毛が元気に返答する。
「そうそう！こいつ料理の腕だけはいいんですよ。となれば、もう数羽狩ってきますよ」
ちょび髭が立ち上がって、近くの森に駆け出した。もうしばらくすれば空も暗くなる。一人で森に入るのは危険だ。もちろん、彼もそれを承知の上で、狩りをする自信があるのだろうが。
（心配だから私も付いていく）
（ええ、お願い）
オルガマリーと念話でやりとりしてから、私はちょび髭の背中を追って駆け出した。

※

「見ろ、鹿の死骸だ。この見慣れない爪痕、竜に襲われたんだな」
ちょび髭の見つけた鹿の死骸を遠くから覗いてみる。確かに、首元を切り裂かれた跡がある。腹が食い荒らされて、そこだけゴッソリと肉が削がれていた。
「腐敗が進んでるから、近くに竜はいないと思うが……。お前さんの鼻でわからないか？」

私は鼻をスンスン鳴らして臭いを探ってみるが、近くにワイバーンの気配はなかった。

ちなみに、鹿の死骸にはワイバーンの臭いが染み付いてるから、他の獣達は寄り付かない。だから食い荒らされた鹿はこのまま腐るのを待つばかりだ。

鹿の死骸をなるべく避けて先に進む。ワイバーンの臭いが移ればそれだけ他の獣に気づかれやすくなって狩りが難しくなる。

暗くなりつつある森の中を、ちょび髭と並んで歩いていると、ちょび髭がポツリと呟いた。

「白銀、いや。オルガマリーさんには感謝してるんだ。もちろんお前にもな」

そう言ってちょび髭は私の頭を撫でた。

「昨日の避難民。あの中には俺の妻と息子がいたんだ。オルレアンが襲われたと聞いた時、俺はヴォークルールにいた。残してきた家族の事を思うと気が気じゃなかった」

ちょび髭がしゃがみ込んで、地面を注意深く観察する。鹿の足跡だ。私は鼻を押し当てて臭いの元を探る。

「けど、昨日ようやく再会できた。正直、生きて会えるとは思ってなかったよ。銀色の狼に跨った、キレイな銀髪のおねーちゃんに助けられたんだ！って息子が大はしゃぎでよ。……ほんと、ありがとうな」

いいってことよ。
今の私は喋れないから、彼に返事はできない。だから心の中でそう答えた。
臭いが強くなる。あの茂みの先に、鹿がいる。私の動きから近くに鹿がいる事を察したちょび髭が、ゆっくりと弓を構えた。
今夜は美味い飯が食えそうだ。

※

2日目、陽が落ちるまでもう幾ばくかという頃合い。ラ・シャリテまでもう5キロの地点で、遠征軍は異変に気が付いた。
陽が沈みかけて暗くなりつつある南の空が赤く輝いている。立ち上がる黒煙。夕暮れの光ではない。
急ぎ馬を走らせる。遠征軍の間近に迫ったラ・シャリテは、その全体を轟々と燃え盛る火の海に沈めていた。
様子を見るか、突入するか。ジル・ド・レェ元帥が決断を下した。
「半数はここで待機。残りは私とともにラ・シャリテに突入し現状把握、生き残った市民の救助を行う。馬はこの場に置いていけ。オルガマリー殿は――」

「私も行きます」
「――わかりました。では、行動開始！」

※

隊列を組み街の中を進む。
街の中は酷いもんだ。家は軒並み焼け、黒々とした煙があちらこちらから上がっている。この様子なら、襲撃されてまだ1時間も経っていないな。
だが妙だな。そこらで焼ける死体の数は数えきれない。だが血痕がほとんどない。流れた血が少なすぎる、ような。街の中心に行くにつれ周囲の瘴気が増して行く。神経を張り詰めていく。そろそろ街の中心部だ。
瞬間、体を射抜くような殺気を感じ取った。
その場から咄嗟に飛び退く。目の前の地面から杭が突き上げられる。
「うわぁぁぁぁぁ!!?」
「俺の、俺の足がぁぁぁぁ!!!」
半数以上の兵士が突如地面から飛び出した杭に刺し貫かれ、あるいは身体の一部をもぎ取られて足掻き苦しんでいる。内臓が腹が飛び出ている者もいる。だが、生きてい

る。一瞬で絶命していないのが更に酷い。
オルガマリーがヒュッと喉を震わせた。
無事だった兵士達は串刺しになった仲間の姿を見て錯乱し、街の入り口に向けて我先にと逃げ出した。
「こ、これは一体!?」
運良く難を逃れたジル元帥が剣を引き抜き周囲を見回す。その頭上に、闇に蠢く一つの影。
もうなりふり構っている場合じゃないか。
「させるか!!ロケットパンチ!!」
狼から人狼に『変化』し、ロケットパンチを放つ。冬木でランサーのハルペーによって切り落とされた右拳が、影に向かって殺人的な速度で射出される。
影がジル元帥を手にかける直前に、私の右拳が影を打ち払った。
だがソレは霧のように霧散する事で私の攻撃をいなした。月明かりに照らされた燃える家屋の上に霧が集まり、徐々に人の形を成して行く。
「――余の宴を妨げるとは」
霧が実体化する。
闇に溶け込む漆黒の貴族服。月明かりを受けて白く輝く頭髪。血に濡れた唇から覗

く鋭い犬歯。
　オルガマリーが尻餅をついて、血溜まりの中を後退る。
「吸血鬼……!?」
「ヴラド三世……!」
　闇の中でヴラド三世が吼えた。
「余を、その名で呼ぶなッ!」
　ヴラド三世から先程とは比べ物にならない程の強烈な殺気が放たれた。
　急いでジル元帥とオルガマリーを抱えて飛び退る。ヴラド三世の足元を伝って杭が地面を疾る。
　跳躍。屋根を伝いただひたすらに逃げるが、杭はどこまでも追ってきた。二人を抱えて、これ以上は逃げられない。
「オルガマリー、腰の剣を!」
　オルガマリーの腰から「触れれば粉砕」を抜き放ち、二人を地面に下ろした。
「これは、これはどういう事なのです!?」
　ジル元帥が私を指差して叫ぶ。
　私は元帥に顔を近づけ言った。
「オルガマリーを頼みます」

背後を振り返って、「触れれば粉砕」を正眼に構える。じとり、と嫌な汗が背中を流れた。

ヴラド三世が建物の陰から幽鬼のように現れる。

「さあ、串刺しの時間だよ」

第６節　鮮血の伝承

私の持つチート能力『其は有限なる小奇跡』によって幾重にも強化を重ねられた錆びた剣「触れれば粉砕」が、ヴラド三世の繰り出す杭と交錯し激しく火花を散らす。

振るった剣が杭と打ち合う度、杭がガラスのように砕けちる。

「余の杭をこうもたやすく砕くとは、見事。その赤錆びた見てくれは、仮初めの姿という訳か」

ヴラド三世はその気品漂う顔立ちを崩さず、私の持つ剣を称賛した。

（いや別にコレ、そこら辺で拾っただの錆びた剣なんですけど……！真の姿とかないんですけど……！）

内心そんな事を思ったが、とりあえずハッタリを効かせるためにニヤリと笑ってみせた。

その間も休む事なく突き出る杭が、私を刺し貫かんと迫る。

『其は有限なる小奇跡』によって鋭敏に強化された感覚が地面が盛り上がる瞬間を捉え、瞬時に伝達された電気信号が極限まで最適化された動きで四肢を駆動させる。

前、左、右、右、前。赤黒い穂先が顔を掠める。一筋の赤い線が顔に走る。次は左腕

に。そして脇腹に。

右足を引き、半身になる事で杭を避ける。その勢いを利用して右手に持つ「触れれば粉砕」を薙ぐようにして杭を砕く。

防戦は不利だ。剣一本では全てを捌き切れない。薄皮一枚のところで辛うじて躱している、死と隣り合わせの状況。額に一筋、汗が流れる。

（分が悪すぎる……！サーヴァントと、真っ向勝負なんて――）

冬木の地でアーチャーに殺された時、『其は有限なる小奇跡』は私を何度も蘇らせた。対価たる魔力が尽きてもだ。

しかし私の直感――本能と言う方が正しいかもしれない――が、アレは危険だと告げている。

死からの蘇生。莫大な魔力があればその真似事くらいは可能かもしれない。現にSNでは、ランサーのゲイボルグに突き刺され瀕死になった衛宮士郎は……。いや、ともかく、それは瀕死であって、死からの蘇生とは根本的に異なるものだ。

魔力がどれだけあろうとも、死からの蘇生などという奇跡がそうやすやすと行えるはずがない。死は、生き物であるがゆえに決して逃れられない宿命である。それを無かったことにする対価など、トールには想像もつかない。死から蘇るたび、自分のナニカが削れていくような、紙ヤスリを肌に押し付けたような、ざらりとした嫌な感触。

得体が知れない。考えれば考えるほど、恐ろしくなった私は、己に一つの制約を課した。

それは、死なないこと。対価不明なチート能力に頼って、死を厭わないように。

「だからさぁ！」

脇腹に差し込むように突き出された一本に足を掛け、前へと跳躍した。

――前へ、前へ。ただひたすらに跳ぶ。

自分が死なない為に、目の前の敵を先に討つ。

ここはフランス。ヴラド三世の領地であれば何処からでも突き出る杭であっても、ここでなら彼の踏みしめる地点を起点に伸びるだけに過ぎない。それはまさに杭の道。突き出された杭を足場に、ヴラド三世へ迫る。

「悪いが一撃で決めさせてもらう！」

「ぬぅ!?」

「――必殺！『トオル・ハンマー』（めっちゃ早い攻撃）！死に晒せよやぁーー!!」

キエー！

私は銀色の線となって杭の道を走った。電光石火の一撃。ヴラド三世の反応を置き去りにして、瞬時に距離を詰め、私は右腕を振り下ろした。錆びた刀身が閃き、ヴラド三世の頭に吸い込まれるようにして叩きつけられる。

冬木の地から徐々に研磨されてきた戦闘経験。ここに至るまでの濃密な時間がもたした得難い経験が、私の戦闘能力をひとつ上の段階まで引き上げていた。

並のサーヴァントを凌駕した人外の速度、宝具には及ばずとも霊核さえ捉えれば一撃で打倒しうる礼装。未熟な戦士なれど、その速度と一撃の破壊力が合わされば、瞬間的に英霊すらも凌駕する。

だがしかし、ヴラド三世はそれを防いで見せた。その手にした槍で「触れれば粉砕」をガッチリと受け止めた。

「まだまだぁ！」

前へ！

顎を目一杯開き、ヴラド三世の首筋に噛み付いた。

「ウゥゥゥゥゥゥゥ!!ふひゃびゃれぇぇぇぇぇ!!」

喉元を噛みちぎる。鉄の味が口の中いっぱいに広がる。

完全な致命傷だ。勝った、と確信した。

「――まるで雷電の如き踏み込み。素晴らしい動きだ、銀に輝く狼よ」

「あれで生きてるって、マジか……！」

喉元を裂かれた筈のヴラド三世は、平然とそこに立ち続けていた。血を滴らせていた首が見る間に再生していく。

動揺から、行き場を失い揺れるだけの剣先を素手で掴み、グイと私を引き寄せたヴラド三世が囁くように告げる。
「皮肉なものだ。忌み嫌うべきこの身体が、我が命を救うのだからな」
「やば――」
「この距離ならば、如何に素早かろうと避けられまい？血に濡れた我が人生をここに捧げようぞ。『血塗れ王鬼（カズィクル・ベイ）』！」
ヴラド三世の体内から、骨と血と狂気とで編まれた無数の杭がトールの肉体を満遍なく貫いた。
身体を巡る血管がブチブチと引き千切られて、猛り狂った心臓が壊れたカーステレオのように、行き場を失った血液を噴水のように撒き散らした。
「ガァァァァァァァァ!?!?!」
――命の炎が消えていく。
モウマヂムリ・・・。意識がだんだんと薄れていって、ある所で強制的に叩き起こされた。
止まったはずの心臓がドクン、と強く脈打つ。
「こ、このお！トールから離れなさい!!」
血と肉を撒き散らして破裂した私を間近で見たオルガマリーが、遠方から必死の形相

でヴラド三世に魔術による攻撃を加えている。ヴラド三世はそれを意に介さず、ただひたすら私を見据えていた。

「ほう……。貴様も余と同じだな」

目を細めて、口角を釣り上げて、ヴラド三世は静かに笑う。

「ギ・ギ・ギ……」

飛び散った血肉がみるまに再生していく。

飛び出した左の目玉が再びあるべき場所に帰還する。

焦点が定まった。目の前には吸血鬼。

恐怖心が心を支配する。痛いのも怖いのも、もうたくさんだ。

けど、それに負けじと雄叫びを上げた。

「ウオオオオオオおおおお!!」

私は不死身の人狼だぁーーー!!

残機もうヤベェけどなぁーーー!!

「化け物よ!・怪物たる余を殺してみせろ!」

「望み通りにしてやるさ!・カァッッッ!!」

至近距離からの『魔力放出（音）』!

この距離なら杭のバリアは張れないな!!

放出された音の暴力が、ヴラド三世ごと背後の街並みを根こそぎ吹き飛ばした。
やったか!?
「トオル!!」
「いけませんオルガマリー殿!」
ジル・ド・レェ元帥の制止を振り切って、オルガマリーがこちら駆け寄ってくる。
血だるまになった私の姿を見て、気が動転している。
「ダメだ!こっちにくるな!!」
「でも、でも!」
「戦いの最中に余所見とは感心せぬぞ、化け物!」
「チィ!?」
ヴラド三世の振るった槍を横っ跳びに躱す。
――ッ!誘導された!
気が付いた時にはもう遅かった。私の避けた先に何本もの杭が待ち受けている。
杭が脇腹に深く突き刺さる。意識が飛びそうな激痛が走り、私はあまりの痛みに耐えられず、思わず手に持つ「触れれば粉砕」を取り落としてしまった。ガラン、という音を立てて剣が土埃の立つ地面に横たわる。
「ぐ……ガフッ……」

杭によって身動きの取れない私に、ヴラド三世が歩み寄る。
「――あまりに貧弱だぞ。化け物」
私は脇腹に突き刺さった杭を抜こうともがきながら、ヴラド三世を精一杯睨みつけた。
「触れれば粉砕」に、手が届かない。身動きもできない。
「くそっ……ドリンチちゃんさえあれば、まだ……」
長大な槍を私の首元に突きつけ、ヴラド三世が告げる。
「……ドリンチちゃん？己の剣の未熟さから負けたと？違うな。武器など関係あるまいよ。貴様には、決定的に欠けているものがある」
その言葉に、どきりとした。
思わず、杭を掴んだ手の動きが止まる。
「……黙れ」
「貴様には、戦う理由が欠けている！己の命を対価にする理由だ！戦う理由なき力の、なんと空虚なことよ！」
ずっと考えないようにしてきた。
この世に、冬木に生まれ落ちてから、ずっと。
答えは見つけた様な気がしていた。

だが同時に、常に考えていたことがある。
――それは本当に、私の命を懸ける価値があるのかと。
「しゃべるなぁぁぁぁぁぁ!!」
理性が爆発した。
オルガマリーの前で、その言葉を、言うな!!
「所詮は獣か」
ヴラド三世が槍を振り上げた。
私は死ぬ。身体の修復で魔力も尽きた。『其は有限なる小奇跡』は私を蘇らせるだろうか……？痛いのは嫌だ……。死にたくない。ちくしょお……!!
「あぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
ずぶり、とヴラド三世の胸に剣が突き立てられる。
「……その勇気に免じ、血を啜ろう。これは報酬である」
「ッ！やめろォーーー!!」
ヴラド三世は億劫そうに、剣を突き立てたオルガマリーを引き剥がし、その首筋に犬歯を突き立てた。
「う、あ……。トォ、ル……」
オルガマリーの目から、徐々に光が失われていく。ヴラド三世が唇から血を滴らせ、

彼女の首筋から犬歯を引き抜いた。ドサリと、オルガマリーが力を失って地面に倒れこむ。

「若き女の血とは、こういうものか。カーミラの趣味を、悪くは言えぬな?」

「ッッッ!!!」

杭を掴み、力任せにへし折った。

全身の筋肉が唸りを上げて、目の前の怪物を殺すために動き出す。

姿勢を低く、一息に肉薄する。ヴラド三世の胸に刺さったままの「触れれば粉砕」を引き抜き、何度も何度も胸に突き刺した。それからがむしゃらに剣を振り回し、ヴラド三世を切り刻む。

「オオオオオッ!!」

至近距離から、『魔力放出（音）』を絞って心臓をピンポイントで狙撃する。

「死ね!死ね!死ね!死ね!死ね!」

何度も何度も。頭蓋も、心臓も、何度も潰した。なのに。

「なんで、死なない……」

ヴラド三世は依然としてそこに立っていた。

まるでそよ風に吹かれたかのように、彼の身体には傷一つなかった。

これが吸血鬼。ブラム・ストーカーによって編まれたフィクションが、人々の信仰を

得てこの世に産み落とされた怪物の力。
「癇癪は終わったか？」
「う、うわぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「化け物らしく散るが良い！『血塗れ――ヌゥ!?」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
白銀の鎧が颯爽と駆ける。
巧みな剣術。圧倒的膂力を持つヴラド三世の槍をいなし、その剣を足に深く突き立てた。
地面に縫い付けられたヴラド三世が一瞬だが動きを止めた。
「今です！逃げなさ――」
こちらを振り返ったジル・ド・レェ元帥が、ヴラド三世の槍に貫かれた。あああ……。
逃げないと……！だが、もう身体が動かなかった。もう、抗う力も、気力も、何もかも残っていない。
目を閉じて横たわるオルガマリーに手を伸ばす。
約束したんだ。必ず護ると……。なのに、こんなところで。
絶望に呑まれかけたその時。天から力強い少女の声が響き、ヴラド三世めがけ飛び出していく影を見た。

「今です！突撃!!」
「先輩！ジャンヌさんに続きます！やあああ！」
「まあ！この子首に傷があるわ！それにこっちの方は血まみれよ！早く手当てしてあげないと」
「マリー、君は手当てなんかできないだろう？ちょっと待って何してるんだい？わあ、自分の服を破くなんて！しかもスカートの裾を!?」
「トールさん！無事ですか!?よかった！」
「藤丸くん……？それにマシュちゃんに、あれは」
オルガマリーの首に包帯がわりの服を巻き付けている少女はマリー・アントワネット。
その様子を観察しているヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト。
そしてヴラド三世を膂力で圧倒し、果敢に旗を振るっているあの少女は――
「――ジャンヌ。ジャンヌ・ダルク!?」

第７節　竜の魔女現る

鉄と鉄のぶつかり合う音が、燃え盛る街の中で響き渡る。旗と大盾が槍とが激しく打ち合って火花を散らし、闇を照らす。

彼らの激闘を尻目に、私は意識を失って倒れているオルガマリーに縋り付きいて『其は有限なる小奇跡』を起動させる。

『其は有限なる小奇跡』の能力は、対象が持つ概念を「強化」するというものだ。冬木では私の五感、筋力、コンクリートの「頑丈」、このオルレアンでは剣の「叩きつける」という概念を強化した。強化ができるなら、その逆も可能なはずだ。他者に使うのは初めてだが、こればっかりは祈るしかない。

オルガマリーの中に芽生えつつある「吸血鬼の眷属」という概念に干渉し、抑え込む。

保有魔力はヴラド三世との戦闘でとうに尽きていたが、『魔力逆流』によってごく僅かに回復を続けているもの全て注ぎ込む。回復してはその分をすぐさま能力に回し、またそれを繰り返す。

「頼む……。『其は有限なる小奇跡』……！オルガマリーを、助けてくれ……！」

オルガマリーの肉体が淡く発光する。

成功したか？くそ、見た目からじゃ判別できない。
「わお。すごい魔術だね。いや、魔術ではないのかな？それにカルデアのスクロールはすごいねぇ。あっちの瀕死だった血だるま男も見事に回復させちゃうんだから」
こんな時でもアマデウスは飄々としている。よくもまあこんな状況で……。けれど彼のおかげで、私も気持ちが落ち着いてきた。今は取り出している場合じゃない。オルガマリーのためにも、私がしっかりしていないと。いつもの調子を取り戻せ。ロジカルに考えるんだ。
ヴラド三世とジャンヌ、マシュちゃんの戦闘はまだ続いている。見たところ、あの二人が防戦一方の様だ。サーヴァント二人掛かりなのにそれを圧倒するって吸血鬼ヤバすぎるでしょ……！
オルガマリーは吸血され、ジル元帥はスクロールの回復術式で死を免れたとは言え、大きな傷を負った。これ以上ここに留まるのは危険だ。
一度ヴォークルールに撤退して態勢を立て直さないと。
「アマデウス！上から！」
突然マリー・アントワネットが空を指差して叫び、アマデウスが咄嗟に背後に飛んで上からの奇襲を躱した。
空からの敵だって!?くそ！闇に紛れてまったく気が付かなかった……！

「おおっと!?危ない危ない。とても強く(フォルテッシモ)!」
アマデウスの放った魔力弾が空からの敵に直撃する。ソレは断末魔の声を上げて、勢いよく地面に叩きつけられる。
「ワイバーンかい？いつの間に近づいて……。どうしたんだい、マリア？」
「皆さん、あちらの空をご覧になって」
マリー・アントワネットの示す先、空を見上げた。北の空、闇の中でいくつもの影が蠢いている。無数の小さな影の中に、一際大きな影。力強く風を叩く巨大な翼。牙の隙間からチロチロと覗いている赤い炎。闇に溶け込むような漆黒の巨躯。
おいおいアレって……。
「ファヴニール……。竜の魔女だ……!」
思わず口走る。いやだって間違いないもの。一目見たらわかるこのヤバさ。
ていうか実物デカすぎない？リオレウスの倍はある。やったねジークフリートちゃん！最大金冠確定だよ！……いや、ふざけている場合じゃない。これはマジでやばたにえん……。正真正銘の絶体絶命ってやつだ。
「逃げましょう」
藤丸くんが即断する。
いい判断だ。流石は将来人理を救っちゃう系マスター。陸軍としてもその意見に賛

成である。
私は謎のナマモノばりにうんうんうんと頷いてみせた。あいったー！いま首グキっていった！
「よしきたそれがいい僕も大賛成だ。けどどうやって？走って逃げるとかやめるてくれよ？僕は走るの得意じゃないんだ」
「私はガラスの馬があるけれど、みんなは乗せられないわ……」
マリーさんのシュンとした顔かわいい！
ん？いや待てよ。マリーさんの宝具はガラスの馬を出せる。それで私は対象を強化できるチートを持っている。だったら私のチートでマリーさんの宝具強化してガラスの馬沢山出せばいいんじゃないかな!?かな!?
ヤダ！トールったらあったまいいー☆
「みんな聞いてくれ」
「まあ、まあまあまあ！アマデウス、狼さんが喋ったわ！さっきのは聞き間違いじゃなかったのね！なんてかわいいのかしら！」
「え、正気かいマリア。これ、ただの血塗れ埃まみれのボロ雑巾だよ。喋るボロ雑巾のどこがかわいへぶぁ!?」
私はアマデウスの口を左手で押さえながら、右手の人差し指をピンと立てて言った。

「私にいい考えがある」
……なんだ藤丸くんその胡散臭そうなモノを見る目は！

※

「だんだん強く（クレッシェンド）！」
「ハァン！」
「だんだん弱く（デクレッシェンド）！」
「ホァン……」
「とても強く（フォルテッシモ）！」
「アハァン！」

アマデウスの魔力弾がビシバシと私の身体を打つ。『魔力逆流』の全力展開と、手加減された魔力弾相手だからこそできる強引な魔力充填だ。
『魔力逆流』が私の身体に直撃する寸前に魔力弾をただの魔力に分解し吸収するが、空気の振動による衝撃までは防げない。それがわりかし痛いもんだから、つい声が出ててしまう。
「ハァン！」

「悪夢だ……僕は悪夢を見ているんだ……」
「うふふ。新しいピアノが出来て良かったわねアマデウス」
「こんな汚いピアノがあってたまるか！とても強く（フォルテッシモ）!!」
「アハァン!!」
「あああ……ワイバーンに囲まれていく……。ジャンヌさんとマシュもまだ戦っているのに、俺はトールさんの喘ぎ声を聞くことしかできないなんて……！」
「ホァン……」
　ワイバーンの大群が私たちを包囲するように空を旋回する。まるで翼竜のドームだ。見回す限りワイバーン。ワイバーンどもが、けたたましく鳴き声を上げる。もう完全に逃げ場がない。身の竦むような思いだ。私の予想通りに計画が進まなければ、ここで全員死ぬのだから。頼むぞ……！
　そしてワイバーンの旋回する空間のある一点が開き、ついにファヴニールが地に舞い降りた。ズン、という音を立てて、その巨躯が降り立った部分が沈み込む。
「うっ、くぅ……!?」
「くぁ……!?」
　ファヴニールが降り立つと同時に、ジャンヌとマシュちゃんがこちらに吹き飛ばされてきた。

「マシュ、大丈夫!?」
「ジャンヌ!大変、ボロボロだわ!」
藤丸くんとマリーさんが二人に駆け寄る。
そして二人を吹き飛ばした張本人、ヴラド三世がファヴニールの隣に歩み寄ってくる。
相変わらず傷ひとつない。マジモンの化け物だよ、ヴラド三世……。
そして空を舞っていたワイバーンから次々とサーヴァントが降り立ってくる。
バーサク・ライダー、鉄の聖女マルタ。
その服で聖女は無理でしょ。はっきり言って痴女服だ。
バーサク・アサシン、血の伯爵夫人カーミラ。
触ったら痛そうなデザインＮｏ．　１。はっきり言って痴女服だ。
バーサク・セイバー、シュバリエ・デオン。
フランスの可憐なる英雄。羽帽子を被った可憐な男装の剣士。立ち振舞は凛として洗練され、それだけて見る者を魅了する。サラリと風に靡く金髪と、桃色の唇から目が離せない。任務に対しては苛烈なまでに真摯であり、時に冷酷な行動を選択せねばならない場面であっても躊躇わない仕事人気質なところが魅力的だ。しかし平時では穏やかな性格であり、午後のお茶の時間を楽しみにしながら家事に勤しむ顔など見た日には

私は尊みで死ぬ。中性的な容貌をしており、プロフィールでも性別は不明だがむしろそれがいい。最終再臨絵の尊さで性癖が歪む。

３人がヴラド三世と同じくファヴニールの横に並び立つ。

そうして最後に、ファヴニールの背から黒衣の女が地に降り立った。ジャンヌ・ダルクと瓜二つの容姿。だと言うのにその顔は憎悪と嘲りで歪み、本物のジャンヌとは似ても似つかぬ雰囲気を纏っている。その女の通り名は竜の魔女。そして名をジャンヌ・ダルク・オルタと言う。

ジャンヌ・ダルク・オルタが身構える私たちをゆっくりと睥睨した後、唇と目元を震わせて、憎悪剥き出しの顰めっ面をした。

「とても強く(フォルテッシモ)！」

「アハァン！」

「……ねえ。お願い、だれか私の頭に水をかけてちょうだい。まずいの。やばいの。本気でおかしくなりそうなの」

ジャンヌ・ダルク・オルタが吐き捨てるように叫ぶ。

ヤツが長々と喋っているうちに、早く魔力を充填しなければ……！

もっとだ……もっとよこせアマデウス!!

「ハァン!!」

「なんっなのッ！コレッッッ!!」

第8節　ダンス・ウィズ・クイーン

「ファヴニール、天高く咆哮なさい！このふざけた連中を一切合切焼き払え！」
ジャンヌ・オルタの怒号が飛び、ファヴニールのバックリと開かれた口の奥が煌々と輝いた。
「オオオオオオオオオオオオオオ!!」
頭を後ろに引いた溜めの姿勢から、堰を切ったように灼熱のブレスが吐き出される。
火球と表現するには大規模すぎる炎の塊が視界いっぱいに迫る。
「れ、令呪をもって命ずる！マシュ！宝具でみんなを守って!!」
藤丸くんが咄嗟に指示を飛ばす。
この土壇場で、彼は最高の答えを導き出した。
彼の右手の甲にある三画の令呪のうち一つが真っ赤に輝く。その輝きに呼応して、マシュちゃんが裂帛の気合いとともに宝具を展開する。
「あの時の感覚を……！行きます！仮装宝具、擬似展開！」
藤丸くんとマシュちゃんが思いっきり息を吸い込んで、宝具の名を叫ぶ。
「『ロオ(人)オオオオオド！カ(理)ルデ(の)アス(礎)!!』」

前面に構えられた巨大な盾が青く輝く。
淡い光を放つ力場が私たちを優しく包み込み、ファヴニールのブレスを真正面から受け止めた。
「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
直撃と同時に、雷鳴のような爆音が街を覆い尽くした。キィィィィィン……という爆撃直後の耳鳴りのような、不快な音が頭の中でしっちゃかめっちゃかに暴れ回って、脳を揺すぶる。
ロード・カルデアスは見事にファヴニールの一撃を受け止めた。ブレスとロード・カルデアスの力場の衝突によって巻き上げられた煙がゆっくりと晴れていく。
半円状に展開していた力場の外側は、熱波によってドロドロに焼け爛れていた。内包していた魔力の残滓が濃密に周囲に立ち込め、石畳の残骸が赤熱し、白い煙を吐き出している様から、あのブレスがどれほどの破壊力と熱量を持っていたかが伺えた。
「あんなの直撃したらひとたまりもないな！そろそろお暇したいところなんだけどね！まだかかるのかい!?とても強く(フォルテッシモ)！」
「ちょ、アイッタ!?……心配するな、今終わる!!かっ喰らえ!!『魔力逆流』!!」
ククク、計画通り。キタキタキタキター!!!この瞬間を待っていたんだー!!!アマデウスとの連携プレーが上手く行ったね！

ジャンヌ・オルタを煽りファヴニールのブレスを誘発。辺りに漂うブレスの残滓をバキューム！ペロッ！これがファヴニールの味……。

どれだけ濃縮された魔力が込められていたのだろう。あっという間に身体に魔力が満ちていく。ドクン、と心臓が強く跳ねた。強烈な立ち眩みに襲われる。や、やばい。ファヴニールの魔力による負荷が強すぎる。

「無様ね。ファヴニールはただ吼えただけなのに、宝具まで使ってしまうなんて」

ジャンヌ・オルタが口の端を歪に吊り上げて暗く笑った。

「ファヴニールに頼るまでもありませんでしたか。さあ行きなさい、私の卑しい猟犬たち。あの哀れな聖女は生かしたまま捕らえなさい。他の者達は――」

「――殺しなさい」

ジャンヌ・オルタの号令で一斉に敵サーヴァント達が動きだす。いや、ヴラド三世だけは、ジャンヌ・オルタの横で静観を決め込んだままだ。

向かってくるのはマルタ、デオン、カーミラの三騎。

こっちの準備はまだ終わってない。『其は有限なる小奇跡』がマリーさんの宝具に干渉できるかすらわからない大博打。

なんとか時間稼ぎをしてもらわないと。

「アマデウス！藤丸くん！あとは打ち合わせ通りに！」

「え”!?打ち合わせ通りにってなんですか!?」
初耳なんですけど!?とでも言いたげな焦った顔で、藤丸くんが私を見た。ヒュバッ！という擬音が聞こえてきそうな素早い動きだ。ごめんね、藤丸くん。
それでも自分がすべき事だけは即座に理解したのだろう。あっという間に気持ちを切り替えた彼は、さっそく指示を出し始めた。
「マシュとジャンヌさんは前衛お願い！トールさんの準備が終わるまで、とにかく時間を稼いで！」
「……了解です！自信はありませんが、なんとかしてみせます！」
「竜の魔女に使役されているサーヴァント達は、どうやら狂化を施されているようです。私とマシュさんだけではあの三騎を抑えられません。藤丸くん、何か策はありませんか？」
ジャンヌがマルタの杖による打撃を手に持つ旗で捌きながら、藤丸くんに援護を求める。
どうやら聖女マルタは、なんらかの理由で本来の攻撃方法を使えないようだ。彼女の本来の攻撃方法は「祈り」による魔術攻撃。祈りに精神的な要素が絡むというのなら、狂化された今の彼女の精神では扱えないのかもしれない。何にせよこちらにとっては好都合だが。

「えぇと！確かアマデウスの宝具って敵の妨害ができるんだったよね!?」
「そうだよ？自分で言うのもなんだけど、僕の宝具は結構強――」
「お願い！今すぐ!!」
間髪入れずに藤丸くんが即答する。
「――だよね！では聴くがいい、魔の響きを！『死神のための葬送曲（レクイエム・フォー・デス）』！」
アマデウスの宝具発動と同時に、ぼんやりと乳白色に発光する、燕尾服を纏った首のない天使のような者達が、楽器を携え彼の周囲に現れて演奏を始めた。
そうして、彼はこの戦場の支配者となった。彼の操る音のみが、この世界を支配している。
敵サーヴァント達の動きが明らかに鈍っていくのがわかる。
圧倒的に不利な形勢だったジャンヌとマシュちゃんだったが、遂に互角の戦いを繰り広げ始めた。
「よし！みんなが繋げてくれたこの時間、決して無駄にはしない！マリーさん！私と力を合わせてください！」
「はぁい、よろしくてよ！」
マリーさんがニッコリと満面の笑顔で、元気いっぱいに返事をしてくれた。
はわわ、恋に落ちちゃいそう……。すっごい天使。ヤダ、わたしフランス市民になっ

ちゃう。
「それで、具体的にはどうすればいいのかしら？」
「――え？」
「あら？」
マリーさんが可愛らしくコテン、と小首を傾げた。
マリーさんかわいいヤッター！フランス万歳（ヴィヴ・ラ・フランス）！
私の脳内で、百万人の私がマリー・アントワネット全国ライブツアーの会場で拍手喝采・万歳三唱を繰り返している。バンザーイ！バンザーイ！
「……どうしたらいいんでしょうね？」
私も可愛らしくコテン、と小首を傾げてみる。
その時、私の後頭部に重い衝撃が走る！
ン〝ア〟ァァァ!?
「何が、私にいい考えがある、だ！まるでノープランとは恐れ入ったよ！」
アマデウスがタクトを振りながら、次々と連続して私に魔術弾を放つ。器用な奴め。
「そうだわ！狼さん、手を出してくださる？」
「何か思いついたんですか？」
私は差し出されたマリーさんの手にポンと自分の手を重ねた。

「せっかくアマデウスの演奏があるのだもの！踊りましょう、歌いましょうよ！うふふ、私達の息を合わせるのにピッタリではなくて？」
「え、いや、それは、でも」
「どんなダンスがお得意かしら？そーれ♪」
ぎゃあ！マリーさんが私を上手く誘導して強制ダンスが始まった。
「……ク、アッハッハッハッハ！だ、ダメ……面白すぎ……。見て、ジル！アイツら急に踊り出したわよ!?ヒクッ、ウッ、ゴホッ！お、お腹痛い……。あ、ジルはここにいないんだった」
ジャンヌ・オルタが私達を指差して、腹を押さえながら蹲っている。そこまで笑う!?くっそー！たしかにいきなりダンスが始まったのには驚いたけど、きっと深い意図があるに違いないんだ。
「うふふ！」
わぁいマリーさんかわいいー。
まったくダンスの経験のない私をマリーさんが巧みにエスコートする。
繋いだ手から伝わる、彼女の柔らかい手のひらの感触。僅かに熱を帯びた肩。私の顔を撫でる彼女の甘い吐息。
周囲の喧騒が遠ざかっていく。激しい剣戟の音も、アマデウスの奏でる演奏すらも置

き去りにして。この世界にいるのは、私と彼女だけのように感じられる。
その瞬間、私の背筋をビビッと電流が駆け抜けた。『其は有限なる小奇跡』が独りでに起動する。
「狼さん、私の詠唱に合わせてね？さんざめく花のように、陽のように！」
私との間に「パス」が繋がった事をマリーさんも理解したのだろう。桃色の唇をキュッと引き締めて、宝具の解放を始めた。
ちょっと恥ずかしいけど、そんな事言ってる場合じゃないか！よぉーしキメるぜ！マリーさんとの合体宝具!!
もっとだ！もっと！キラキラキラキラ！もっと輝けぇぇぇぇぇぇ!!
「「咲き誇るのよ、踊り続けるの！いきますわよ――『百合の王冠に栄光あれ』!!」

第9節　悪意は親愛の中に

マリーの周囲にガラスの破片が寄り集まっていく。それはうねる様にして空間に現れて、煌びやかな、細かい粒子の輝きを美しく辺りに放った。

そして、それらはあっという間に一つに合体して、トロイの木馬に迫る程巨大な、四足の獣が顕現した。

透き通るような、否、真実透き通った身体を有し、テラテラと燃え盛る炎の色を反射して、その獣は夜の廃墟に立ち上がった。

「あれ、なんか思ってたのと違うんだけど……？」

そこに現れたのは、額にフランス王家の紋章――百合の花――が入ったガラスの馬だった。

ソレはガラスの瞳で、翼を広げ威嚇を始めたファヴニールを睨みつけた。

『――我は百合の花の守護者。王家の敵を、打ち滅ぼすものなり』

ガラスの白馬はそう言って、前脚を空高く掲げいなないた。彼の勇ましい鳴き声が地面を揺さぶった。

「まあ！これって素敵だわ！」

「ははは！すごいねマリア、これは傑作だ！」
「えええ!?な、何事ですか!?」
「せ、先輩！これがあのマリー・アントワネットの宝具なんですか!?」
「か、かっこいい……！」
「せんぱーいっ!?」
「キェァァァァァァシャベッタァァァァァァァァ!!!!??」
それぞれが様々なリアクションを取る中、ガラスの白馬はファヴニールめがけて大きく跳躍した。後脚に力強く踏み抜かれた大地は、手榴弾が爆発でもしたかの様に、勢いよく土を巻き上げられ大きな穴を覗かせた。
マルタ、カーミラ、デオンの三騎が大きく後ろに後退する。サーヴァントがどれほど頑丈であろうと、神秘の塊であるあの大質量巨大馬に踏まれれば一たまりもない。
白馬はファヴニールの前に、その巨体からは想像もつかないほどの身軽さで、ふわりと降り立ったかと思うと、即座に反転し先程見せた強力無比な後脚の力を使って、強烈な後ろ蹴りをファヴニールに放った。
「――――」
白馬の蹄が、抉るような角度でファヴニールの懐に叩き込まれた。ドフッ、という形容し難いような鈍い音がして、ファヴニールは口を苦しげに開いて、血の塊を足元に吐

き出した。
「ちょ、待っ、なんなのよこれぇぇぇぇぇ!!!」
吐き出された血の塊が、ドポン、とジャンヌ・オルタに降り注ぐ。
そして、ガラスの白馬はマリーの元に駆け戻り、その巨躯を精一杯低くして自らの主人に語りかけた。
『お早く』
「みんな乗るんだ!ジャンヌさんは動けないジル元帥を頼みます!藤丸くんはマシュちゃんに抱えてもらって跳ぶんだ!」
トールは地面に寝かせておいたオルガマリーの元に駆け寄って、気を失ったままの彼女を軽々しく肩に担いだ。
「……」
トールは、オルガマリーの鼓動を肩で感じながら、未だ閉じられたままの彼女の瞼を不安げに見つめた。彼女の首筋には、ヴラド三世に吸血された傷が生々しく残っている。
「大丈夫だ、きっと」
トールは一瞬で迷いを振り切って、既に走り出しているガラスの白馬に追いすがった。

「トールさん、早く！」
落ちないようにマシュに支えられながら、藤丸が眼下を並走するトールに向かって叫んだ。
トールは、オルガマリーの首に負担が掛からないように、彼女を肩から胸に抱えなおして、大きく跳躍してガラスの白馬に飛び乗った。
「街の外には待機してた兵士たちが居るはずだ。彼らも回収しないと」
トールは白馬の首筋に腰掛けて居るマリーに話しかけた。
白馬はあっという間に街から距離を取りつつあった。暗くて不明瞭だが、兵士たちと別れた場所も、すぐ目の前のはずだ。
「……いや、それは諦めた方がいいね」
マリーの代わりに、アマデウスがある一点を指差しながら、トールの言葉に応えた。
彼が指差す先に、紅黒い炎に焼かれている、馬や兵士達らしき死体が転がっていた。
生きている者がいないのは一目瞭然だった。誰も彼もが、身体を真っ黒に炭化させて、空の星に向かって手を伸ばしている。
ここから見る事はできないが、きっと彼らは、生きたまま焼かれる苦しみに歪んだ顔をうかべているに違いなかった。その中にはきっと、ここに来るまでに良くしてくれた、料理が得意なのだと笑っていた赤毛の青年と、家族を想う気のいいちょび髭も含ま

れているにちがいなかった。
「――竜の魔女、ヴラド三世。この借りは、必ず返すぞ」
トールはオルガマリーを強く抱き締めて、遠ざかっていく燃える街を睨み付けた。その瞳の奥に、黒い炎がチロリと宿ったが、それに気づいた者は誰もいなかった。

※

ジュワッ、という音を立てて、身体中にこびり付いたファヴニールの血を、全身に纏った紅黒い炎によって蒸発させながら、ジャンヌ・オルタは心底機嫌が悪い、という顔でガラスの白馬が逃げて行った先を睨みつけた。
「今の私がどれほど貴方達を惨めに思っているかわかりますか?」
ジャンヌ・オルタは、その怒りの矛先を彼女の猟犬である、自らのサーヴァント四騎に向けた。睨みつければ殺せるのだ、と言わんばかりの眼力で彼らを睥睨するその立ち姿は、触れれば今にも爆発してしまいそうな恐ろしさを見る者に与えるだろう。
しかし、当の睨まれた四人は平然とその視線を受け止めた。
「そうは言うけれど、そもそも貴女があの聖女を生け捕りにしろなどと命じたのが問題なのよ」

ジャンヌ・オルタを値踏みするように仮面の奥の目を細めながら、バーサーク・アサシン――カーミラが言った。
「それは私も同感だな。なぜ生け捕りなどと手間のかかる事をするんだい？オルレアンの住民を、未だ生かし続けている事と関係があるのかな？」
この燃える廃墟の中ですら、清涼な空気を感じさせる仕草で、バーサーク・セイバー――シュバリエ・デオンが問いかけた。
バーサーク・ライダー――鉄の聖女マルタも、その話題には興味がある、といった顔でジャンヌ・オルタを見た。
「叱責に質問で返すとは、貴方達には呆れと失望を禁じ得ません。――まあ、いいでしょう。オルレアンの住民を生かしている理由はひとつ。彼の地に住まう愚か者たちに、聖女の死を見せ付けるためですよ」
「悪趣味だこと」
マルタが小さくため息をついた。
シュバリエ・デオンは合点がいった、という風に頷いた。
「なるほど。ジャンヌ・ダルクが聖女としてフランスを救った、その始まりの地であるオルレアンでは、彼女はまさに希望の象徴。その希望を目の前で摘み取る事で、彼らを精神的に痛めつけようという訳か」

「で？それに何の意味があるというのかしら。確かに苦悶に歪む者たちの顔を見るのは素晴らしいけれど。そこまで回りくどい方法をとる必要があって？」

カーミラが言った。

「当然。この国は過ちを犯しました。主の御意志と、一度は祭り上げた聖女をこの国は裏切った。故に、主は彼らに愛想を尽かしたのです。だから滅ぼします。主の嘆きを私が代行します。けれど――」

ジャンヌ・オルタは暗く沈んだ眼で、遠くオルレアンの方を見た。

「――彼らが死の間際に、希望を残す事は許しません。だから見せ付けるのです。かつて彼らが希望を見出し、そして見捨てた哀れな小娘を、彼らの目の前で殺すのです」

「まあ、好きにするといいわ。その歪みと憎しみ、貴女自身のものであるといいわね」

カーミラが興味が尽きた、という顔で言った。

ジャンヌ・オルタは、その言葉の意味に一瞬悩んだが、すぐに考える事をやめた。特に意味のない皮肉だと、切って捨てた。

「それで、話を戻しますが」

ジャンヌ・オルタは、今一度四騎を見回して言った。

「先程は、聖女を捕らえる絶好の機会でした。ファヴニールもしばらくは動けませんし、ここはバーサーク・ライダーにでも追撃に出てもらいましょうか――」

「――それには及ばん」
　これまで沈黙を貫いていたバーサーク・ランサー――ヴラド三世が、ジャンヌ・オルタの言葉を遮った。
「既に種は蒔いた。後は芽吹くのを待てばよかろう」
「――――ハ。アハハハハ！そういう事でしたか。戦いに参加しないとは何事かと思えば。よくもまあ、そんな非道な手を思い付くものです。……さいっこうだわ！あの女の苦しむ顔が、今から楽しみね！」

※

　ガラスの白馬はとんでもないスピードでヴォークルールまでの道を疾走していた。普通の馬で２日かかる距離を、わずか６時間で駆け抜けてしまった。
「先輩、街が見えました！」
　マシュが遠くを指差す。
　ヴォークルールだ。ようやく帰ってきた。とトールはひとりごちた。
　６時間も安定しない馬上で過ごすのも、そろそろ限界だったところである。きっと誰もが臀部の痛みに耐えかねている頃合いだろう。

サーヴァントも長旅でお尻が痛くなったりするのだろうか、とトールがどうでもいい事を考えていた時だった。
「う、うーん。……トオル？あ、あれ？私……？」
胸に抱えていたオルガマリーが、ようやく意識を取り戻した。
「だ、大丈夫か!?ちゃんと意識はあるか？血が吸いたいとか思ってない？」
「……？……はぁ!?なんで起き掛けにそんなふざけた事聞かれなきゃいけないのよ！っていうかアンタ、近いわよ!?離しなさい！毛がチクチクするでしょ！」
トールはホッとしたやら気が抜けたやらで、体中に張り詰めていた緊張が音を立てて抜けていくのを感じた。
「よかった、本当に、よかった……」
「な、なに泣いてるのよ……。調子が狂うったら、もう」
オルガマリーは顔を少し赤くしながら、いつもと様子の違うトオルを不思議げに眺めた。
それからようやく周囲を見る余裕を取り戻して、自分が馬鹿でかいガラスの馬の上にいる事に大いに混乱したのだった。

第１０節　赤い瞳のオルガマリー

――ヴォークルール。夜。街の外壁の上にて。

「お話とはなんでしょうか」

ジャンヌは素顔を隠すために目深に被っていたフードを払って、外壁の外の暗闇を静かに見つめているオルガマリーに話しかけた。

「随分待たせるじゃない。聖女サマ」

「……!?」

こちらを振り返ったオルガマリーの姿が、一瞬ブレた。

ジャンヌは咄嗟に身をかわした。視界の端で、ふり抜かれた拳が虚空を突き抜けて行く。崩れた体勢を整えて、数歩退がる。

眼前には赤い瞳を闇の中で光らせている女が、冷たい笑みをたたえて立っていた。

女が先程まで立っていた地面から、ガラガラと石の砕け落ちる音が遅れて聞こえてくる。

「貴女は何者ですか！」

ジャンヌは目立たぬ様に纏っていた町娘の格好から一転、魔力で編まれたいつもの鎧

姿をその身に纏って、手にした旗の切っ先を赤目の女に向け、ジリリと距離をとった。
ジャンヌの刺すような視線を受け止め、女は口の両端を大きく吊り上げた。
「――私はジャンヌ・ダルク。貴女自身よ、私は」

※

闇に沈む街の中で、煌々と松明と蝋燭の明かりが灯る建物があった。
その一室、６人程が寝っ転がってもまだ余裕のありそうな広さの部屋で、私たちは今後の方針について話し合っていた。
今ここにいるのは藤丸くん、マシュちゃん、私、そして通信を繋いだダ・ウィンチちゃんだけだ。
オルガマリーは外の様子を見てくると言って、出て行った。
マリーさんは宝具の長時間の使用が祟って、今はアマデウスと共に割り当てられた個室で休んでいる。どうやらやんごとなき身分の方であるというのは一目でわかってしまうらしく、兵士達が恭しく彼女を扱うのを見て、流石王妃はオーラが違うんだなぁとどうでもいい事を考えたのは内緒だ。
ゲオルギウス先生は恐らく街の周囲を２４時間警戒しているだろうから、きっと外壁

のどこかを見回っているだろう。
『やれやれ、自分の命に関わることだから、所長にも聞いておいて欲しかったんだけどね。信用しているから後は任せる、と言われてしまっては私としても文句は言えないよね』
　部屋の中央に投影された画面の向こうで、ダ・ウィンチちゃんが笑いながら肩を竦めた。
『しかし、やけに冷静だったのが気にかかるなぁ……。以前の彼女はもっとこう、余裕のない人間だと思っていたけどね』
　それはオルガマリーが成長したのかもしれないし、あるいは本来持っていた余裕を取り戻したのかもしれない。今の状況の方が、カルデアにいた時よりもマシなのだとしたら、それはとても悲しい事だと思う。だってそれは、頑張っている人が報われるような環境じゃなかったという事なのだから。
「それで、オルガマリーの肉体を取り戻す方法はあるのか？」
『そうだね。これはまだ仮説だが、まずコフィン内部を外部から見えないように密閉する。そこに水３５ℓ、炭素２０ｋｇ、アンモニア４ℓ、石灰１．５ｋｇ、リン８００ｇ、塩分２５０ｇ、硝石１００ｇ、硫黄８０ｇ、フッ素７．５ｇ、鉄５ｇ、ケイ素３ｇ、その他少量の１５の元素、……まあつまり大人１人分の人体の構成元素をぶち込んで、コ

フィン内部に彼女の魂をレイシフトさせる。そして最後にコフィンを開けて中を観測すれば、見事肉体が再構成されていた！って寸法さ』

細かい数値は所長の健康診断の時のデータもあるしね、と付け加え、画面の向こうでダ・ウィンチちゃんが得意げに胸を張った。

藤丸くんが「ハガレンだ……」と呟いている。こっちの日本にもハガレンあるんだね。ハガレンはいいぞ！

ダ・ウィンチちゃんの話を聞いて、マシュちゃんがおずおずと手を挙げた。

「シュレディンガーの猫、ですか？」

『おっ、鋭いねマシュ。シュレディンガー博士は、量子力学の確率解釈論を批判するために、「生きている猫」と「死んでいる猫」が同時に重なり合った摩訶不思議な現象を「あり得ない話」として例え話にした。まあつまり、観測しない限り結果は収束しない、というミクロ世界の法則をこれによって批判したわけさ』

『しかしいま、所長はまさに「生」と「死」が重なり合った特異な状況にある。これは我々マクロの世界では「ありえない事」だとされていたけれど、偶発的なレイシフトによる魂単独での存在の確立によって、実際に起こってしまった訳だ』

「だから、逆にシュレディンガーの猫が応用できるという事ですね！」

『だいせいかーい！我々カルデアは、まだ「所長の死」を観測していない。なら、まだど

ちらの存在としても確立されていない所長を「生きている」状態で観測できれば、彼女は肉体を取り戻す事ができるはずだ。魂は物体の記憶、存在証明だからね。肉体の構成元素に魂を合わせれば、再構築する事も可能、と我々は推測したというわけ。わかったかな？』

「流石はダ・ウィンチちゃんです！ね、先輩！トールさん！」

マシュちゃんが嬉しそうに藤丸くんと私に同意を求めた。私と藤丸くんはお互いの顔を見合わせてニッコリと笑った。

「すごーい！」

「すごーい！」

私と藤丸くんは２人ですごいを連発した。すごーい！

『さては全然理解してないな、君たち。まあ仕方ないか。けど、これだけは絶対に肝に銘じておいてくれたまえ』

ダ・ウィンチちゃんが念を押すように画面に顔を近づけた。

『聖杯だ。所長が生き残るためには聖杯が必要不可欠だ。冬木へのレイシフト、そしてトールくんによるオルレアンへのレイシフトの連続で、彼女の魂には相当のガタがきている筈だ。十全なバックアップなしでのレイシフトの多用は、存在を摩耗させる危険が大きい。まして、肉体というガワの無い、魂むき出しのレイシフトだったからね……』

「つまり、聖杯でオルガマリーの存在を補強しなければ、カルデアへはレイシフトできないって事か」

私の問いに、そういうこと、とダ・ウィンチちゃんは頷いた。

オルレアンの聖杯は、ジャンヌ・オルタが持っている。

持っているというよりは、ジャンヌ・オルタそのものが聖杯と言うべきか。聖杯を存在の核にする事でこの世界に存在を確立させたジャンヌ・オルタは、まさにいま私たちがやろうとしているオルガマリー救出案の先駆者といったところか。

しかし、これだけの案をすぐに思いつくんだから、カルデアというのはやはり天才や秀才達の集まりなのだと実感する。

『すまないね、藤丸くん、マシュ。本当は君たちだけにこんな重荷を背負わせたくはなかったんだけど』

ダ・ウィンチちゃんを押し退けて、Ｄｒ．ロマンが画面に入ってきた。

申し訳なさそうに頭を掻く姿からは想像し難いが、彼がカルデアにいなかったら、藤丸くん達の人理修復の旅も成り立たない、というのは私が現世でゲームをしていたからこそわかる事だ。

今も目元にクマができている。生き残った僅かな職員のカウンセリング、人理修復のための仕事に忙殺されて、休む暇もないのだろう。それでも彼はその疲れを微塵も感じ

させずに、藤丸くんとマシュちゃんを労っていた。

『あ、そうそう。君たちへ、せめてもの手助けにと思って、聖晶石を用意したんだよ。勿論トールくんの分もあるからね。今からその座標に転送するから、上手く役立てて欲しい』

マシュちゃんがデミ・サーヴァントに変身して、盾を床に横たえた。即座に盾が輝き始める。その光が収まると、そこには虹色の金平糖が数個と、ゴテゴテとした機械のようなものが横たわっていた。

「おぉぉぉ……」

私は聖晶石を取り上げて、蝋燭の光にかざしたり撫でてみたりして、マジマジと観察した。

大きさは金平糖より一回り大きいくらい。光にかざせば透き通ったような虹色の輝きを発っするのでとても綺麗だ。けどめっちゃチクチクする。ちょっとトゲの部分が鋭角すぎるんだよな……。

実は冬木で一度使ったことがあるんだけど、あの時はじっくり観察する暇なんて無かったからなー。

「これがあれば私もサーヴァントを召喚できるのかな？」

『うーんどうだろう？適切な召喚陣と、君にマスター適性があれば可能だとは思うけど

……。まあ、聖晶石は霊子の結晶だからね。大怪我をした時とかに服用すれば傷薬の代わりになると思うよ』

えぇ～、このトゲトゲを服用するの!?無理でしょ。っていうか霊子の結晶で回復するって、それもうほとんどサーヴァントじゃんね。人狼が幻想種である事と、やっぱり関係あるんだろうか。

まあよくわからんので、とりあえずＤｒ．ロマンの言うことを素直に信じることにする。

「で、こっちの機械はなんなんです?」

『よくぞ聞いてくれました!』

『うわぁ!?』

ダ・ウィンチちゃんがＤｒ．ロマンを勢いよく押し退けてドアップで登場した。近すぎて鼻と目しか映ってないよ!

『それは大型決戦礼装Ｇ型へのパワーアップパーツさ!そろそろＤ型が壊れる頃だろうと思ってね!こんなこともあろうかと思って用意しておいたのさ!勿論予備バッテリーもあるぞ!!』

「さすダヴィ!」

そういうことになった。

※

「竜の魔女……!?」

――そんな、馬鹿な。

ジャンヌは困惑した。

しかし、目の前に立っているのは確かにオルガマリーの筈なのに、その身に纏う雰囲気は完全に別物だ。

まさか、けれど、どうやって……？オルガマリーがヴラド三世の眷属にされた事と関係があるのか。だとしてもなぜ竜の魔女がオルガマリーを操れるのか。

ジャンヌの頭をさまざまな憶測が飛び交ったが、彼女はすぐに考えるのをやめた。

あちらに聖杯がある以上、細かい過程は考えるだけ無駄というものだ。彼らは聖杯を用い、強引にオルガマリーを操っているのに違いない。であれば、ジャンヌが取る行動は一つであった。

「今すぐ彼女を解放なさい……！」

「……自分の置かれた状況がわかってないようね」

鋭いジャンヌの言葉に、オルガマリー（竜の魔女）は呆れた仕草で笑った。

「アンタにはオルレアンに来てもらうわ。この女を死なせたくないなら、大人しくすることね」

「卑怯な……うっ!?」

オルガマリー（竜の魔女）が彼女自身の首に手をかけるのを見て、一瞬硬直してしまった。その隙を突いて、オルガマリー（竜の魔女）が人外のスピードでジャンヌに肉薄した。

首筋に強い衝撃を受け、ジャンヌは目の前が真っ暗になった。

第１１節　覚悟完了

「うう、また眠気が……」

藤丸くんが重い瞼をこすりながら、力なく椅子にへたり込んだ。

聞いたところによると、ラ・シャリテで私たちと合流するまでの彼らの足跡も、私とオルガマリーと似たようなものだった。

第２特異点であるオルレアンへのレイシフト、そこからマリーとアマデウス、ジャンヌと運良く出会い、ワイバーンから人々を救って回っていたようだ。

「これは……。先輩の疲労が最大値です。早めの休息を提案します」

私としてもその提案に賛成である。

藤丸くんの足首から下が真っ赤で痛々しい。

途方も無い距離を徒歩で移動したんだろうな。すげぇよリツカは……。

ところでマシュちゃんの村娘風衣装、イイね……。目立たないようにヴォークルールに溶け込むための変装なんだろうけど、色々目立ちまくって全然溶け込めてないところとかすっごく好きです。ね？藤丸くん。

私と藤丸くんはアイコンタクトでお互いの意思を確認し合った。彼の瞳には、「はい

！」そんな力強い返事が込められている気がする。うむ、やはり君はスジがいいネ……。『そうだね、いくらカルデア礼装の補助があるといっても元は一般人なんだし……なっ!?』

突然、Ｄｒ．ロマンが驚きの声を上げた。

画面の向こうであたふたとコンソールらしきものを叩いている。なにやらただ事じゃない様子。

それとほぼ同時に、ズンッ！と腹の底に響くような重圧が私を貫いた。尻尾の毛がブワァと逆立つ。

先の戦いの経験を踏まえ、現在常時発動させている『魔力逆流』がなんらかの異変を察知したようだ。

元々『魔力逆流』には、大気中のマナを体内に取り込み蓄える機能があったが、常時発動させる事でマナの微細な変動を捕捉するレーダーのような事も出来るようになったのだ。

しかし、なんだ、このザラザラとした感覚は。私はこの気配を知っている……？

『た、大変だ！城壁内に敵性魔力反応探知！どうして今まで気が付かなかったんだ!?霊器パターン照合……ッ!?こ、これは……！竜の魔女、ジャンヌ・ダルク・オルタだ！ほぼ同ポイントにジャンヌ・ダルクと所長の反応がある！彼女たちが危ないぞ!!』

うおらぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!
Ｄｒ．ロマンの言葉を聞き終わらないうちに、私は部屋の窓をぶち破り、夜の空気を裂くように跳躍した。
ジャンヌ・オルタがヴォークルールに侵入だと？カルデアのレーダーとゲオルギウス先生の警戒網を掻い潜って内部に潜入するなど不可能だ。
私の背中を嫌な汗が流れた。
ジャンヌ・ダルク、私が行くまでオルガマリーを守ってくれよ……！

●

街を囲っている城壁前にたどり着いた。
跳躍。城壁の上にでる。視界が開けた。
さっきの気配は、そこか！
城壁の上に２つの人影。３つじゃないのか……？
滞空が終わり、城壁に着地した。
「オルガマリー、無事か！」
人影はオルガマリーとジャンヌ・ダルクだ。

負傷しているのか？ジャンヌがオルガマリーの肩に担がれている。どうやら気絶しているらしい。ＦＧＯ初期ユーザーの希望の星だった、あの鉄壁聖女が気絶だと……？

しかしオルガさんよ。その抱え方、ちょっと男らし過ぎない……？

「……あれだけ私の気配を漏らせば流石に気付きますか。ちょっと派手にやり過ぎたわね」

うん？私はオルガマリーに駆け寄る足を止め彼女をマジマジと観察した。

いつもと違う言葉遣いに、人を蔑むように歪んだ口元、そして暗闇の中で赤く光る瞳。

ああ……そしてなにより決定的なのは、オルガマリーから竜の魔女の気配が漏れ出ている事だ。

脳裏によぎるのは、ヴラド三世の吸血行為。

この特異点に来てから、私はオルガマリーとは四六時中一緒にいた。となればこういう事が起きるトリガーはあれしかない。

「貴様……！オルガマリーに何をした！」

「誰かと思えば、あの時の道化犬（ピエロ）じゃない。ハッ、聞かれて答える馬鹿がどこにいるのよ！精々そこで吠えてなさい！悪いけどアンタのくだらない芸に付き合ってる暇は無いの、よ！」

「あっ！」

オルガマリーがジャンヌを抱えたまま城壁の外へ飛び降りた。
どこかに待機していたのか、ワイバーンが彼女らを下から掬うようにして背中に乗せて飛び立った。あの方角、オルレアンか。
『魔力放出（音）』での狙撃を。ワイバーンだけを狙い撃てるか……？
いや、ダメだ。オルガマリーに当たる。
みるみるワイバーンが遠ざかっていく。人間二人分の重さ乗せてあの速度が出せるのかよ！
こうなったら……！
「走るしかない！」
「お待ちください！」
私がまさに走り出そうとしたところに、待ったの声がかかった。ぐはぁ……！つんのめって前に転倒するも、咄嗟の前回り受け身で衝撃を逃す。いた、いた……痛くない！義務教育として柔道が課せられてるのは無駄じゃなかったんだ……！サンキュー義務教育！
「ゲオルギウス先生！来てくれたんですね！」
振り返った先には、全身に橙色の鎧を纏った堂々たる聖人の姿があった。
「ジル・ド・レエ元帥から、ヴォークルールの守りを請け負っておきながらこのような失

態を犯すとは……。何としても彼女らを取り戻します！」

自分が意識を失っている間に、再びフランスを救うため立ち上がったジャンヌが拐われたと知れば元帥は自分自身を殺しかねない。それほどの存在なのだ、彼にとってのジャンヌ・ダルクは。

過去救えなかった事を、きっと死ぬ程後悔しているに違いないのだから。

ゲオルギウス先生も、それを承知でこの剣幕なのだろう。責任感の強い人だ。

……ああ、ジル・ド・レェにとってのジャンヌ・ダルクが、自らの全てを投げ打ってでも救いたい対象であるように、俺にも護りたいものがある。彼程の覚悟はまだないが、オルガマリーとの約束を破るほど私は臆病ではない。

よォし！先生が来てくれるなら百人力だ!!

うぉぉぉぉ!!ガシィンガシィンガシィンブッピガァン！

私は気合と共に『高速巡航モード・ヨツンヴァイン（狼形態）』へと変形した。

「先生ェ！私の背中に！」

「いざッ!!」

巨大な銀狼がその背に竜殺しの聖人を乗せて、ヴォークルールから弾丸のように飛び出した。

それは野の草を刈り取る疾風の如く。

力強く大地を踏みしめ、狼が往く。

●

眼下に広がる大地を駆け、こちらを猛追してくるライダーが一騎。
「あの人狼、予想以上に速い……。聖ジョージがヴォークルールの外に出てきたのも予想外ね」
聖杯のバックアップを十全に受けたジャンヌ・オルタから見ても、聖人ゲオルギウスは強い。加えてそのドラゴン退治の逸話から、戦力の大半をワイバーンが占めるこちらとは徹底的に相性がよろしくないのも面白くない。
ヴォークルールにこれまで本格的な侵攻をかけなかった理由がそれだった。
「目の上のたんこぶ、ってやつかしら。でも、迂闊よねぇ。自分から街の外に出てきてくれるんだもの！地の利を失えば、付け入る隙もある！さあ、蹂躙なさい！バーサーク・ライダー！バーサーク・セイバー！」
ジャンヌ・オルタの命令で、ヴォークルールからの逃走経路上に待機していた二騎のサーヴァントが、霊体化を解き、その姿を現した。

●

「聖女マルタと、シュヴァリエ・デオンか……！」
オルガマリーの乗るワイバーンを守るように現れた二騎の英霊。
相手をしている暇はないというのに、こうも立ち塞がられては……！
「トール殿、いけません！彼女らをまともに相手にしては……！」
「す、すいません！でも……！」
ダメだ、視線が、意識が誘導される。
オルガマリーを追うという目的が曖昧になり、周囲への注意力が散漫になる。私の意識は、あの美しき騎士に完全に囚われていた。
シュヴァリエ・デオン、彼女の持つスキル「麗しの風貌」の効果。ゲーム内では自身へターゲット集中効果を付与する能力だったが、なるほど、現実だとこう再現されるのか……！
「精神干渉系……！」
私の異常にすぐさま反応したゲオルギウス先生が、私の耳を思いっきりつねった。
「イッ!?」
意識が目の前に引き戻される。

「トール殿！意識を強く持って！惑わされてはいけません！」
ゲオルギウスの言葉にハッと我に帰る。
目の前にはうっすらと微笑を浮かべた騎士が、流麗な動きで獲物を振り抜くのが見えた。腕から腰にかけてのしなやかな動き。軽やかな足運び。弧を描きながら煌めく白刃。
私の命を絶たんとするその一連の動作すらもが、私の心を奪う。
「はぁ！」
デオンの攻撃をゲオルギウスがアスカロンで迎撃し、私の頭上で火花が散った。
その音で再び正気に戻った私は、デオンとすれ違うようにして背後に回り込む。
頭を振って心を鎮める。ダメだ、完全にこちらの動きをコントロールされている。
空を仰げば、ワイバーンはすでに遠く。私の手の届かない距離へと飛び去っていた。
「しまった……！」
「……残念ですが、今回は敵の方が一枚上手でした。しかし大丈夫です。行き先は分かっています。さぁ、気持ちを切り替えましょう！今は目の前の障害を乗り越えるのみ！」
流石の状況判断だ。身の安全をある程度保証してくれる城壁の外へ、我々はまんまとおびき出されてしまったわけだ。今は他人の心配より自分の命の心配を。

しかし、しかしだ。先生はそう言うが、そう簡単に気持ちを切り替えられれば苦労はしない。

敵の目的は？なぜジャンヌを攫う？操られたオルガマリーは無事で済むのか？オルレアンで酷い目に合わないか？この特異点に来て、凄惨な現実の中でもめげずに人を救うことが出来て、ようやく笑顔を見せるようになったのに……。仲良くなった兵士の人は目の前で惨殺されて、挙句目が覚めたらヴラド三世の眷属にされて不安でいっぱいって顔してたんだぞ……!!

頭の中をグルグルグルグル、これまでに見てきたオルガマリーの顔が浮かんでは消えていく。

冬木で初めて出会ってからここまで、短い付き合いだったけれど。それでもボロボロだった心を必死に取り繕って、人類史のために、ここで生きる人の為にと頑張っていた彼女の姿はしっかりこの目に焼き付いている。

あんなに頑張ってる彼女を、面白半分に利用するたぁいい度胸だなぁ……！

聖女マルタにシュヴァリエ・デオン……！ジャンヌ・オルタに縛られて自由意志がないのは知ってるよ。同情もする。敵視する事に遠慮もあった。

けど、それはそっちの都合だよな。

だから私も、私の都合でアンタ達を倒す！邪魔をするなら容赦はしない！

これが私の戦う覚悟！躊躇いは捨てたぞ、もう惑わされるものか……！
「先生のお力、私に貸してください！」
「無論です。共に力を合わせがんばりましょう！」
がんばりましょうって、先生……！
この気負いの無さが、なんとも頼もしいぜ。
よっしゃぁぁぁ、それなら私も、いっちょ野生を解き放つとしますかねぇ!!
「ンヴォォォォォォォォォォォォォォロロロロロロロロロロロロァァぁぁぁ!!!」
んほぉぉぉぉ!!すっごい声出た!!!
恥ずかしさを誤魔化すように、そらぁ！突撃ィ!!!!
私の背中に跨る先生が、アスカロンを正眼に構え静かに吠えた。
「では参りましょう。すみやかに殲滅します」
……正直、負ける気がしないかなって。

第12節　臨戦

剣と剣が激しく打ち合うたび火花が弾け、それを振るう両者の顔を闇の中に浮かび上がらせた。

フランスの剣士と、大きな銀狼に跨る騎兵が激突する。騎兵は足を止めぬよう大地を駆け回り、剣士へと猛撃を加えた。

すれ違いざまに一合、二合。

騎兵の駆けた勢いは力となって、剣士を押し込む様に圧倒する。

だが剣士も然る者。二歩、三歩と巧みな足捌きで体を退き、騎兵の勢いを殺してみせる。

騎兵の勢い任せの剣は技量において剣士に及ばず、されど剣士が騎兵を圧倒するにはその圧力は高すぎた。

命のやり取りは瞬きの間に過ぎ去って行く。先程から似たような攻防が幾度も繰り返されていた。

――そして互いに距離を置くための引きの三合。鋼と鋼がぶつかり合う音を耳の奥に残して、両者は再び距離を取った。

しかし、騎兵の行く手を遮る女の影がひとつ。
「そろそろその足、止めさせて戴きますね。『刃を通さぬ竜の盾よ』！」
「甲羅が！壁になって……！先生、掴まって！」
聖女の詠唱と共に出現した身の丈を遥かに超えた巨大な甲羅が文字通り壁となって、騎兵の行く手を塞いだ。
それはただの甲羅ではない。内に秘めた膨大な神秘が、ただそこに在るだけで重圧となって二人を押し留める。
銀狼はソレに目を丸くしながら、騎兵は眉を寄せて、その突如として現れた巨壁を避けるべく逃げの一手を図った。
右へ。目の前の聖女から逃れるよう走る。
「やはり予想通りに動いてくれた。……ふふ、君の動きがよく見えるよ」
「ぐぁっ!?」
狼が痛みに呻いて前のめりに倒れ込む。
鋭く斬り付けられた左後ろ脚の肉が、パックリと裂けていた。路を塞がれた際のわずかな隙を突いて、剣士が背後から斬りつけたのだ。
騎兵はすぐさま倒れゆく狼の背中から跳躍し、返しの勢いで振るわれた剣士の剣をガッチリと受け止めた。

これまでのどれよりも甲高い音をたてて、両者の剣が激突した。騎兵は対峙する麗しい剣士の風貌に惑わされることなく、背後の狼を守るべく正面からのぶつかり合いに応じた。彼の持つ殉教者の魂は、あらゆる精神干渉を遮断する。

技量においてはより技術の洗練された近代の英雄たる剣士が勝るも、守勢にかけては騎兵も負けてはいない。彼の力は、誰かを守る時にその真の力を発揮する。

捌き切れない剣線が騎兵の鎧に徐々に傷を付けていく。だが、剣士の剣が何度騎兵を斬りつけようと、彼は一歩も退かずにその場に留まり続ける。

しかし、騎兵は背後で魔力の高まりを感じ焦りを覚えた。

（この場に縫い付けられましたか……！）

聖女の魔術攻撃が来る。騎兵は高い対魔力を持つ故に恐れる事はないが、あの狼はどうか。もし防ぐ手立てを有していなければ、彼の命はここで尽き果てる。

騎兵自身も、その後襲い来る二騎の前に力尽きてしまうかもしれない。守ると誓ったヴォークルールの、ひいてはフランスの命運が、いまこの一瞬にかかっている。

「後ろが心配かい？けれど貴方はここで釘付けにする！」

剣士が一気に攻勢に出た。

――その様、まさに刃の嵐。

「ッッッ!!」

動けない騎兵の背後で、遂に聖女の魔術攻撃が放たれた。
聖女の魔術攻撃は、祈りによって対象そのものを炸裂させる。
「トール殿……！」
騎兵の背後で魔力が爆ぜた。
肉の裂ける音。低い呻き声。
そして、メキメキとナニかが盛り上がる不気味な音がした。
「こんなところで……、負けて、たまるかよ！」
狼が立ち上がる。既に傷はふさがり、出血の後が赤く汚れた体毛から窺えたが、それだけだ。
肉体の彼方此方から骨と肉が耳障りな音を立てて、狼そのものの形状から二足で地を踏みしめるヒトの姿をした狼へと変身する。
――その者の名は、人狼。人の姿をした獣が、理性と敵意を宿した青い瞳を瞬かせ、静かに牙を剥いた。
「全魔力、解放……！カツ喰らえ！『其は有限なる小奇跡』！」
人狼はそう吠えると、その場から一瞬で掻き消えた。
騎兵に集中していた剣士は、その動きをあろうことか追いきれなかった。そも、人狼が立ち上がるとさえ予想だにしていなかったのだ。

そして人狼は聖女を意にも介さず、真っ直ぐに剣士の元へとカッ飛んできた。

「な、に……ぃ!?」

――速すぎる。剣士は異常なまでの魔力の高まりを、人狼の体内から感じた。先程とは比較にならないスピード。先の戦いで見せた、王妃の宝具を増幅させたる力の一端か。そして、その一瞬の思考が剣士の命取りとなった。

「オオオオオオオオオオ!!!!!!喰らえ!!『弁慶すら悶絶』(シンブレイカー)!!!」

ボグゥ……!という鈍い音が響き渡り、それはつまるところ剣士の右脛が破壊された事を意味していた。

「っう、ぁぁぁ!?」

しかし、流石は英雄。常人ならば発狂しかねない程の痛みすら、その意思ひとつでねじ伏せる……!

「舐めるなァ!」

気力だけで剣を横薙ぎに振るう。が、いつもより半歩踏み込みが足りない。剣先すらも人狼に届かない。――否、こちらの間合いを読んだかのような距離の取り方。

先程までの、剣士の顔に惑わされていたヤツとは違う。スキルにまで昇華された剣士の魅了を、己の意思ひとつでねじ伏せるのは容易なことではないというのに、このバケモノはそうしてみせた。

人狼が輝く右手を大きく振りかぶり、腰をグッと落とした。低姿勢から今にも飛びかからんとするこの構えは――！

（――やられる!?感情の昂りだけで、こうも強くなるものか!!）

人狼の拳が、一際強く光った。

ヤツの攻撃が、くる！

剣士は砕かれた右足とは逆、左足を軸足にして、即座に迎撃の構えをとった。

（正面から私の間合いに飛び込んでくるとは!!）

だが、その剣士の予想は大きく外れた。

「沈め！『狼牙風風拳（五連ロケットパンチ）』!!」

衝撃。

遅れてパァン！というナニカが弾ける音。

武器を隠し持っていた様子もない。

迎え撃つには十分な余裕があった。

ヤツの姿勢、目線、全身の動きから、次にどう動くか。剣士の生前培った、闘争の勘は捉え切っていたはずだ。

（だというのに、何故……？）

「……ガハッ」

吐血する。

剣士の腹に、人狼の右拳だけがメリメリと食い込んでいた。

打撃痕は、5箇所。内、4箇所はかすり傷に留まった。剣士の身に染み付いた、熟練の動きがそうさせた。

しかし、ただ一箇所。剣士の急所を。ヤツの、弾丸の如く――否、弾丸そのものとなって飛んできた右拳が貫いていた。

右拳がまるで意思を持つ生き物のようにひとりでに動いて、持ち主の元へと帰還する。

ガチョーンという音を立てて、ヤツの右腕と右拳がドッキングした。

「たとえどんな達人でも、初めて見る攻撃には対応できまい?」

「拳は、普通、飛ばないだろう……」

それが剣士の、このフランスの地での最期の言葉だった。

第１３節　挑戦

シュヴァリエ・デオンが地面に膝をつき、次の瞬間には眩ゆい光の粒子になって空間へと溶けていく。

私は肩で息をしながら、ゆっくりと背後の聖女を振り返った。

カハー！と私の口から、溜め込んでいた緊張が漏れ出ていく。

私のこの人狼の肉体は、人間に比べて遥かに頑丈で無茶がきくが、それでも上限ってもんがある。

関節は動かすたびに軋んで変な音がするし、上がった体温もなかなか下がらない。心臓は今にも爆発寸前オーバーヒートだ。

『其は有限なる小奇跡』で自己流に再現したスキル『魔力逆流』で体内に溜め込んでいた魔力も、マルタさんのエグい炸裂魔術による傷の修復と肉体強化に使い切ってしまった。

大気に充満するマナは、時代が神代に遡るほど濃密になる。イコール神秘の濃さと言い換えてもいい。

まあつまるところ、だ。神秘の薄れて久しいこの時代のフランスじゃ、オートモード

で常時魔力吸引したところでろくに魔力は溜まらないってことだ。
結論、これ以上の連戦は自殺行為だ。
いつもの私なら、デオンを運良く倒せた瞬間に、即座に逃げ出している。
だってもう、戦ったところで間違いなく死ぬからだ。
けど、今の私はひとりじゃない。ゲオルギウス先生がいるし、何よりオルガマリーを攫われて内心穏やかじゃない。一歩もここから退く気はない。
が、それはそれ。問題はどうやって聖女に勝つか。
近接では、ヤコブ神拳を修めたマルタさんには歯が立たない。かといって遠距離なら魔術が飛んできて、切札には竜種タラスクの召喚が控えてる。遠近共にこなせる万能サーヴァント。それが聖女マルタだ。
おいおい誰だよこんなチートキャラ敵として出そうと考えた奴は。はっきり言って勝てる気がしないんですけど？
それは運営、というかシナリオ担当も察していたのか、はたまた別の理由かはわからないが、バーサーク・マルタには設定的に制限がある。
彼女はジャンヌ・オルタに狂化を付与されたものの、持ち前の精神だか信仰心だかの力でそれをある程度抑え込んでいる、らしい。
だから私が三次元世界でプレイヤーとしてオルレアンを遊んだ時には、あくまで試練

として立ちふさがった。まあ完全な敵キャラじゃないってことだ。助言もくれたしな。

……ファヴニールを倒した竜殺しの英雄・ジークフリート。その居場所。

オルガマリーを奪還、そして特異点オルレアンを修正するならファヴニールとの戦闘は不可避だろう。それにはまず間違いなく、ジークフリートの助力が必要だ。

特異点に立ち向かい、修正し、人理を修復する。

それは私がゲームの中で一度やり遂げた事で、オルガマリーができなかった事だ。

人生が唐突に終わるってのは、もう仕方ない。世界にはたくさん人間が生きてるんだ。その内の何割かは確実にそういう終わり方をする奴も出てくるだろう。納得はできないが、諦めはつくさ。運が悪かったってな。

私は諦めた。だから次に来た。生まれ変わった。転生した。第二の生を受けた。

けどさ、違うだろ。

目の前真っ暗、先行き不透明で周りは敵だらけのクソみたいな状況で。足掻いて泣いて喚いて挫けて、それでもなんとか歩き続けて来た女の人生を。爆弾一つで吹き飛ばされて。それで運が悪かったです諦めますなんて、そんなの私が認めない。

魂さえも無限の炎に焼かれ続ける終わりなんざ、ココでは私が許さない。

私は私の意思で、彼女を生かす。

どこかで否定され続けた彼女の人生を、それだけでは終わらせたくない。

情が移った？
そうとも。
ここまで一緒に過ごした時間がそうさせた。
自己投影？
そうとも。
囁くんだよ、私の前世の、封じられた記憶が。
これはリベンジだ。
彼女と私のリベンジだ。
愚かな自己満足だと、笑いたくば笑えばいい。
私は生かす。彼女を救う。ハッピーエンドまで連れて行く。
生きてるって、何より素晴らしいことだから。
だからさ、こんなところで立ち止まるわけにはいかないんだよ！
「先生、まだ行けますか」
「それはこちらの台詞です。もうろくに戦う力も残っていないでしょう」
言ってくれるじゃないの。
おや、先生が私を気遣って前に出た。
「私が盾になります。あの聖女にもう奇策は通じない。正面から押し切りますよ！」

その瞬間には、私たち二人は既に駆け出していた。
先生は前へと。私に向いた聖女マルタの視線を遮るように立ち塞がるが、問答無用で私の胸が発光し、しかるのち爆発した。
グボァァァ!?
……だ、だいじょうぶ。致命傷だ。
傷を残りカスの魔力で部分的に修復する。応急処置だ。修復必須の欠損だけを回復した。
くっそ～！具体的にいうともう残機がヤバイ。ハッキリとした数は私もわからない。感覚的なものだ。
冬木からここまで、もう両の手に収まらないくらい死んでるからな……。
『其は有限なる小奇跡』は、あくまで肉体欠損の回復手段に過ぎない。聖杯にも似たこの天使からのギフトは、私の死そのものからの生還とは無関係に思える。
これは最近感じている事だ。
死に慣れてるとも言うが……。いや、慣れることはないんだが。
死ぬ時はいつもサイアクの気分だ。
意識が途切れる時の生々しい感覚。強制的に叩き起こされる時の不快さ。
生き返るたびに己の何かが欠けていく感覚には、絶対に慣れることはないだろう。

発光！

右腕！

「オオオオオオ！」

私はロックオンされた右腕に意識を集中した。吸い込め！吸い込め！吸い込め！

爆発。私の右腕はブチブチィ！という嫌な音を響かせながら魔術の光に呑まれた。

「ガァァァァァァ!?」

死ぬほど痛いわ!!

だが成功だ。

光の収まった私の右腕は、まだ繋がっている。……千切れかけてるケド。

マルタの祈りによる魔術攻撃。あれは対象そのものを炸裂させるものだ。魔弾とかの様にわかりやすく飛んで来てくれるなら躱すなり上手く防御するなりなんらかの対策が打てるんだが、いきなり炸裂するんじゃ対処の仕様がない。

が、やっぱり何にでも抜け道はあるもんだな。

マルタの魔術攻撃の対象は、私の肉体そのものだ。私の肉体の内部、例えば骨とか筋肉とか内臓とかを無作為に範囲選択してそいつを遠隔起爆するような、そんなエグい攻撃だ。

それがどういう理屈かは知らないが、結局媒介となるのは「魔力」。

摩訶不思議な未知のパワーってわけじゃない。
そうとわかれば、『魔力逆流』でいくらでもやりようはある。体外と体内の違い、タイミングの問題さえ解決すればいい。今ので大体のコツは掴めた。次は完全に吸収してやる……！
「今ので魔力リチャージ率３％ってところだな……」
先生の身体が光った。
が、何も起こらない。おそらく高ランクの対魔力だ。魔力を媒介にしている以上、先生にはマルタの魔術攻撃は一切通用しないのだろう。
先生のアスカロンとマルタの杖が遂に激突した。
激しい近接戦闘。流石にこの間は祈りも使えないと見た！先生が時間を稼いでくれている。
さっき先生が言った正面から押し切るという言葉。これまでの戦闘経験やら私の能力については、ヴォークルールで初めて会った時に先生には明かしてある。
つまりトドメは任せたということ。あるいはそれに繋がる大技の発動を期待されている。
その為には魔力のリチャージが必要だ。
『其は有限なる小奇跡』さんは燃費悪いからな。まあ５０％もリチャージできればどデ

カイ花火くらいは打ち上げられそうだ。
そのためには魔力、魔力が必要なんだが……。
私はゴソゴソと身体をまさぐった。
指先にチクリときた物体を掴んで取り出す。
それは虹色に輝くモヤットボール。
「あったよ！・聖晶石が！！」